

栗林遺跡発掘調査報告書

栗林地区築堤建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査

- 2 0 0 1 -

長野県中野市教育委員会

栗林遺跡発掘調査報告書

栗林地区築堤建設工事に伴う

埋藏文化財発掘調査

- 2 0 0 1 -

長野県中野市教育委員会

刊行にあたって

本報告書は信濃川水系工事実施基本計画に基づく洪水防御のための中野市栗林地区築堤建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

中野市高丘地区には多くの遺跡が分布しており、上信越自動車道や県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路建設、特定環境保全公共下水道事業高丘終末処理場建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査が実施され、多大な成果を納めたことは記憶に新しいところである。

調査の対象となった栗林遺跡は、中部高地の弥生時代中期後半を代表する遺跡の一つである。栗林遺跡研究の歴史は長く、すでに何度かの調査も実施されてはいるが、遺跡の規模が大変大きく、その概要が少しづつわかりはじめたのは、最近のことである。

調査地点は広い栗林遺跡の南西端に位置し、耕地として利用された地域であり、また旧千曲川河道部分でもあり千曲川の浸食により遺跡の遺存状況は良くないだろうと考えていた。調査の結果、一部ではそうした状況が認められたものの、多くの住居跡、土坑、礫床木棺墓など発見し、大きな成果をあげた。

また、こうした埋蔵文化財が建設省北陸地方整備局千曲川工事事務所他の関係諸機関や地元住民の理解と協力により、事前調査が実施され、その成果を報告書として上梓できることを誇りに思うとともに、改めて関係各位に篤く感謝の意を表したい。

平成13年3月16日

長野県中野市教育委員会
教育長 宮川 洋一

例　　言

1. 本報告書は、信濃川水系工事実施基本計画に基づく洪水防御のための長野県中野市栗林地区築堤建設工事に伴う栗林遺跡の発掘調査成果を報告したものである。

2. 調査は築堤建設工事に伴う事前調査として実施し、建設省北陸地方整備局千曲川工事事務所より委託事業として、長野県中野市教育委員会が実施した。

3. 発掘調査期間

第1次発掘調査(平成9年度) 1997年7月14日～1998年3月31日

第2次発掘調査(平成10年度) 1998年7月1日～1999年3月31日

第3次発掘調査(平成11年度) 1999年5月6日～2000年3月20日

4. 発掘調査の組織

調査主任 中島 庄一(中野市教育委員会 学芸員)

徳竹 雅之(中野市教育委員会 学芸員)

調査員 関 武

作業員 青木 寅雄、青木 文雄、朝倉 義則、浅沼 紀道、畔上ちよ子、阿藤千代江、

阿部 留吉、有賀 徳吉、伊浦 和能、池田 三良、池田 実、池田 良高、

石川 清子、今井百合子、岩下 昭吉、岩戸 雅彦、岩本 樊正、上田 邦夫、

尾坂 岩男、小崎 延子、小野沢時子、川口 耐子、黒岩 豊栄、黒鳥甲子光、

小橋ふみ子、小林敬左治、小林 定子、小林 資成、小林ノブエ、小林 昇、

小林ふみえ、小林 正人、小林理兵衛、小林 札治、坂口 二郎、清水やす子、

関 昭三、関 利夫、高相 三男、高野十二郎、高橋 信子、田河 正文、

滝沢嘉一郎、竹田 保夫、竹内宋一郎、竹内 實雄、竹内 三男、月岡 貞雄、

遠山 信雄、徳竹 良男、徳竹 喜春、徳永 徳一、中川 憲、中林 喜一、

中村 正好、永池 甫、橋内 賢裕、樋口 洋一、藤木 利高、保倉甲子郎、

堀川 章、水野 和夫、武藤 良助、村上 治、村田 宗之、山岸 福雄、

山岸万治郎、山口 久江、山田 恒夫、山本 直治、湯本 昭治、湯本 美雄、

依田 利人、米山 福通、渡辺三千代、割田 武治

5. 報告書作成の分担

執 筆 中島 庄一

遺 物 実 測 中島 庄一・山岸 美春・山本麻由美

遺物拓本	山岸 美春・山本麻由美
土器接合	関 武・山岸 美春・山本麻由美
遺物トレース	山岸 美春・山本麻由美
遺構トレース	山岸 美春・山本麻由美
遺構・遺物写真	中島 庄一・竹田 保夫・坂口 二郎
段組・構成	中島 庄一・岩戸 雅彦・山岸 美春・山本麻由美

6. 出土遺物・遺構の図面・拓本・写真等は、長野県中野市歴史民俗資料館で保管している。

凡　例

1. 遺構の名称は略称を用いた。各遺構記号の性格は下記の通りである。但し、各遺構記号は調査段階で付されたものであり、その後の整理で性格が異なっていても、遺構記号を付け替えていない場合がある。

S B : 積穴式住居 S H : 堀立柱建物跡 S K : 土坑 S Q : 墓跡

2. 本報告書に掲載された実測図の縮尺は原則として下記の通りである。

遺構 : 1/30 または 1/60、遺構全体図 : 不定

土器 : 1/4、石器 : 1/1 または 1/3

3. 実測図に用いたスクリーントーンは以下の通りである。

① 遺構実測図

焼土・炉 炭化物分布範囲



② 遺物実測図

土 器

黒色処理



石 器

摩耗痕



【本文目次】

刊行にあたって	i
例言	ii
凡例	iv
本文目次	v
第1章 発掘調査の概要	1
第1節 発掘調査の概要	1
第2節 発掘調査の経過	2
1. 平成9年度の発掘調査	2
2. 平成10年度の発掘調査	4
3. 平成11年度の発掘調査	5
第2章 自然環境と遺跡の立地	7
第1節 中野市の自然環境	7
第2節 栗林遺跡の立地	8
第3節 周辺の遺跡	12
第3章 遺構・遺物	25
第1節 弥生時代の遺構	25
1. 概要	25
2. 壴穴式住居跡	25
3. 掘立柱建物跡	30
4. 積床木棺墓	31
5. 木棺墓	34
6. 土坑墓	45
7. 土坑	46
第2節 弥生時代の土器	50
第3節 古墳時代の土器	60
第4節 平安時代以降の遺構	64
1. 概要	64
2. 壴穴式住居跡	64
3. 掘立柱建物跡	105
第5節 平安時代以降の土器	111

【挿図目次】

第1図 土層図	第8図 全体図(弥生時代の遺構)
第2図 グリッド配置図	第9図 全体図(平安時代の遺構)
第3図 中野市の自然環境	第10図 壴穴式住居跡(1)
第4図 段丘地形区分	第11図 壴穴式住居跡(2)
第5図 栗林遺跡の範囲	第12図 掘立柱建物跡(1)
第6図 中野市の主な弥生時代の遺跡	第13図 掘立柱建物跡(2)
第7図 栗林遺跡周辺の主な遺跡	第14図 掘立柱建物跡(3)

- 第 15 図 碑床木棺墓群(1)
第 16 図 碑床木棺墓群(2)
第 17 図 碑床木棺墓(1)
第 18 図 碑床木棺墓(2)
第 19 図 碑床木棺墓(3)
第 20 図 碑床木棺墓(4)
第 21 図 碑床木棺墓(5)
第 22 図 碑床木棺墓(6)
第 23 図 木棺墓群
第 24 図 木棺墓(1)
第 25 図 木棺墓(2)
第 26 図 土坑墓
第 27 図 土坑
第 28 図 弥生住居跡出土の土器
第 29 図 弥生時代の土器(1)
第 30 図 弥生時代の土器(2)
第 31 図 弥生時代の土器(3)
第 32 図 弥生時代の土器(4)
第 33 図 弥生時代の土器(5)
第 34 図 弥生時代の土器(6)
第 35 図 弥生時代の土器(7)
第 36 図 古墳時代の土器(1)
第 37 図 古墳時代の土器(2)
第 38 図 古墳時代の土器(3)
第 39 図 壴穴式住居跡(3)
第 40 図 壴穴式住居跡(4)
第 41 図 壴穴式住居跡(5)
第 42 図 壴穴式住居跡(6)
第 43 図 壴穴式住居跡(7)
第 44 図 壴穴式住居跡(8)
第 45 図 壴穴式住居跡(9)
第 46 図 壴穴式住居跡(10)
第 47 図 壴穴式住居跡(11)
第 48 図 壴穴式住居跡(12)
第 49 図 壴穴式住居跡(13)
第 50 図 壴穴式住居跡(14)
第 51 図 壴穴式住居跡(15)
第 52 図 壴穴式住居跡(16)
第 53 図 壴穴式住居跡(17)
第 54 図 壴穴式住居跡(18)
第 55 図 壴穴式住居跡(19)
第 56 図 壴穴式住居跡(20)
第 57 図 壴穴式住居跡(21)
第 58 図 壴穴式住居跡(22)
第 59 図 壴穴式住居跡(23)
第 60 図 壴穴式住居跡(24)
第 61 図 壴穴式住居跡(25)
第 62 図 壴穴式住居跡(26)
第 63 図 壴穴式住居跡(27)
第 64 図 壴穴式住居跡(28)
第 65 図 壴穴式住居跡(29)
第 66 図 壴穴式住居跡(30)
第 67 図 掘立柱建物跡(4)
第 68 図 掘立柱建物跡(5)
第 69 図 掘立柱建物跡(6)
第 70 国 掘立柱建物跡(7)
第 71 国 掘立柱建物跡(8)
第 72 国 平安住居跡出土の土器(1)
第 73 国 平安住居跡出土の土器(2)
第 74 国 平安住居跡出土の土器(3)
第 75 国 平安住居跡出土の土器(4)
第 76 国 平安住居跡出土の土器(5)
第 77 国 平安住居跡出土の土器(6)
第 78 国 平安住居跡出土の土器(7)
第 79 国 平安住居跡出土の土器(8)
第 80 国 平安住居跡出土の土器(9)
第 81 国 平安住居跡出土の土器(10)
第 82 国 平安住居跡出土の土器(11)

第 83 図 平安住居跡出土の土器(12)	第 90 図 石器(1)
第 84 図 平安時代の土器(1)	第 91 図 石器(2)
第 85 図 平安時代の土器(2)	第 92 図 石器(3)
第 86 図 平安時代の土器(3)	第 93 図 石器(4)
第 87 図 平安時代の土器(4)	第 94 図 石器(5)
第 88 図 平安時代の土器(5)	第 95 図 石器(6)
第 89 図 平安時代の土器(6)	第 96 図 石器(7)

【挿 表 目 次】

表 1 丘陵地の段丘面区分	表 6 弥生時代の土器観察表
表 2 堪穴式住居跡一覧表	表 7 古墳時代の土器観察表
表 3 挖立柱建物跡一覧表	表 8 平安住居跡出土の土器観察表
表 4 SQ一覧表	表 9 平安時代以降の土器観察表
表 5 SK一覧表	表 10 石器観察表

【写 真 目 次】

写真 1 作業風景 1	写真 15 第 6 号住居跡集石下遺物
写真 2 作業風景 2	写真 16 第 7 号住居跡カマド
写真 3 作業風景 3	写真 17 第 8、9 号住居跡
写真 4 作業風景 4	写真 18 第 8 号住居跡出土石帶
写真 5 第 1 号住居跡	写真 19 第 10 号住居跡
写真 6 第 2 号住居跡	写真 20 第 10 号住居跡カマド
写真 7 第 3 号住居跡	写真 21 第 11、12 号住居跡
写真 8 第 4、5、16 号住居跡	写真 22 第 11 号住居跡
写真 9 第 4 号住居跡	写真 23 第 13 号住居跡
写真 10 第 4 号住居跡カマド	写真 24 第 14 号住居跡
写真 11 第 5 号住居跡	写真 25 第 15 号住居跡
写真 12 第 6、7 号住居跡	写真 26 第 15 号住居跡カマド
写真 13 第 6 号住居跡カマド	写真 27 第 17、21、22 号住居跡
写真 14 第 6 号住居跡集石	写真 28 第 18 号住居跡

- 写真 29 第 19 号住居跡
写真 30 第 20 号住居跡
写真 31 第 23、24 号住居跡
写真 32 第 23 号住居跡
写真 33 第 24 号住居跡
写真 34 第 25 号住居跡
写真 35 第 25 号住居跡カマド
写真 36 第 26 号住居跡
写真 37 第 27 号住居跡
写真 38 第 28 号住居跡
写真 39 第 28 号住居跡カマド
写真 40 第 29 号住居跡
写真 41 第 29 号住居跡カマド
写真 42 第 30 号住居跡
写真 43 第 30 号住居跡カマド
写真 44 第 31 号住居跡カマド
写真 45 第 32 号住居跡
写真 46 第 32 号住居跡カマド
写真 47 第 33 号住居跡
写真 48 第 33 号住居跡カマド
写真 49 第 34 号住居跡
写真 50 第 34 号住居跡カマド
写真 51 第 36 号住居跡カマド
写真 52 第 37 号住居跡
写真 53 第 38 号住居跡
写真 54 第 38 号住居跡カマド
写真 55 第 39 号住居跡
写真 56 第 40 号住居跡
写真 57 第 41 号住居跡
写真 58 第 42 号住居跡
写真 59 第 42 号住居跡カマド
写真 60 第 43 号住居跡
写真 61 第 43 号住居跡カマド
写真 62 第 44 号住居跡
写真 63 第 44 号住居跡カマド
写真 64 第 45 号住居跡カマド
写真 65 第 46 号住居跡
写真 66 第 46 号住居跡カマド
写真 67 第 47 号住居跡
写真 68 第 1 号掘立柱建物跡
写真 69 第 2 号掘立柱建物跡
写真 70 第 3 号掘立柱建物跡
写真 71 第 4 号掘立柱建物跡
写真 72 第 5 号掘立柱建物跡
写真 73 第 6、7 号掘立柱建物跡
写真 74 第 10 号掘立柱建物跡
写真 75 第 11、12 号掘立柱建物跡
写真 76 第 13 号掘立柱建物跡
写真 77 第 14 号掘立柱建物跡
写真 78 第 16 号掘立柱建物跡
写真 79 II 区礎床墓集石全景
写真 80 II 区礎床墓集石全景縱板小口跡検出
写真 81 II 区礎床墓集石全景縱板小口跡完掘
写真 82 III 区木棺墓群全景
写真 83 第 1 号礎床木棺墓集石
写真 84 第 2 号礎床木棺墓集石
写真 85 第 3 号礎床木棺墓集石
写真 86 第 3 号礎床木棺墓完掘
写真 87 第 4 号礎床木棺墓集石
写真 88 第 4 号礎床木棺墓完掘
写真 89 第 5 号礎床木棺墓集石
写真 90 第 5 号礎床木棺墓完掘
写真 91 第 6 号礎床木棺墓集石
写真 92 第 6 号礎床木棺墓完掘
写真 93 第 7 号礎床木棺墓集石
写真 94 第 7 号礎床木棺墓小口跡
写真 95 第 8 号礎床木棺墓集石
写真 96 第 8 号礎床木棺墓小口跡

- 写真 97 第 9 号砾床木棺墓集石
写真 98 第 10 号砾床木棺墓集石
写真 99 第 10 号砾床木棺墓完掘
写真 100 第 11 号砾床木棺墓集石
写真 101 第 11 号砾床木棺墓完掘
写真 102 第 11 号砾床木棺墓セクション
写真 103 第 11 号砾床木棺墓セクション
写真 104 第 12 号砾床木棺墓集石
写真 105 第 12 号砾床木棺墓完掘
写真 106 第 13 号砾床木棺墓集石
写真 107 第 14 号砾床木棺墓集石
写真 108 第 14 号砾床木棺墓完掘
写真 109 第 15 号砾床木棺墓集石
写真 110 第 15 号砾床木棺墓完掘
写真 111 第 16 号砾床木棺墓集石
写真 112 第 16 号砾床木棺墓完掘
写真 113 第 17 号砾床木棺墓集石
写真 114 第 17 号砾床木棺墓完掘
写真 115 第 18 号砾床木棺墓集石
写真 116 第 18 号砾床木棺墓完掘
写真 117 第 19 号砾床木棺墓集石
写真 118 第 20 号砾床木棺墓集石
写真 119 第 20 号砾床木棺墓完掘
写真 120 第 1 号木棺墓
写真 121 第 2 号木棺墓
写真 122 第 3 号木棺墓
写真 123 第 4 号木棺墓
写真 124 第 6 号木棺墓
写真 125 第 7 号木棺墓
写真 126 第 8 号木棺墓
写真 127 第 9 号木棺墓
写真 128 第 10 号木棺墓
写真 129 第 11 号木棺墓
写真 130 第 1 号土坑墓
写真 131 第 2 号土坑墓
写真 132 第 3 号土坑墓
写真 133 第 4 号土坑墓
写真 134 第 6 号土坑墓
写真 135 第 1 号土坑
写真 136 第 2 号土坑
写真 137 第 3 号土坑
写真 138 第 4 号土坑
写真 139 第 5 号土坑
写真 140 第 7 号土坑
写真 141 第 9 号土坑
写真 142 打製石器集中
写真 143 石器(1)
写真 144 石器(2)
写真 145 石器(3)
写真 146 石器(4 表)
写真 147 石器(4 裏)
写真 148 石器(5)
写真 149 石器(6)
写真 150 石器(7)
写真 151 石器(8)

第1章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の概要

本調査は千曲川の築堤工事に伴う事前調査の報告である。調査の対象面積は約1万2千平米であった。まとめて、短年度内に実施することは無理であったため、三ヵ年の発掘調査と、一ヵ年の整理期間に分けて実施した。発掘調査は平成9年から、11年度、整理は平成12年度である。

栗林遺跡は千曲川に沿って形成された自然堤防上にある。遺跡は栗林集落と牛出集落にわたり、細長く分布している。栗林遺跡でもっとも注目されているのは弥生時代であろう。栗林遺跡における弥生時代の集落は現時点では三箇所に確認されている。遺跡の最北部の松原地籍、ほぼ中間の北原地籍、南の栗ノ木地籍である。それぞれの集落を北のムラ、中のムラ、南のムラと呼んでいる。

今回の調査では、これまで、南の集落と呼んでいる地点より、さらに集落が分布しているのかどうか確認することが大きな課題の一つであった。

しかし、今回の調査では、一部、弥生時代の住跡を検出したが、弥生時代の大きな集落を確認することはできなかったが、多くの弥生土器が見つかっている。これらの土器片は集中して検出される傾向はあるが、それに伴う住居跡などの遺構は確認することができなかった。これは、発掘調査技術が未熟であったために、遺構が確認できなかったことに起因するかもしれないが、それぞれの弥生土器が集中する地点に廃棄されたものかも知れない。

今回の調査で、もっとも注目されるのは三地点から検出された弥生時代中期の墓壙である。周辺で住居跡などの遺構は検出されず、それぞれ独立して検出された。墓壙は木棺墓と疊床墓に分類され、墓群は發

掘区の南、中ほど、北側に分布する。

調査区の北に分布する墓群は、先年、調査した下水道処理施設建設に伴う事前調査で実施した発掘調査区に隣接している。下水道処理施設では、中期末から後期初頭の集落が発見されており、今回の調査で検出した墓群は、この集落に伴う墓群と考えることができるかも知れない。

しかし、取り残された二つの墓群に相応する集落が必要である。これには、二つの仮説が考えら得る。ひとつはそれぞれに対応する集落があるが、見つかっていない。もうひとつは、発掘調査が未熟だったために、住居群を検出できなかつたという可能性もある。土器の集中する個所などは住居の可能性も考えて調査したが、それらが住居であるとは確認できなかつた。

また、栗林遺跡が改めて古墳時代や古代の遺跡であることが確認されたことも注目される。特に、古代の住居はいくつもきり合い、集落としての存続期間が長かったと思われることも重要である。

第2節 発掘調査の概要と経過

1. 平成9年度の発掘調査(1997年)

調査概要

平成9年度の発掘調査は、平成9年7月14日に始まり、平成10年3月31日に終了した。

平成9年度の調査は、築堤用地のうち遺跡分布範囲内にあたる地域を対象とし、用地買収の完了した約4,500m²を平成9年度の調査対象とした。なお調査区全体を時代によって平安時代検出面(第1面)、古墳弥生時代検出面(第2面)、縄文時代検出面(第3面)の3層に分け調査を行うこととした(第1図)。調査方法の都合により調査区を2つに分け、I区・II区とし、グリット設定は第2図に示すとおりで、1グリット4m×4mとした。平成9年度調査面積のうち第1面はほぼ調査を終了し、第2面・第3面のうち調査の未完了部分については次年度継続とした。

平成9年度の調査において、縄文時代前期・弥生時代中期・古墳時代前期・平安時代の遺構及び遺物を検出した。I区では縄文前期の土坑・弥生時代中期の掘建柱建物跡・土坑・土器集中地点、古墳時代の土器集中地点、平安時代の堅穴式住居跡・土坑墓・火葬施設・土坑・溝状遺構を検出した。II区では弥生時代中期の土器集中地点、平安時代の堅穴式住居跡・土坑墓・火葬施設・土坑・溝状遺構を検出した。また裸床土坑墓が集中した墓址群を検出した。遺物については縄文時代の土器・石器、弥生時代の土器・石器・玉類、古墳時代の土器、平安時代の土器、灰釉陶器、綠釉陶器を検出した。特筆すべきものとして、SB-4より石器及び鉄器を検出した。

調査日誌(抄)

7月23日 用具搬入、テント設営。I区トレンチ入れを行ひ遺構・遺物の状況を確認。

24日 トレンチ入れを継続。I区西側の表土剥ぎを行い、平安時代検出面まで掘り下げ。SB-9を検出。

25日 石組状の遺構を確認。

28日 新たに石組状の遺構を確認。

30日 表土剥ぎをI区東側へ広げる。

8月7日 SB-1~7を検出、精査を開始。I区北側旧千曲川河道部分の重機による掘り下げを開始。

11日 SB-8、10、11を検出、精査を開始。

12日 SB-13~15を検出、精査を開始。

18日 I区北側旧千曲川河道部分の遺構確認のため重機によるトレンチ掘りを開始。

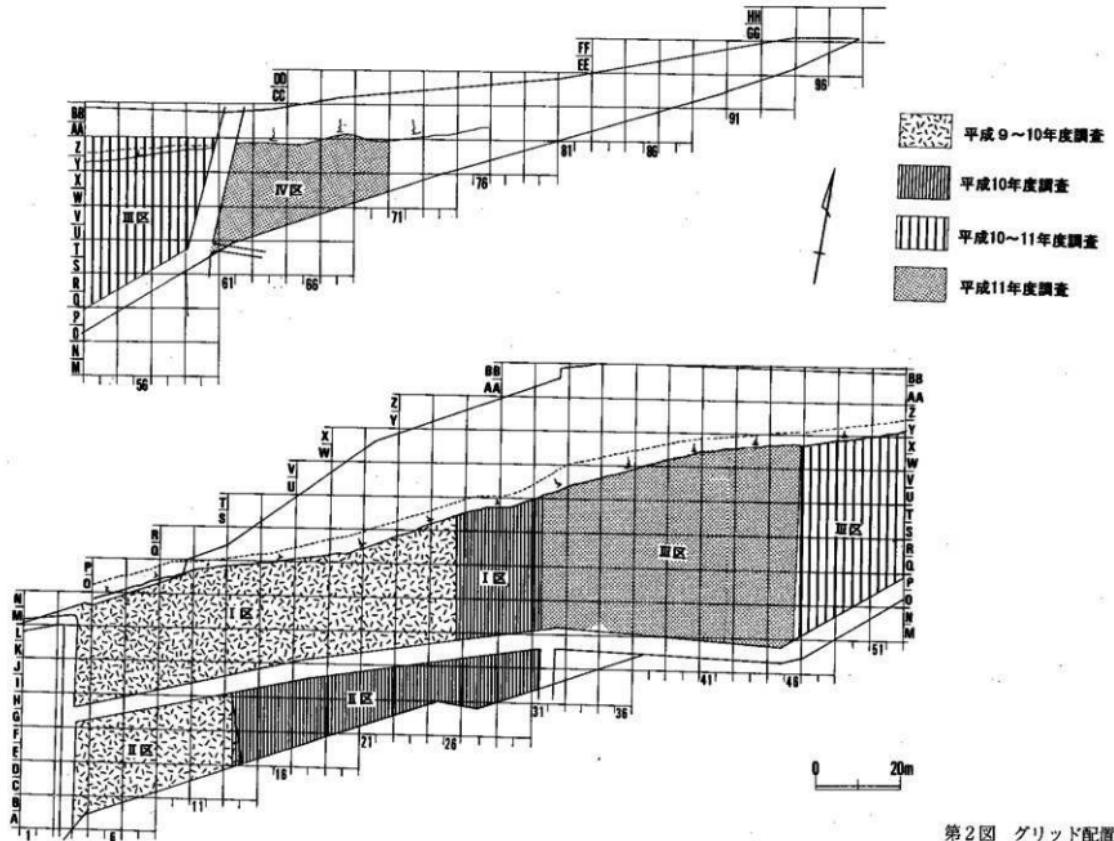
21日 I区北側旧千曲川河道部分のトレンチ掘りの結果、千曲川の浸食により遺構面の流出崩落が判明。埋め戻しを開始。

25日 SB-17を検出、精査を開始。

9月1日 II区のトレンチ入れを開始。

中世・近世層	I	暗茶褐色土(耕土)
	II a	黄褐色土(糞耕土)
	II b	黄褐色砂質土
平安層	III	暗茶褐色砂質土
	IV	暗黃褐色土
	V a	黑褐色土
	V b	黑茶褐色土(糞の塊)
弥生・古墳層	VI	黄色粘質土
	VII	赤茶褐色粘質土
縄文層	VIII	暗黃褐色粘質土
	IX	

第1図 土層図



第2図 グリッド配置図

- 2日 SB-21~24 を検出、精査を開始。
4日 SB-25 を検出、精査を開始。
5日 集石遺構を確認。
19日 SB-34 を検出、精査を開始。
10月3日 SB-39 を検出、精査を開始。
29日 用具の整理、テントの解体。
30日~平成10年3月31日 図面整理、資料整理。

2. 平成10年度の発掘調査(1998年)

調査概要

平成10年度の発掘調査は、平成10年7月13日に始まり、平成11年3月31日に終了した。

平成9年度年に続き平成10年度の発掘調査も築堤用地のうち遺跡分布範囲内にあたる地区を対象とし、平成10年度分調査面積のうち約4,000m²について行った。なお、調査方法の都合により、調査区を4つに分けI区、II区、III区、IV区とし、各区の調査を平安時代検出面、古墳・弥生時代検出面、縄文時代検出面の3面に分け行うこととした。I区、II区は平成9年度調査未完了部分の古墳・弥生時代検出面、縄文時代検出面の下層2面に加え新たに北東方向に延長した。更にI区北東の用地買収の未完了部分を境として、III区、IV区を設定し、III区は平安時代検出面の調査を終了し、IV区は一部表土剥ぎと試掘を行い、残りを次年度継続とした。

平成10年度の調査において、縄文時代前期・後期初頭・弥生時代中期・古墳時代前期・平安時代・中世・近世の遺構及び遺物を検出した。I区前年度継続地区では縄文時代の土器集中地点・埋葬遺構、弥生時代の掘建柱建物跡・土坑を検出した。I区新規調査区では弥生時代の竪穴式住居跡・掘建柱建物跡・土坑・埋葬遺構・土器埋納ビット・溝状遺構、土器集中地点、古墳時代の土器集中地点、平安時代の竪穴式住居跡・掘建柱建物跡・土坑・時期不明の

石器埋納遺構を検出した。II区前年度継続地区では縄文時代の土器集中地点、弥生時代の礫床墓・土坑墓・木棺墓・土器集中地点、平安時代の土坑・時期不明の掘建柱建物跡を検出した。II区新規調査区では縄文時代の土器集中地点、弥生時代の土坑・溝状遺構・土器集中地点、平安時代の竪穴式住居跡・火葬施設・土坑・溝状遺構・時期不明の掘建柱建物跡・土坑・溝状遺構を検出した。III区では平安時代の竪穴式住居跡・火葬施設・土坑・土坑墓・溝状遺構を検出した。IV区試掘では調査予定区の大半が旧千曲川の影響により包含層を失っていた。

調査日誌(抄)

- 7月13日 用具搬入、テント設営。
17日 前年度継続地区遺構保護の盛土除去を開始。
21日 本調査開始。
24日 I区新規調査区トレチ入れ、表土剥ぎを開始。II区前年度継続地区で新たに礫床墓を検出、精査を開始。
29日 I区前年度継続地区調査終了。
8月3日 II区新規調査区トレチ入れ、表土剥ぎを開始。
4日 II区前年度継続地区でSH-11、12・土器集中地点・新たな礫床墓を検出、精査を開始。
5日 I区新規調査区で住居跡・溝状遺構・ビットを検出。
6日 I区新規調査区で住居跡・溝状遺構・ビットの精査を開始。II区新規調査区で平安時代の土器集中地点・掘建柱建物跡・溝状遺構・SKを検出、精査を開始。
18日 I区新規調査区で新たに住居跡を検出、精査を開始。III区トレチ入れ、表土剥ぎを開始。
9月2日 II区前年度継続地区で木棺墓を多数検出、精査を開始。弥生時代の集団墓群と思

われる。

4日 II区前年度継続地区で縄文時代の土器集中地点を検出、精査を開始。

11日 I区新規調査区で古墳時代の土器集中地点を検出、精査を開始。

18日 III区で9カ所のSBを検出、精査を開始。

29日 III区でSB-56、57、66、67、75を検出、精査を開始。

10月18日 IV区トレチ入れ、表土剥ぎを開始。

23日 I区新規調査区で埋甕遺構・打製石斧集中地点、弥生時代の土器集中地点を検出、精査を開始。

27日 II区新規調査区調査終了。

30日 II区前年度継続地区調査終了。

11月13日 III区で弥生時代の土器集中地点を検出、精査を開始。

26日 I区新規調査区で新たに埋甕遺構・掘建柱建物跡を検出、精査を開始。

27日 IV区表土剥ぎ終了。

12月14日 市内の小学生による発掘体験学習が行われる。

15日 I区新規調査区調査終了。

18日 市内の小学生による発掘体験学習が行われる。III区調査終了。テント解体、用具片付け。

21日～平成11年3月31日 図面整理、資料整理。

3. 平成11年度の発掘調査(1999年)

調査概要

平成11年度の発掘調査は、平成11年5月24日に始まり、平成12年3月31日に終了した。

平成9年度・平成10年度に続き平成11年度発掘調査も築堤用地のうち遺跡分布範囲内にあたる地区を対象とし、平成11年度分調査面積の

うち約4,000m²について行った。なお、調査方法の都合により、調査区を4つに分けI区、II区、III区、IV区とし、各区の調査を平安時代検出面、古墳弥生時代検出面、縄文時代検出面の3面に分け行うこととした。III区は平成10年度調査未完了の弥生時代検出面、縄文時代検出面の下層2面に加えて、I区北東の新たに用地買収が完了した部分について発掘調査を行った。IV区は平成10年度に一部表土剥ぎ・試掘を行なわなかった部分を発掘調査した。

平成11年度の調査において、縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中世・近世の遺物を検出し、弥生時代・平安時代の遺構を検出した。各地区的主な遺構は、III区新規調査地区では平安時代の住居跡・土坑、弥生時代の住居跡・土坑・時期不明の掘建柱住居跡・隅丸長方形周溝遺構を検出した。III区前年度継続調査地区では弥生時代の住居跡・土坑・木棺墓群を検出した。IV区では弥生時代の床板墓群を検出した。特筆すべきものとしては、弥生時代のふたつの墓地群、平安時代のSB-114の特殊な形態のかまど、時期は不明であるがSH-23は、柱の大きさ・建物の規模から非常に大きな掘建柱建物跡とみられる。

調査日誌(抄)

5月24日 III区新規調査区で表土剥ぎを開始。

6月1日 本格的な発掘作業を開始。

2日 III区新規調査区でSB-85を検出、精査を開始。

3日 III区新規調査区でSB-86、88を検出、精査を開始。

4日 III区新規調査区でSB-111を検出、精査を開始。

21日 III区前年度継続調査区遺構保護の盛土除去を開始。

7月19日 III区新規調査区でSB-114、115、117を検出、精査を開始。

- 28日 III区新規調査区で SB-118 を検出、精査を開始。
- 8月2日 III区新規調査区で重機により再度掘り下げ、古墳時代層の検出。
- 6日 III区新規調査区で SH-23 を検出、精査を開始。
- 18日 III区新規調査区で重機により再度掘り下げ、弥生時代層の検出。
- 30日 III区前年度継続調査区で SK群(土坑墓)を検出、精査を開始。
- 9月6日 III区新規調査区で SK-172 を検出、精査を開始。
- 8日 III区前年度継続調査区で SK-195 を検出、精査を開始。
- 16日 IV区重機により掘り下げ、弥生時代層の検出。
- 27日 III区前年度継続調査区で SK-186、208、209 を検出、精査を開始。
- 10月1日 III区前年度継続調査区で SB-143 を検出、精査を開始。
- 8日 IV区で SQ-56 を検出、精査を開始。
- 12日 IV区で SQ-62 を検出、精査を開始。
- 13日 IV区で SQ-76、77 を検出、精査を開始。
- 19日 IV区で SQ-85、86 を検出、精査を開始。
- 20日 IV区で SQ-84、87、88 を検出、精査を開始。
- 21日 IV区で SQ-90 を検出、精査を開始。
- 29日 テント解体、用具片付け。
- 11月1日～平成12年3月31日 図面整理、資料整理。

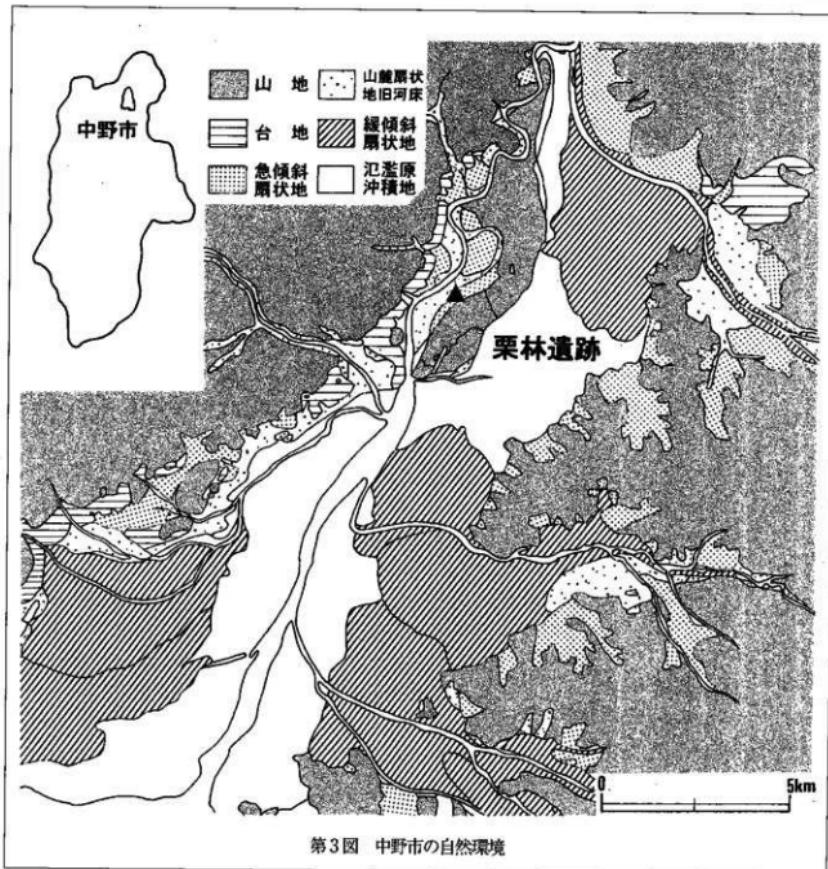
第2章 自然環境と遺跡の立地

第1節 中野市の自然環境

栗林遺跡は長野県中野市栗林地籍に所在する。中野市は長野盆地の最北端に位置し、長野盆地の北側に位置する飯山盆地と隣接する。長野盆地は中部高地最大の盆地で、南北に長い紡錘形状を呈し、ほぼ

中央を千曲川(信濃川)が北流する。盆地の東西を画する山地は西部山地、河東山地と呼ばれ、新潟・群馬両県との県境となっている。盆地の低地部には自然堤防と東西の山地から流入する河川が形成する扇状地が発達する。中野市は長野盆地の最も北に位置する典型的な扇状地地形上(中野扇状地)に位置している(第3図)。

中野市の地形は大きく山地、扇状地、盆地底部、



丘陵に区分され、東の河東山地から流入する夜間瀬川が形成した扇状地地形が市域の大半を占め、河東山地から広がる扇状地の先端は西部山地の裾部に形成された高丘・長丘丘陵に接する。高丘・長丘丘陵と西部山地の間に千曲川がかん入し、西部山地と高丘・長丘丘陵を南北に切り離している。栗林遺跡はこの中野市の西端、高丘・長丘丘陵に位置している。

高丘・長丘丘陵は西部山地の間に千曲川を挟み南北に延びる細長い丘陵で、標高が高く険しい北側部分と標高が低く平坦な地形をなす南端部からなり、南端部分は高丘丘陵と呼ばれる。丘陵の東側と西側では異なる地形環境が形成されている。すなわち、西側は千曲川と面し河岸段丘が発達し緩やかな地形をなし、東側は急な斜面を形成しながら盆地底部の扇状地と接している。

第2節 栗林遺跡の立地

栗林遺跡は河岸段丘地形が発達する丘陵の西側に位置している。

遺跡周辺の高丘丘陵には四つの段丘面が認められ、III-1、III-2、IV、V面と呼ばれる(渡辺・1994)。それぞれ盆地底部との比高70~90m、40~60m、10~30m、10m未満を測り、遺跡は最も下位のV面上に位置している(第1表、第4図)。

栗林遺跡は幅約300mで南北に約4kmにわたり細長く延びる河岸段丘面上の北端から、約1.5kmの地点まで広がっていると思われる。段丘面は浅い谷で所々分断される。場合によっては後背湿地状を呈する部分も認められ、緩やかに起伏する。今回の調査区は遺跡の南西端部分に近いと思われるが、遺跡の

第1表 丘陵地の段丘面区分

段丘面区分	盆地底との比高(m)	標高(m)	分布する丘陵
I	I 1 220~270	550~600	豊野丘陵・赤塩丘陵・奥手山丘陵
	I 2 170~210	500~540	
II	II 1 130~160	460~490	II 1 豊野丘陵・奥手山丘陵
	II 2 90~120	420~450	II 2 長丘丘陵・奥手山丘陵 豊野丘陵東斜面
III	III 1 70~90	400~420	III 1 長丘丘陵・豊野丘陵東斜面
	III 2 40~60	370~390	III 2 高丘丘陵・南郷丘陵群
IV	10~30		高丘丘陵
V	10m未満		草間丘陵



第4図 段丘地形区分

南限は明らかでない。これまで栗林遺跡は何度か調査され、徐々に遺跡の様相が明らかにされてきているが、調査が進むにつれ、栗林遺跡全体の構成に新たな検討課題が生じている。

栗林遺跡の存在が知られたのは昭和元(1926)年で、昭和6(1931)年には瓦焼用粘土採掘場より出土した弥生時代中期の土器片に神田五六氏が注目し、昭和10-11(1935・36)年には採集資料が報告されている。発掘調査が行われたのは昭和23(1948)年からで、京都大学考古学教室が住居跡2軒を、昭和25(1950)年には農道開設に先立って地元の高丘小・中学校が調査を行い小豊穴4基を検出した。昭和40(1965)年には遺跡東端が開田工事にかかり、住居跡と小豊穴各1基を発掘している。なお、遺跡は昭和35(1960)年に長野県史跡に指定され、昭和54(1979)年には遺跡範囲確認の調査が実施されている。

栗林遺跡については下記のように発掘調査が実施されてきたが、いずれも工事に先立つ事前調査に

よるもので、栗林遺跡の全容を把握するにはいたっていない。しかし、県道豊野線バイパス志賀中野線に伴う調査(県埋文センター1992・93)により栗林遺跡の中央(県史跡指定部分)より、北半の遺跡の概要についてはほぼ把握されることとなった。

一方、遺跡の南半については、水田跡が埋没している可能性が指摘されてきたが、発掘調査は行われたことはなく、その概要は不明であった。平成7(1995)年、高速道路建設に伴い、県史跡栗林遺跡より1.1km程南西に位置する牛出遺跡が発掘調査(県埋文センター1994・95)されたが、この遺跡では弥生時代中期後半の遺構や遺物は検出されなかった。しかし、平成8(1996)年に公共下水道事業高丘終末処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査(中野市教育委員会1996)が行われ、今回の発掘調査予定地に隣接する地区で弥生時代の住居跡20数軒、土坑60基等を検出し、栗林遺跡研究に新たな知見を加えることができ、大きな成果が得られた。

第1次調査 (第5図1)

1948 小野勝年・坪井清足・横山浩一

(報告) 小野勝年 1948 「長野県下高井郡高丘村栗林遺跡調査略報」

坪井清足 1953 「高丘村弥生式遺跡調査」「下高井」

第2次調査 (第5図2)

1950 小林義輝・小野勝年・神田五六

(報告) 高丘小・中学校 1950 「第2次栗林遺跡発掘」

第3次調査 (第5図3)

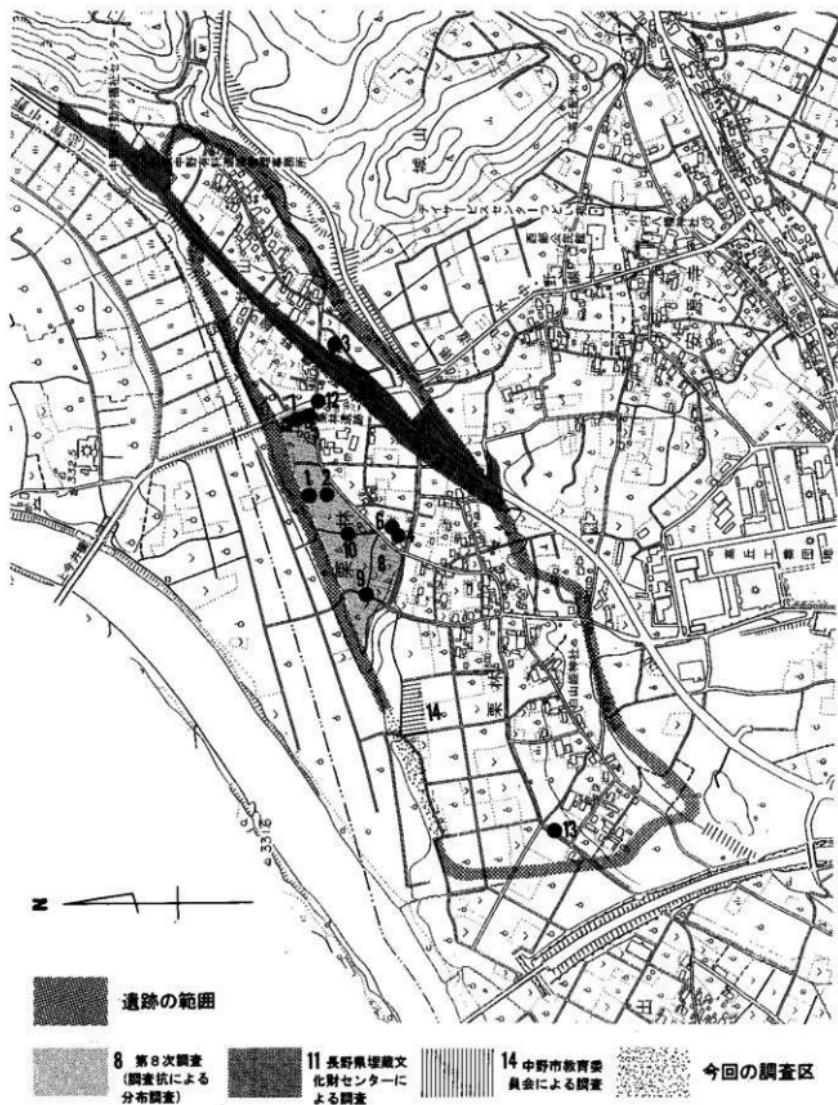
1965 林 茂樹・金井汲次・桐原 健

(報告) 林 茂樹・金井汲次・桐原 健 1966 「長野県中野市栗林遺跡第三次調査概報」
「信濃」Ⅲ・18-4

範囲確認調査

1979 金井汲次

(報告) 金井汲次 1980 「栗林遺跡確認緊急調査概報」中野市教育委員会



第5図 栗林遺跡の範囲

第4次調査 (第5図4)

1980 金井汲次

(報告) 金井汲次 1981 「栗林遺跡第4次発掘調査」[高井] 56

第5次調査 (第5図5)

1981 檀原長則・池田実男・田川幸一他

(報告) 檀原長則 1983 「栗林遺跡第5・6次発掘調査」[高井] 64

第6次調査 (第5図6)

1981 檀原長則・池田実男

(報告) 檀原長則 1983 「栗林遺跡第5・6次発掘調査」[高井] 64

第7次調査 (第5図7)

1983 金井汲次

第8次調査 (第5図8)

1986 檀原長則・池田実男・酒井健次

(報告) 檀原長則他 1988 「栗林浜津ヶ池」中野市教育委員会

第9次調査 (第5図9)

1991 檀原長則・池田実男

(報告) 檀原長則 1992 「栗林遺跡第9次発掘調査報告書」中野市教育委員会

第10次調査 (第5図10)

1992 中島英子

(報告) 中島英子 1993 「栗林遺跡第10次発掘調査」中野市教育委員会

県埋蔵文化財センターによる調査 (第5図11)

1992-93

(報告) 土屋積他 1994 「県道中野豊野線バイパス志賀中野道路埋蔵文化財発掘調査報告書・栗林遺跡・七瀬遺跡」(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19

中野市教育委員会による調査 (第5図12)

1994 塙原長則

(報告) 塙原長則 1995 「栗林遺跡発掘調査報告書」中野市教育委員会

中野市教育委員会による調査（第5図13）

1995 中島庄一・関 武

（報告）中島庄一 1996 「栗林遺跡（平成7年度中野市西部畠地総合開発に伴う調査）」中野市教育委員会

中野市教育委員会による調査（第5図14）

1996 中島庄一・関 武

（報告）中島庄一 1997 「栗林遺跡発掘調査報告書—平成8年度特定環境保全公共下水道事業高丘終末処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—」中野市教育委員会

これまでの調査から遺構の分布状況を観察すると、全面的な調査が行われていない現時点では推測の域を脱しないが、遺構は遺跡の範囲全体に万遍なく分布するのではなく、遺構が集中する部分と、その間に遺構の分布密度が薄い地域が交互に存在していると考えられる。

竪穴式住居が集中して発見された地点が平成8（1996）年の調査区も含めて3ヶ所存在する。最も北にある松原地籍、県史跡に指定されている北原地籍、そして梨ノ木地籍である。松原地籍では弥生中期栗林式期段階の竪穴式住居と後期箱清水式期の竪穴式住居が分布域を異にして発見され、南に隣接する調査区からは柱穴群が検出された。北原地籍では栗林式期竪穴住居が分布する地区と掘立柱建物群の分布する地区から構成されている。また竪穴住居が分布する地区の西端には大きな溝が確認されている。同様に梨ノ木地籍においても、栗林期の竪穴住居群と掘立柱建物群の分布は分離している。いずれの地区もこれまでの考古学的な常識からいえば、全体像はあきらかではないが、一集落の単位と考えてよく、中野市遺跡分布地図上での栗林遺跡は三つ以上の集落から構成されていると考えられる。

第3節 岡辺の遺跡

中野市は善光寺平北部に位置し、弥生文化の浸透は善光寺平南部より遅れ、弥生時代中期後半に開花し、遺跡はもっぱら水辺に近い台地から、低湿地にむかって遺跡の数が増えている。遺跡の発掘調査が進み、資料が豊かな遺跡が弥生時代中期の栗林遺跡であり、後期の安源寺遺跡である。中野市内では、栗林・安源寺両遺跡の他に40余りの弥生時代の遺跡が確認されている。

安源寺遺跡（第6図1、第7図10）

本遺跡は中野市安源寺所在し、宮裏・清水・立道・峯・石原の約2.4km内に営まれた、先史時代から近世におよぶ一大集合遺跡である。善光寺平の北限に位置する中野平は、千曲川により形成された後背湿地で、肥沃な水田を主とする農耕地帯である。本遺跡は、標高350mの高丘丘陵の東端にあって、東南に傾斜し、日当たりが良く湧水に恵まれている。

本遺跡は古くから、弥生時代後期から古墳時代にかけての土器を出土する著名な遺跡として知られ、昭和26（1951）年には神田五六氏・田川幸生氏、昭和



1. 安源寺遺跡 2. 間山遺跡 3. 七瀬遺跡 4. 西条・岩船遺跡群

第6図 中野市の主な弥生時代の遺跡

46(1971)年には金井汲次氏、昭和51(1976)年には中野市教育委員会により部分的な発掘調査が行なわれ、東海系の土器群を出土することが確認された。こうした経過を経て平成7(1995)年、4回目の発掘調査が中野市教育委員会により行なわれ、古墳時代前期の船形探査坑と前方後方周溝墓が検出された。これにより中野市は、古墳時代前期には、東海地方の影響を精神文化面においても強く受けた地域として、注目されるようになった。

この安源寺遺跡から北側の丘陵頂部には、未完成ではあるが規模の大きな中世後期の山城「安源寺城」がある。平成10(1998)年に、中野市教育委員会により発掘調査が行なわれ、弥生時代後期の前方後方墳丘墓が2基検出されている。この前方後方墳丘墓から出土した土器群は東海系・北陸系が主体となっており、在地系の土器はごく僅かであった。古墳時代前期の前方後方周溝墓に続いて、弥生時代後期の前方後方墳丘墓が発見されたことにより、この時期における東海地方との関わりが、ますます注目されるようになった。

間山遺跡(第6図2)

間山遺跡の所在する間山地区は、三方を東部山地と呼ばれる山脈に囲まれている。この山脈は途中から間山地区を包むように支脈が走り、広大な延徳沖低地へ埋没している。十二川と据無川に挟まれて扇状地地形を形成しており、遺跡の標高は340~420m程で、面積約25haの広範囲に及んでいる。本遺跡は山の懷と水の確保、肥沃な土壤を利しての自然環境に恵まれ、縄文時代から現在に至るまでの長い間、人々の生活の舞台となつた一大複合遺跡として知られる。

遺跡の研究は古く、昭和7(1932)年に神田五六氏が本遺跡表採の繩文・弥生土器に注目されたことで始まった。以来、桐原健氏や当時下高井地方の考古学調査に従事していた小野勝年氏らにより、表採遺

物の紹介がされている。

地方有数の弥生時代後期の遺跡として注目されつつも、当時、本遺跡はホップ畑であったため、発掘調査は不可能視されていた。そんなおり、昭和31(1956)年にホップ支柱の取替補修にあたって、支柱を開掘した際、長野県において極めて稀少な青銅鏡が1点出土した。この青銅族は神田五六氏の再度にわたる遺跡踏査の結果、弥生後期土器と関係があると考察された。同年、青銅鏡と後期弥生土器の関係究明に主眼をおき、ついに発掘調査が行なわれた。結果、青銅鏡と後期弥生土器との関係はわからなかったが、代わって後期土器と下高井地方で初めての灰陶陶器が出土した。

こうした経緯をふまえて、昭和57(1982)年及び平成3・4(1991・1992)年に中野市教育委員会により再度発掘調査が行なわれた。繩文土器から中世の陶磁器にいたるまでの遺物が出土したが、中心となるのは弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての遺物である。多数の住居跡が検出され、在地の弥生時代後期土器とともに北陸系・東海系の土器群が出土している。

七瀬遺跡(第6図3)

本遺跡は中野市七瀬に所在し、長丘丘陵の東側直下に位置する。この場所は中野属状地の末端に重なり、扇状地上方から緩い傾斜を下って、丘陵にぶつかる場所でもある。扇状地側には、現在も一級河川の江部川が延徳沖低地に向けて流れ、沖積地帯を呈する。周辺一帯は地下水位が高く、広く耕作が行なわれている。

遺跡は、南北750m、東西450mに細長く広がる。中野市遺跡詳細分布調査では、弥生時代後期~平安時代の遺跡とされていたが、発掘調査は行なわれていなかった。

平成3・4(1991・1992)年の2ヶ年にわたって七瀬遺跡の発掘調査が、丘陵の反対側に位置する栗

林遺跡とともに、長野県埋蔵文化財センターにより行なわれた。その結果、旧石器時代～近世にわたる遺物が出土し、発見された遺構は弥生時代中期と同後期を主体とした。特に、弥生時代後期の遺構・遺物は、県内の当該期他遺跡と比較しても質・量ともに特筆される。その理由の一つに、本遺跡から出土した土器は、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の、北陸系・東海系の外来系土器がかなりの割合を占めることがあげられる。特に、S字状口縁付甕A類とともに東海系土器が出土した遺跡としては、中野市では西条遺跡と本遺跡だけである。

また、本遺跡の調査をもとに、赤塙仁氏は七瀬編年を確立し、当該期における中野市の東海系土器を中心とした外来系土器の流入、それに伴う在地系土器の変遷・消長について言及している。

西条岩船遺跡群(第6図4)

本遺跡は中野扇状地の南側先端近く、低地部から程遠くない地点に立地する。遺跡が立地する地点は等高線に沿って弧状に分布する扇状地の湧水帯を中心広がる大きな面積を持つ。中野市遺跡詳細分布調査では、弥生時代後期～中世にいたる複合遺跡であることは從来から知られていたが、大規模な発掘調査は行なれていなかった。

平成元～7(1989～1995)年の7ヶ年にわたりて長野電鉄信州中野駅南口区画整理事業に伴う発掘調査が中野市教育委員会により行なわれた。その結果、弥生時代中期～中世にわたる遺物が出土し、発見された遺構は弥生時代中期と同後期、平安時代を主体とした。特に、合計4ヶ所から発見された中世の一括埋納鏡は、県内の当該期他遺跡と比較しても質・量ともに特筆される。

また、栗林遺跡が立地する高丘・長丘丘陵一帯の地域には、前出の安源寺遺跡をはじめとして、旧石器遺跡・縄文遺跡・弥生遺跡・古墳・窯業遺跡等の

遺跡が80ヶ所ほど確認されている。

姥ヶ沢遺跡(第7図1)

本遺跡は、中野市大字大俣字姥ヶ沢1074他に所在し、中野市には数少ない縄文中期遺跡で、長丘丘陵の西へ張り出したテラス状台地に立地する。本遺跡周辺には2ヶ所の湧泉があり、もろい地層のため土砂が流出し小さな峡谷地形を呈している。

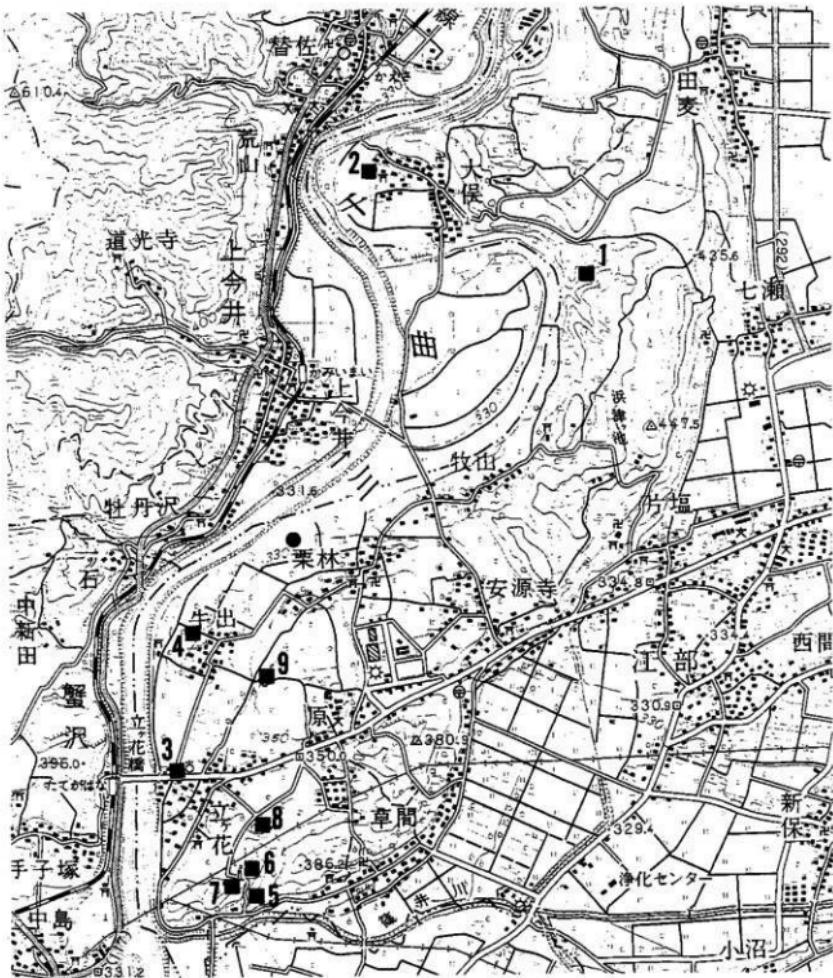
昭和57(1982)年、本遺跡内の畑の中に縄文土器片が多数散乱していたのを発見したことから、中野市教育委員会により緊急発掘調査が行われた。その結果、縄文中期の住居跡1軒・古墳時代初期の住居跡1軒、およびたどりい上器・石器類とともに土製品(土偶・土製耳飾・土製円盤等)を検出した。土器は縄文前期前葉は僅少で、前期後葉から中期前葉にいたると次第に量を増し、中期中葉が主体である。

宮反遺跡(第7図2)

本遺跡は、前記姥ヶ沢遺跡の西約1.3km、中野市大字大俣字宮反・東反に所在し、千曲川の蛇行貫流により形成された自然堤防上の大俣地籍に立地する。遺跡は大俣地籍の高井大富神社をほぼ中心とした標高336.8mを頂点とした微高地の約10,000m²の範囲に所在する。昭和27・28(1952・1953)年の開田前の発掘調査により縄文中期の住居跡3軒、土器・石器類の遺物が検出されている。昭和59(1984)年には水害防止のための築堤工事に伴う緊急発掘調査を行い、弥生時代末期～古墳時代初頭の住居跡2軒、平安時代の住居跡2軒を検出した。

立ヶ花遺跡(第7図3)

本遺跡は、栗林遺跡の南西約1.6km、中野市立ヶ花西原に所在する。善光寺平を北流し河幅を拡げた千曲川が高丘丘陵にぶつかり急激に川幅を狭められる地点を「立ヶ花」(館ヶ鼻)と称する。古来より渡舟場が設けられ、明治15(1882)年には舟橋が設置さ



第7図 栗林遺跡周辺の主な遺跡

れた。その後信越線が開通し、中野・山ノ内地方への西の玄関口として交通が頻繁となり、大正14(1925)年には鉄橋が架設された。本遺跡は、集落の北側、千曲川の自然堤防上にあり、最高所で標高339.5m、千曲川の水面までの高低差は約14mである。以前から石礫などが出土し、昭和51(1976)年の試掘調査では諸磯期の縄文土器を検出している。平成元・2(1989・1990)年にかけて新立ヶ花橋建設に伴う取付道路用地内の発掘調査が行われ、住居跡2軒、多数の土坑を検出し、大量の諸磯期の土器、石器を得た。

牛出遺跡(第7図4)

本遺跡は、栗林遺跡の西約1.1km、中野市大字北原191他に所在し、栗林遺跡と立ヶ花遺跡の中間にあたり、河岸段丘上の千曲川に向かって緩やかな傾斜地形上に位置している。遺跡の範囲は、牛出集落の西にあたり約40,000m²に及んでいる。平成6・7(1994・1995)年に上信越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が長野県埋蔵文化財センターにより行われ、縄文時代の土坑2基、古墳時代初頭の竪穴住居跡7軒、平安時代後半の竪穴住居跡11軒、中世の掘立柱建物の柱穴多数の他、井戸跡12を検出した。また、中野市教育委員会が行った平成7・8(1995・1996)年の調査では、縄文時代の竪穴住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡1軒、中世の井戸跡6を検出した。

がまん淵遺跡(第7図5)

本遺跡は、栗林遺跡の南西約2.2km、中野市大字草間字西山2092他、高丘丘陵の南端部に所在する。遺跡が立地する丘陵は牧場経営のために尾根の屋間部と先端部が大きく削られ、また地滑り防止地域に指定されており、地滑りによる地形変化も予想される。平成3(1991)年に上信越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が長野県埋蔵文化財センターによ

り行われ、旧石器時代の石器類約230点、縄文時代早期の土器・石器約160点、弥生時代の竪穴住居跡5軒、棚列1、溝、土器の他鉄鎌、ヤリガンナ、紡錘車、土製勾玉、管玉、奈良・平安時代の須恵器片等を検出した。また平成5(1993)年には、上信越自動車道建設に伴う草間地籍の地滑り防止工事に先だって中野市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査が行われ、古墳時代末期の須恵器窯、中世の墓社群を検出した。先の長野県埋蔵文化財センターによる調査で、集落が丘陵の尾根上に立地し、集落を巡ると思われる棚列と溝の存在から防御的集落の様相を示していると判断されている。

沢田鍋土遺跡(第7図6)

本遺跡は、栗林遺跡の南西約1.9km、中野市大字立ヶ花字鍋土636他に所在し、高丘丘陵南端部の東向き緩斜面に位置する。浅い谷を隔て対峙する丘陵上には、がまん淵遺跡がある。平成3(1991)年に長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、旧石器時代のブロック、縄文時代中期の埋カメ、古墳時代前期の粘土探掘跡、奈良時代の須恵器窯跡・灰原・竪穴住居跡が発見された。また、中野市教育委員会が平成4(1992)年と平成6(1994)年に発掘調査を行い、旧石器時代のブロック、縄文時代中期末葉の土坑、古墳時代前期の竪穴住居跡と粘土探掘跡、奈良時代の竪穴住居跡が発見された。

立ヶ花表山窯跡(第7図7)

本遺跡は、栗林遺跡の南西約1.8km、中野市大字立ヶ花字表山の、高丘丘陵南端部の西北緩傾斜する小丘陵上に所在する。高丘丘陵上の古窯跡の研究は、高丘村誌及び小野勝年氏の「下高井」の中で、その散布について若干紹介されたことに始まる。その後、昭和29(1954)年に安源寺遺跡内で金井汲次氏が須恵器窯跡を発見したことをきっかけに、高丘丘陵上における窯跡が広く注目されることとなり、その調

査研究が進み始めた。中野市教育委員会により昭和45(1970)年には立ヶ花表山1・2号窯跡が発掘調査され、平成元(1989)年には3・4号窯跡が調査された。

清水山古窯跡(第7図8)

本遺跡は、栗林遺跡の南西約1.6km、中野市大字立ヶ花字清水山671-5他の、高丘丘陵南端部に位置する通称清水山と呼ばれる小高い山とその周辺の平坦な地形に所在する。清水山は東西方向に長い椭円形をしており、東側半分以上は採土のため削平されており、また残った西側部分の山頂部は火薬庫設営のため掘削されており平坦部はほとんど残っていない。遺跡は窯跡として知られていたが、これまで調査事例はなく、平成4(1992)年の長野県埋蔵文化財センターの発掘調査により3基の窯跡が確認され、

平成5(1993)年の中野市教育委員会の発掘調査により中世墓社群が調査された。

牛出窯跡(第7図9)

本遺跡は、栗林遺跡の南西約0.8km、中野市大字牛出字芝野704他に所在、前出の牛出遺跡の南東約0.2km、千曲川の東岸に広がる高丘丘陵北西縁の河岸段丘状地形に立地する。従来、段丘崖の斜面に須恵器窯跡が存在することが知られていたが、平成5(1993)年、長野県埋蔵文化財センターの発掘調査により、旧石器時代のブロック、古墳時代前期の集落跡、奈良・平安時代の須恵器窯跡1基と工房跡を含む集落跡、中世の火葬骨の埋葬施設を調査した。平成9(1997)年の中野市教育委員会の発掘調査により須恵器窯跡5基を調査した。

引用・参考文献(周辺の遺跡)

安源寺遺跡

- 小野勝年 1953 「下高井地方における考古学的調査」『下高井』
田川幸生・桐原 健 1962 「長野県安源寺遺跡の弥生式土器」『信濃三』14-1
金井汲次 1967 「中野市安源寺遺跡発掘調査」『信濃考古』17-18
金井汲次 1971 「長野県中野市安源寺遺跡」『日本考古学年報』19
長野県史刊行会 1982 「安源寺遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡(北・東信)』
中野市教育委員会 1967 「安源寺」『長野県考古学会研究報告書2』
中野市教育委員会 1979 「安源寺II」
中野市教育委員会 1987 「安源寺III」
中野市教育委員会 1995 「安源寺遺跡」
中野市教育委員会 1999 「安源寺城跡遺跡発掘調査報告書」

間山遺跡

- 小野勝年 1953 「下高井地方の考古学的調査」『下高井』
桐原 健 「信濃国間山発見の合口甕棺」『上代文化』24
桐原 健 1958 「長野県中野市間山石動下遺跡調査予報」『信濃』第10巻第12号
神田五六 「長野県中野市間山発見の銅鏡」『信濃』第10巻第6号

- 中野市教育委員会 1984 「問山」
中野市教育委員会 1992 「問山Ⅱ」
中野市教育委員会 1993 「問山Ⅲ」

七瀬遺跡

- 小野勝年 1953 「下高井地方の考古学的調査」「下高井」
長野県埋蔵文化財センター 1994 「七瀬遺跡」『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書』

西条・岩船遺跡群

- 金井汲次 1961 「北信濃出土の古銭について」「信州社会科教育」6
金井汲次 1971 「中野扇状地の考古資料」「高井」16・17・18・19
中野市教育委員会 1991 「西条・岩船遺跡群発掘調査概報」
中野市教育委員会 1996 「西条・岩船遺跡群発掘調査概報」
中野市教育委員会 1997 「西条・岩船遺跡発掘調査報告書」

姥ヶ沢遺跡

- 小野勝年 1953 「下高井地方の考古学的調査」「下高井」
金井汲次 1983 「姥ヶ沢出土の土偶について」「高井」63
中野市教育委員会 1983 「姥ヶ沢」

宮反遺跡

- 飯沢澄夫 1952 「下高井郡長丘村大俣遺跡について」「飯山北高校郷土研究会会報」
小野勝年 1953 「下高井地方の考古学的調査」「下高井」
中野市教育委員会 1985 「宮反」

立ヶ花遺跡

- 小野勝年 1953 「下高井地方の考古学的調査」「下高井」
金井正三 1977 「中野市立ヶ花遺跡出土の縄文前期土器について」「高井」41
中野市教育委員会 1991 「立ヶ花遺跡」

牛出遺跡

- 小野勝年 1953 「下高井地方の考古学的調査」「下高井」
中野市教育委員会 1997 「牛出遺跡」
長野県埋蔵文化財センター 1998 「牛出遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14』

がまん洞遺跡

- 金井文司 1978 「中野市安源寺・草間出土の弥生遺物について」『高井』42
中野市教育委員会 1994 「がまん洞遺跡・上の山遺跡」
長野県埋蔵文化財センター 1998 「がまん洞遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13』

沢田鍋土遺跡

- 中野市教育委員会 1993 「沢田鍋土遺跡」
中野市教育委員会 1995 「沢田鍋土遺跡」
長野県埋蔵文化財センター 1998 「沢田鍋土遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13』

立ヶ花表山窯跡

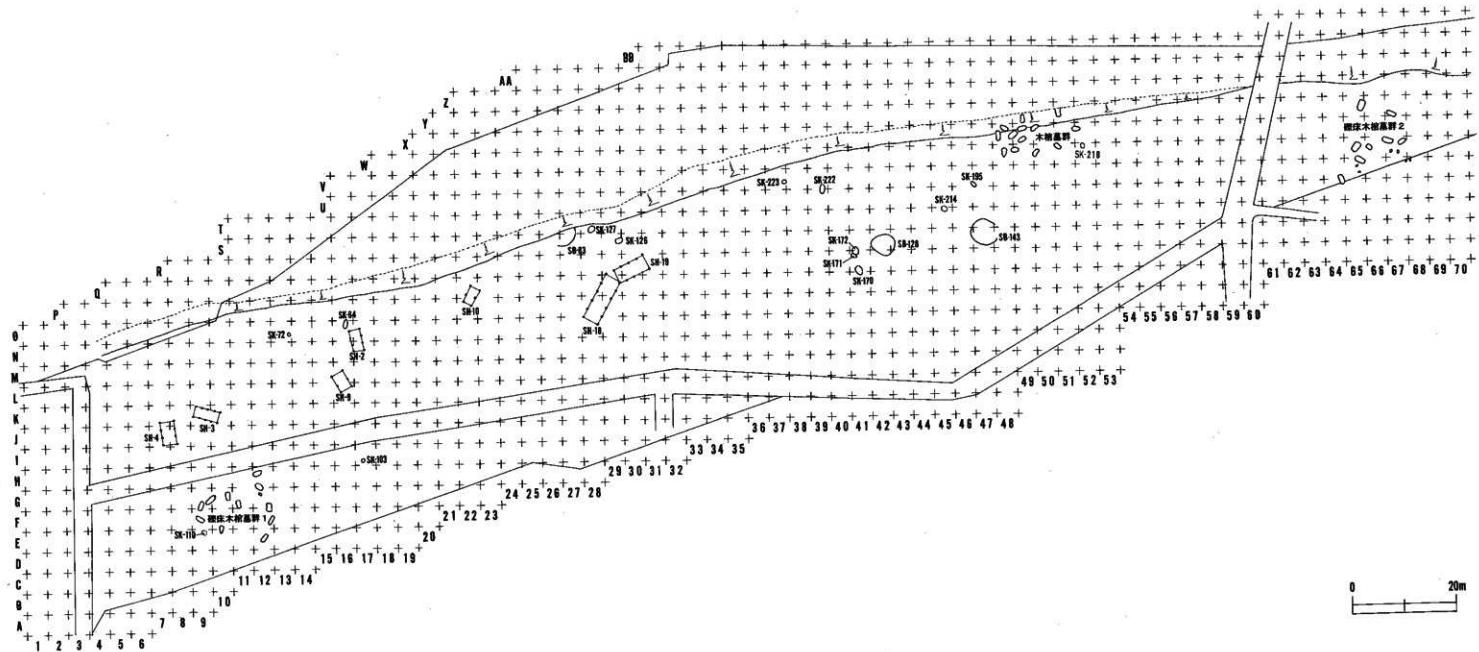
- 金井汲次 1971 「表山古窯址」『長野県考古学会誌』10
金井汲次 1973 「中野市立ヶ花表山古窯址調査」『高井』24
中野市教育委員会 1990 「立ヶ花表山窯跡」

清水山古窯跡

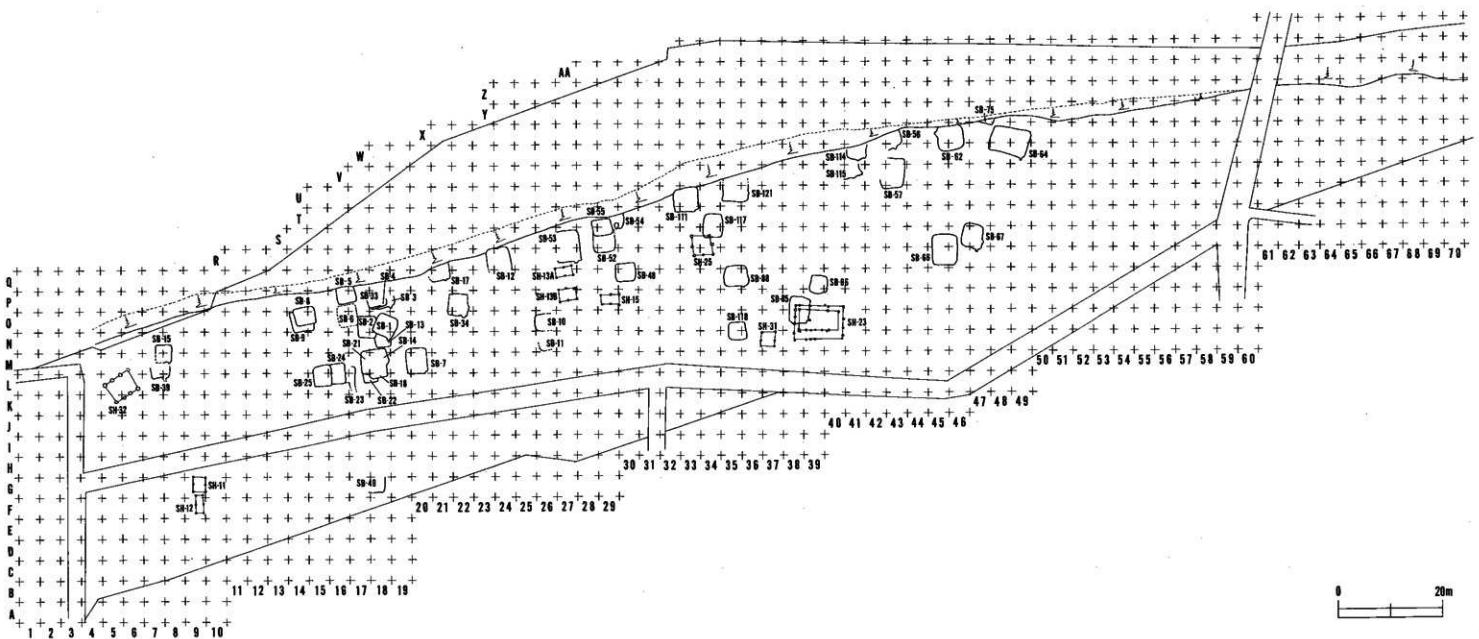
- 中野市教育委員会 1994 「清水山古窯跡」
長野県埋蔵文化財センター 1998 「清水山窯跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13』

牛出窯跡

- 長野県埋蔵文化財センター 1998 「牛出古窯遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13』
中野市教育委員会 1998 「牛出窯跡遺跡発掘調査報告書」



第8図 全体図（弥生時代の遺構）



第9図 全体図（平安時代の遺構）

第3章 遺構・遺物

第1節 弥生時代の遺構

1 概要

本遺跡からは弥生時代の遺構・遺物が検出された。I区では、竪穴式住居跡1棟・掘立柱建物跡7棟・土坑3基・土坑墓1基が検出された。II区では、土坑2基・土坑墓3基・礎床木棺墓9基が検出された。III区では、竪穴式住居跡2棟・土坑4基・土坑墓4基・木棺墓12基が検出された。IV区では、礎床木棺墓11基が検出された。

2 竪穴式住居跡

弥生時代の竪穴式住居跡は3棟検出された。検出段階では18の竪穴式住居跡と思われる遺構を検出したが、いずれも検出面から掘りこみは浅く、壁のたちあがりは明確でない等で、住居跡とするにはいたらなかった。

第1号住居跡(SB-83)(第10図)

(位 置) T、S-26、27グリッドに位置する。

(平面形態) 円形

(規 模) 径約5m 深さ約22cm

(検出状況) 弥生時代の遺物が集中することから遺構の存在を考え、周囲を精査したところ、径5m前後の円形の落ち込みを確認した。検出面から掘りこみは浅く、壁のたちあがりは明確でない。床面に凹凸があり、安定していない。住居址ではなく、凹地である可能性が高い。

(遺物出土状況) 覆土内より出土した。

第2号住居跡(SB-128)(第10図)

(位 置) R、S-42、43グリッドに位置する。

(平面形態) 不整方形ないし円形

(規 模) 長軸440×短軸400cm 深さ約4cm

(検出状況) 検出面で炭化物・焼土が集中することから、住居址と考え、調査を進めた。検出面からの掘りこみはきわめて浅く、床面のみの検出にとどまった。

(柱 穴) 柱穴状の落ち込みが4基検出されているが、配置に規則性がなく、柱穴と断定できない。

(遺物出土状況) 覆土中に散在した。

第3号住居跡(SB-143)(第11図)

(位 置) S、T-46、47グリッドに位置する。

(平面形態) 円形

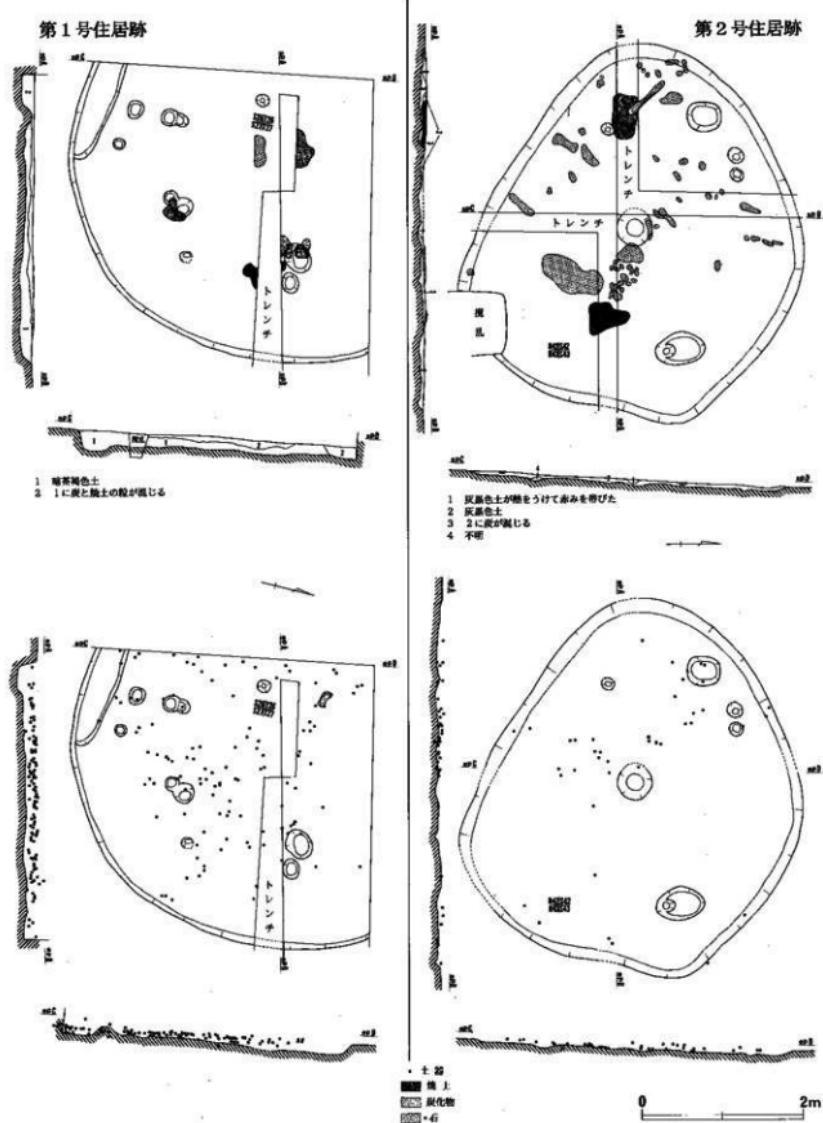
(規 模) 径約5m 深さ約20cm

(検出状況) 第2検出面で検出した。検出面からの掘りこみは浅かったが、容易に平面プランを確認できた。東側部分は攪乱を受ける。

(地 床 炉) ほぼ中央に梢円形の中央がくびれたような形で焼土が確認され、その南側に炭化物層が広がっていた。また、この地床炉より北東側に1m離れて焼土が検出された。

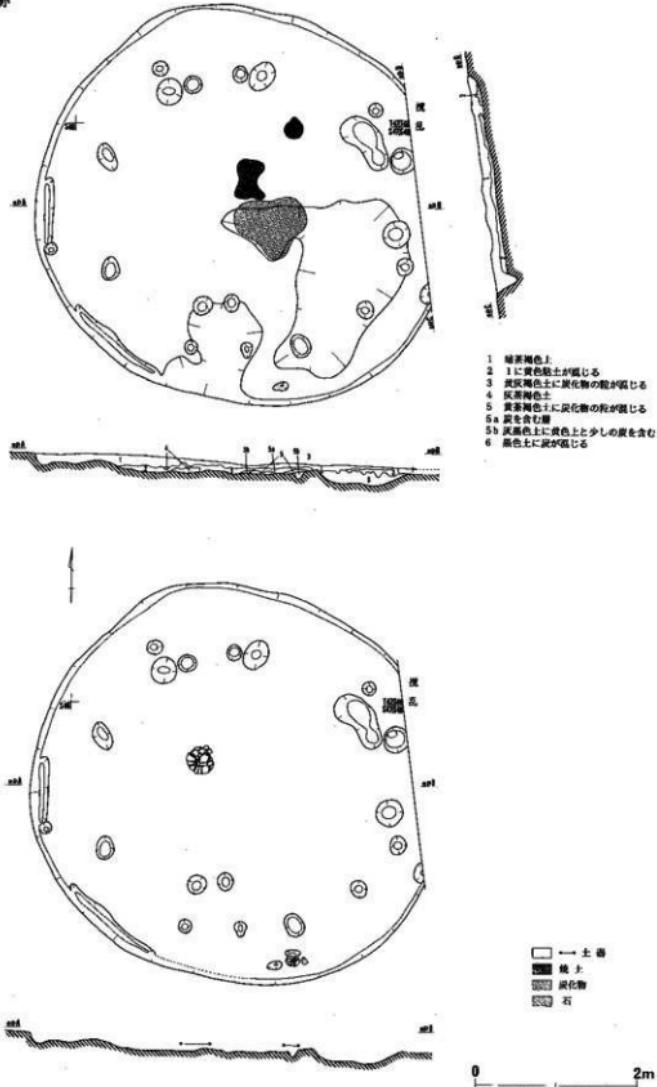
(柱 穴) 合計18ヶの柱穴を検出した。アットランダムではあるがほぼ円形ないし、六角形に配置されたかに見える。柱穴と考えて良いであろう。

(遺物出土状況) 中央の地床炉の西側に胸部上半部を欠いた壺形土器が一個体発見

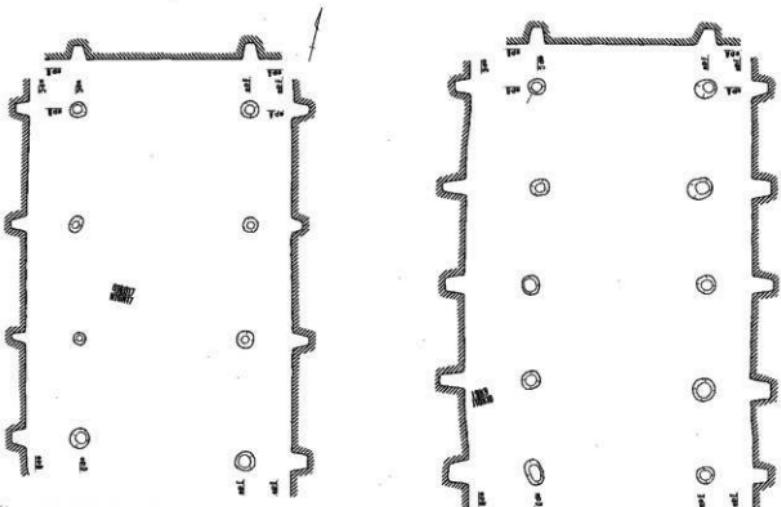


第10図 積穴式住居跡（1）

第3号住居跡

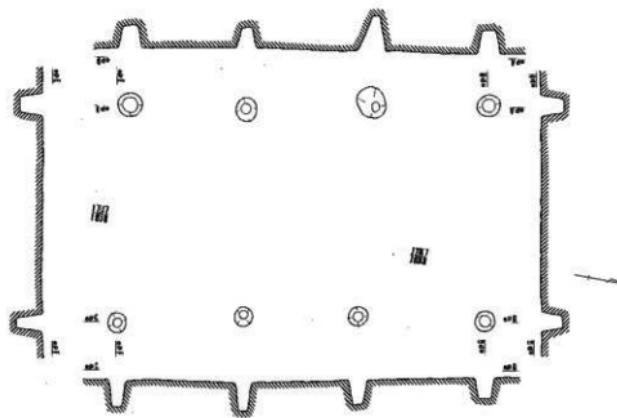


第11図 堅穴式住居跡(2)



第1号掘立柱建物跡

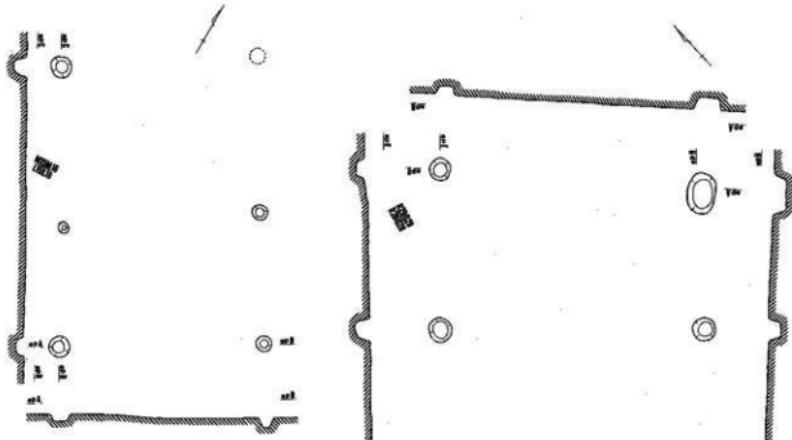
第2号掘立柱建物跡



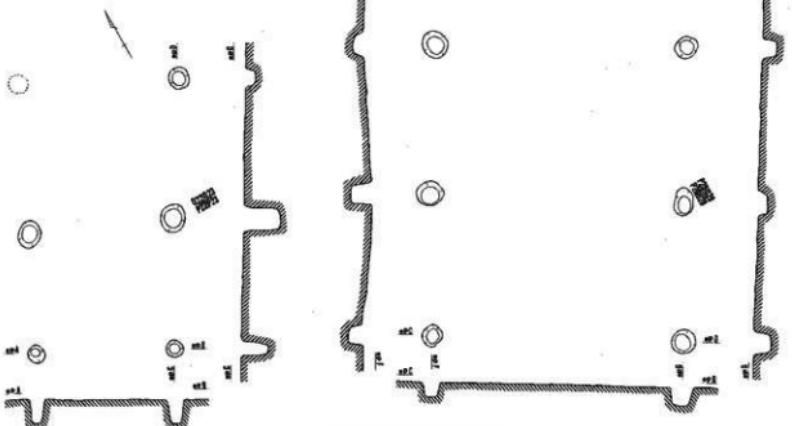
第3号掘立柱建物跡

0 2m

第12図 掘立柱建物跡(1)



第4号掘立柱建物跡

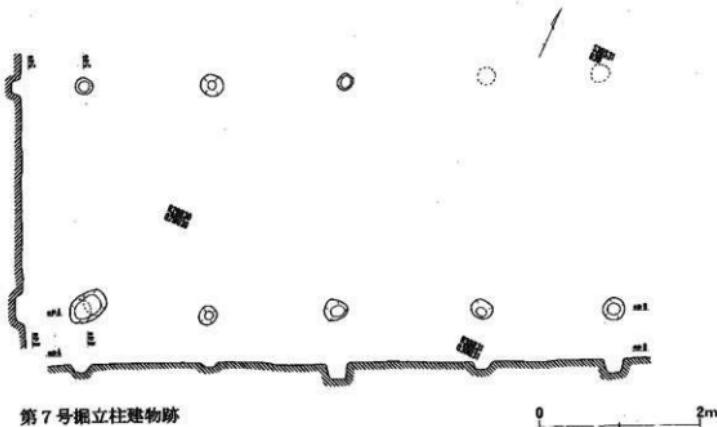


第6号掘立柱建物跡

第5号掘立柱建物跡



第13図 掘立柱建物跡(2)



第14図 掘立柱建物跡(3)

された。また、住居の南側に底部を欠く壺形土器が蝶とともに置かれたかのように出土した。

(規 模) 長軸 4.8 × 短軸 2.2m 面積
10.6 m²
(柱 穴) 10本柱

3 掘立柱建物跡

弥生時代の掘立柱建物跡はI区で7棟検出された。とくに配列に規則性は認められない。第6号掘立柱建物跡が他と比して約3倍の大きさである。

第1号掘立柱建物跡(SH-2)(第12図)

(位 置) N、O-16, 17グリッドに位置する。

(軸の方向) 主軸 N-13°-E
(規 模) 長軸 3.7 × 短軸 3.2m 面積
11.8 m²

(柱 穴) 8本柱

第2号掘立柱建物跡(SH-3)(第12図)

(位 置) K-9, 10グリッドに位置する。
(軸の方向) 主軸 N-71°-W

第3号掘立柱建物跡(SH-4)(第12図)

(位 置) J、K-7, 8グリッドに位置する。
(規 模) 長軸 4.6 × 短軸 2.7m 面積
12.4 m²

(柱 穴) 8本柱

第4号掘立柱建物跡(SH-9)(第13図)

(位 置) L、M-16グリッドに位置する。
(軸の方向) 主軸 N-10°-E
(規 模) 長軸 3.5 × 短軸 2.5m 面積
8.8 m²

(柱 穴) 6本柱

第5号掘立柱建物跡(SH-10)(第13図)

(位 置) P、Q-22グリッドに位置する。

(軸の方向) 主軸 N-30°-E
 (規模) 長軸 3.4 × 短軸 1.7m 面積
 5.8 m^2
 (柱穴) 6本柱

第6号据立柱建物跡(SH-18)(第13図)

(位置) O~R-27~29グリッドに位置する。

(軸の方向) 主軸 N-60°-E
 (規模) 長軸 9.4 × 短軸 3.2m 面積
 30.1 m^2
 (柱穴) 12本柱

第7号据立柱建物跡(SH-19)(第14図)

(位置) Q, R-29, 30グリッドに位置する。

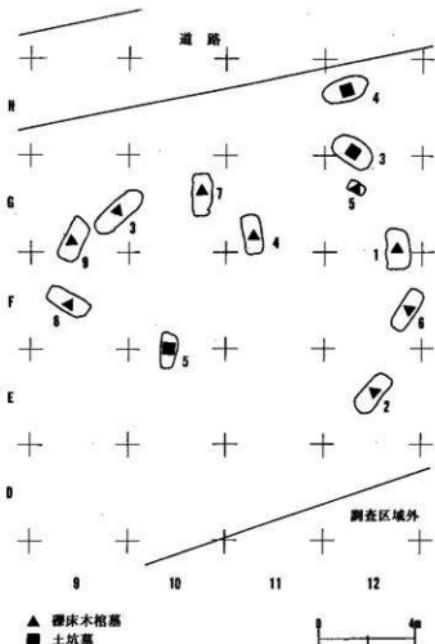
(軸の方向) 主軸 N-65°-E
 (規模) 長軸 6.6 × 短軸 2.9m 面積
 19.1 m^2
 (柱穴) 10本柱

4 碓床木棺墓

弥生時代の碓床木棺墓はII区で9基、IV区で11基が検出された。II区で検出されたものを碓床木棺墓群(1)(第15図)とし、IV区で検出されたものを碓床木棺墓群(2)(第16図)とした。いずれの碓床木棺墓群も若干の例外はあるものの、円を描くように配置され、集団墓としての性格があるものと思われる。

第1号碓床木棺墓(SQ-1)(第17図)

(位置) F, G-12グリッドに位置する。
 (平面形態) やや方形にちかい長方形
 (軸の方向) 主軸 N-0°-E
 (規模) 長軸 170×短軸 100cm
 (所見) 碓床のみが検出された。碓の分布はやや散漫である。栗林式期の



第15図 碓床木棺墓群(1)

ものと思われる。

第2号碓床木棺墓(SQ-2)(第17図)

(位置) E-12グリッドに位置する。
 (平面形態) やや長円気味の長方形
 (軸の方向) 主軸 N-40°-E
 (規模) 長軸 180×短軸 80cm
 (所見) 栗林式期のものと思われる。碓の分布はやや散漫である。

第3号碓床木棺墓(SQ-6)(第17図)

(位置) G-9, 10グリッドに位置する。

(平面形態) 長円形
(軸の方向) 主軸 N-50°-E
(規模) 長軸 240×短軸 80cm
(所見) 栗林式期のものと思われる。疊の分布はやや散漫である。

第4号疊床木棺墓(SQ-10)(第17図)

(位置) F、G-11 グリッドに位置する。
(平面形態) 長方形
(軸の方向) 主軸 N-12°-W
(規模) 長軸 155×短軸 80cm
(所見) 栗林式期のものと思われる。床一面に疊が密度高く敷かれていた。

第5号疊床木棺墓(SQ-11)(第17図)

(位置) G-12 グリッドに位置する。
(平面形態) 長方形
(軸の方向) 主軸 N-62°-W
(規模) 長軸 75×短軸 50cm
(所見) 栗林式期のものと思われる。極めて、小型であり、実測の際の縮尺の誤りではないかと疑いをもつた。

第6号疊床木棺墓(SQ-12)(第18図)

(位置) F-12 グリッドに位置する。
(平面形態) 長方形
(軸の方向) 主軸 N-85°-E
(規模) 長軸 185×短軸 80cm
(所見) 栗林式期のものと思われる。

第7号疊床木棺墓(SQ-14)(第18図)

(位置) G-10 グリッドに位置する。
(平面形態) 長方形
(軸の方向) 主軸 N-4°-W
(規模) 長軸 175×短軸 80cm

(所見) 栗林式期のものと思われる。掘り方土坑はやや不整形であるが検出面が土坑の床面のレベルとほぼ同じためであろう。

第8号疊床木棺墓(SQ-15)(第18図)

(位置) F-9 グリッドに位置する。
(平面形態) 長方形
(軸の方向) 主軸 N-60°-W
(規模) 長軸 180×短軸 85cm
(所見) 栗林式期のものと思われる。疊の分布はやや疎である。やや大型のものと小型のもの二者があり、大型のものは一方の小口面側に分布していた。

第9号疊床木棺墓(SQ-16)(第18図)

(位置) F、G-9 グリッドに位置する。
(平面形態) 長方形
(軸の方向) 主軸 N-30°-E
(規模) 長軸 180×短軸 75cm
(所見) 栗林式期のものと思われる。疊の分布は床面全体におよばず、疊の敷かれていらない床面がある。本来は前面に敷かれていたものであろう。

第10号疊床木棺墓(SQ-56)(第19図)

(位置) U、V-64 グリッドに位置する。
(平面形態) 長方形
(軸の方向) 主軸 N-20°-W
(規模) 長軸 200×短軸 100cm
(所見) 栗林式期のものと思われる。周間に5cmから10cmの疊が検出され、その内側に砂利のような細かい石が分布していた。周囲のやや

大きな碟は床面に敷かれたものではなく、掘り方土坑の側壁と木棺の間に埋められていたものではないかと思われる。

第11号 碟床木棺墓(SQ-62)(第19図)

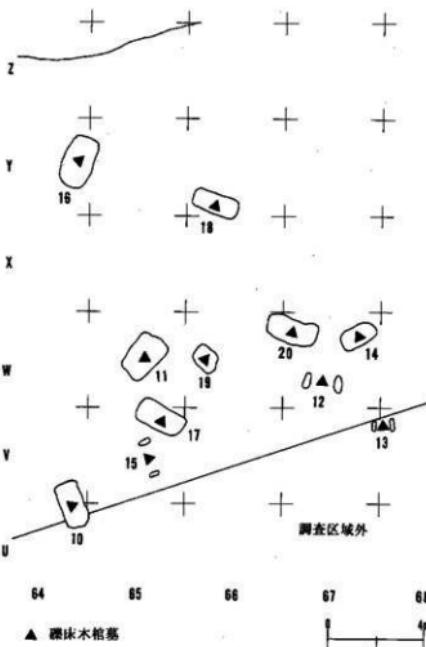
(位 置) W-65 グリッドに位置する。
 (平 面 形 態) やや方形に近い長方形
 (軸 の 方 向) 主軸 N-40°-E
 (規 模) 長軸 200×短軸 125cm
 (所 見) 栗林式期のものと思われる。周囲に5cmから10cmの碟が検出され、その内側に砂利のような細かい石が分布していた。周囲のやや大きな碟は床面に敷かれたものではなく、掘り方土坑の側壁と木棺の間に埋められていたものではないかと思われる。

第12号 碟床木棺墓(SQ-72)(第20図)

(位 置) W-67 グリッドに位置する。
 (平 面 形 態) 掘り込みが検出できなかったために不明。
 (軸 の 方 向) 主軸 N-83°-W
 (規 模) 長軸 160×短軸 80cm
 (所 見) 栗林式期のものと思われる。碟床のみ検出した。碟の分布は疎である。

第13号 碟床木棺墓(SQ-76)(第20図)

(位 置) V-67, 68 グリッドに位置する。
 (平 面 形 態) 掘り込みが検出できなかったために不明。
 (軸 の 方 向) 主軸 N-78°-E
 (規 模) 長軸 100×短軸 50cm
 (所 見) 栗林式期のものと思われる。碟



第16図 碟床木棺墓群(2)

床のみ検出した。碟の分布は疎である。やや小型である。

第14号 碟床木棺墓(SQ-77)(第20図)

(位 置) W-67 グリッドに位置する。
 (平 面 形 態) 長方形
 (軸 の 方 向) 主軸 N-60°-E
 (規 模) 長軸 150×短軸 80cm
 (所 見) 栗林式期のものと思われる。碟の分布はやや疎である。やや小さな碟が敷かれていた。

第15号蝶床木棺墓(SQ-84)(第20図)

(位 置) V-65 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 堀り込みが検出できなかったために
不明
(軸 の 方 向) 主軸 N-25°-W
(規 模) 長軸 170×短軸 70cm
(所 見) 栗林式期のものと思われる。蝶
床と小口板の堀り込みを検出した
のみである。

第16号蝶床木棺墓(SQ-85)(第21図)

(位 置) Y-64、65 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 長方形
(軸 の 方 向) 主軸 N-20°-E
(規 模) 長軸 220×短軸 130cm
(所 見) 栗林式期のものと思われる。敷
かれている蝶には相対的に小さい
ものと大きなものがあり、大きな
ものは両端の小口板側に分布して
いた。小口板と堀り込み土坑の壁
の間に詰め込まれていたのではないか
かろうか。

第17号蝶床木棺墓(SQ-86)(第21図)

(位 置) W-65 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 長方形
(軸 の 方 向) 主軸 N-60°-W
(規 模) 長軸 200×短軸 100cm
(所 見) 栗林式期のものと思われる。本
例は床に蝶は分布せず、堀り込み
土坑の壁側に分布していた。蝶床
墓と呼んでいるタイプの中に含め
て考えて良いであろう。

第18号蝶床木棺墓(SQ-87)(第22図)

(位 置) X、Y-66 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 長方形
(軸 の 方 向) 主軸 N-70°-W
(規 模) 長軸 190×短軸 80cm
(所 見) 栗林式期のものと思われる。き
っちりと、蝶が床面に分布し、一
方の小口板をささえための穴の
上にまで分布していた。

第19号蝶床木棺墓(SQ-88)(第22図)

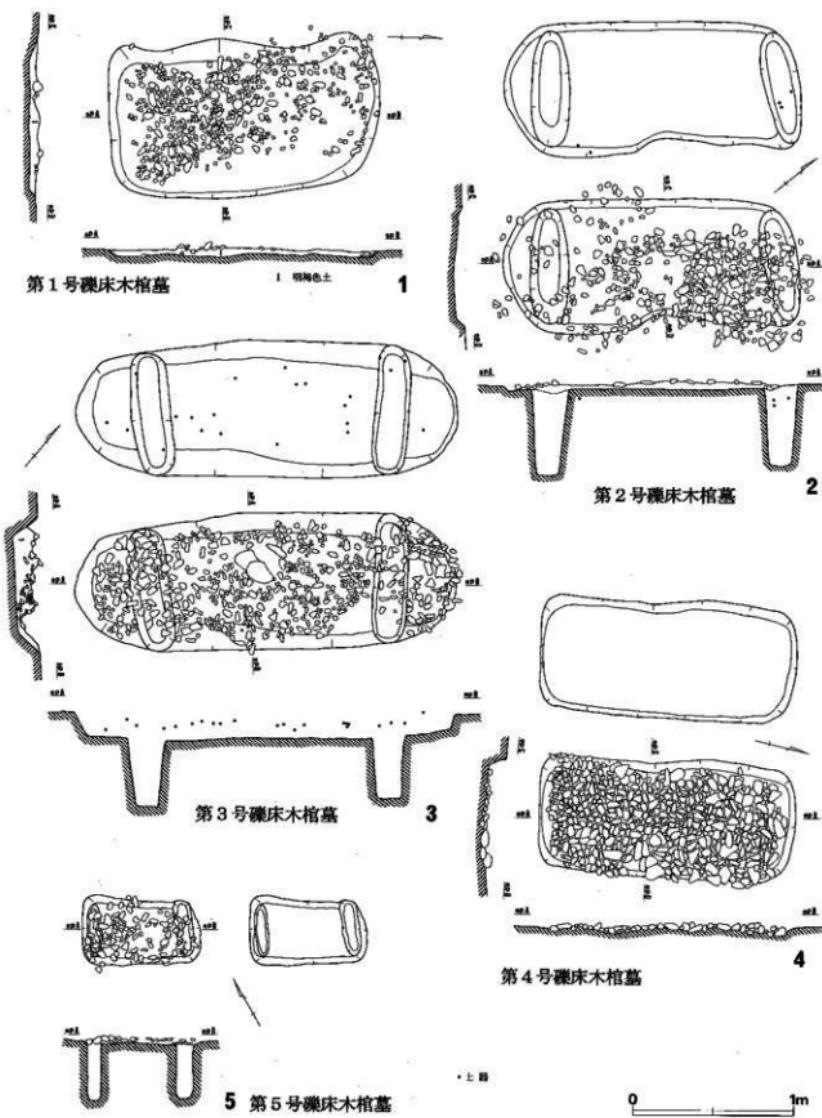
(位 置) W-66 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 方形に近い長方形
(軸 の 方 向) 主軸 N-50°-W
(規 模) 長軸 110×短軸 85cm
(所 見) 栗林式期のものと思われる。浅
い堀り込みと蝶を検出した。他の
例と比較して方形に近い短寸な長
方形である。また、蝶の分布も疎
である。

第20号蝶床木棺墓(SQ-90)(第22図)

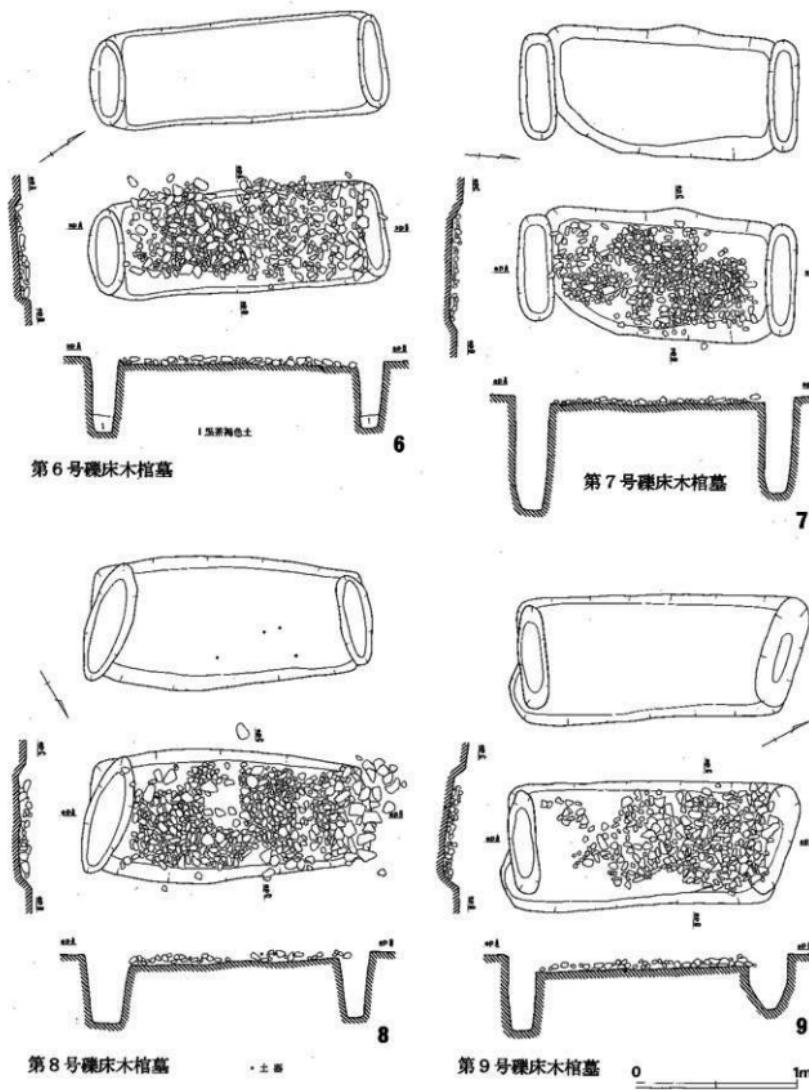
(位 置) W-66、67 グリッドに位置す
る。
(平 面 形 態) 長方形
(軸 の 方 向) 主軸 N-70°-W
(規 模) 長軸 205×短軸 100cm
(所 見) 栗林式期のものと思われる。蝶
は床にのみ敷かれていたものと思
われる。

5 木棺墓

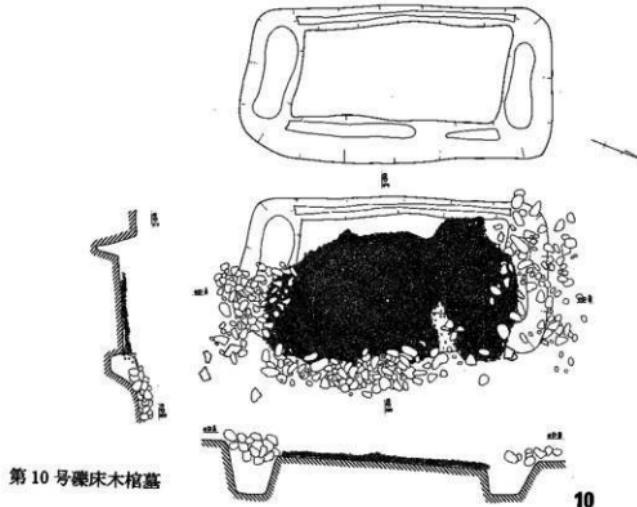
弥生時代の木棺墓はⅢ区で12基が検出された。検
出されたもの内、集中している11基を木棺墓群(第
23図)とした。若干の例外はあるものの、集中的に
配置され、集団墓としての性格があるものと思われ
る。



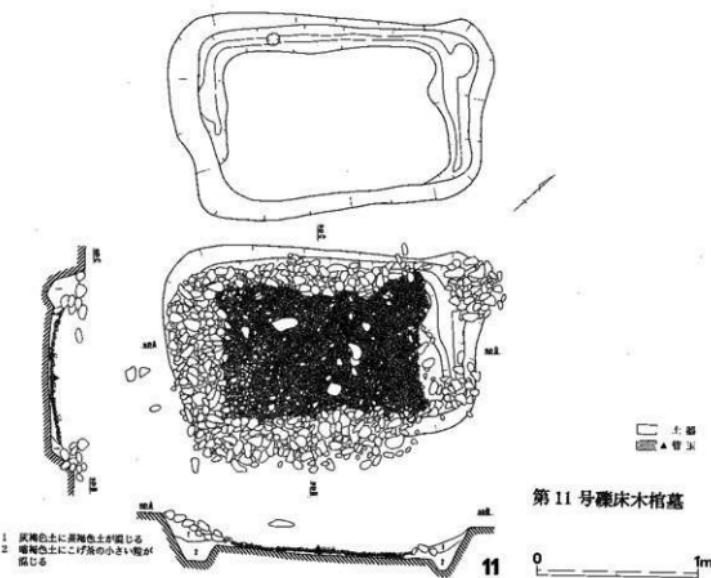
第17図 睡床木棺墓(1)



第18図 碣床木棺墓(2)

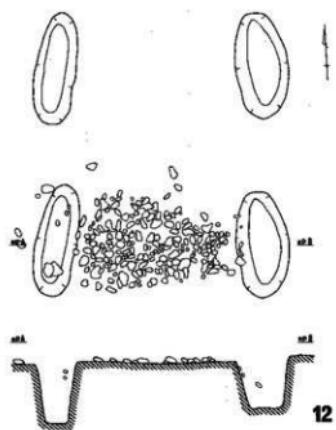


第10号砾床木棺墓

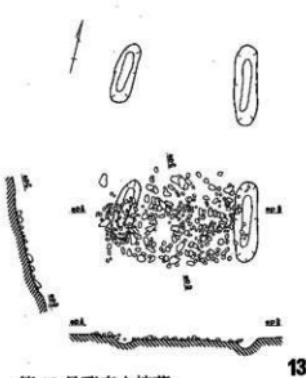


第11号砾床木棺墓

第19図 砂床木棺墓(3)

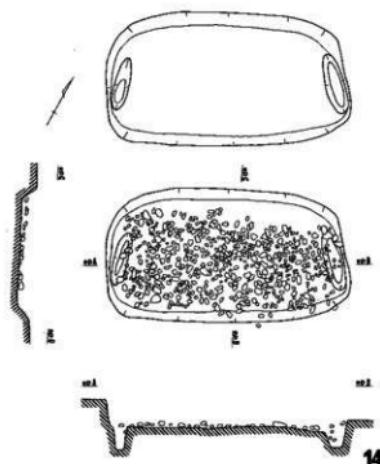


第12号櫛床木棺墓



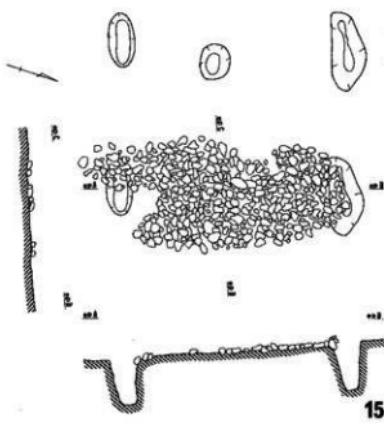
第13号櫛床木棺墓

13



第14号櫛床木棺墓

14

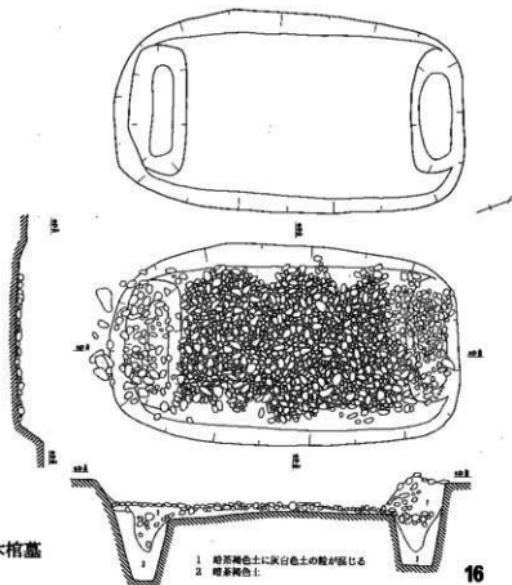


第15号櫛床木棺墓

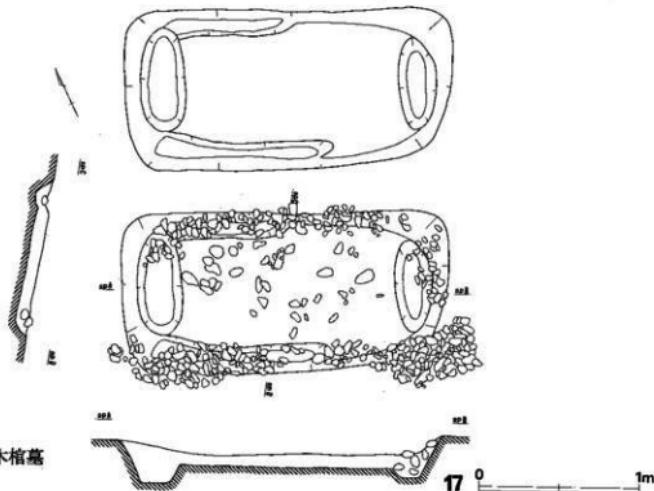
15



第20図 櫛床木棺墓(4)

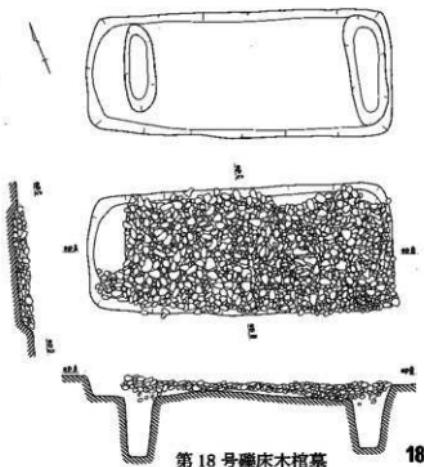


第16号櫛床木棺墓

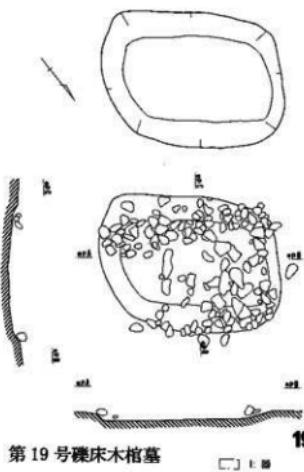


第17号櫛床木棺墓

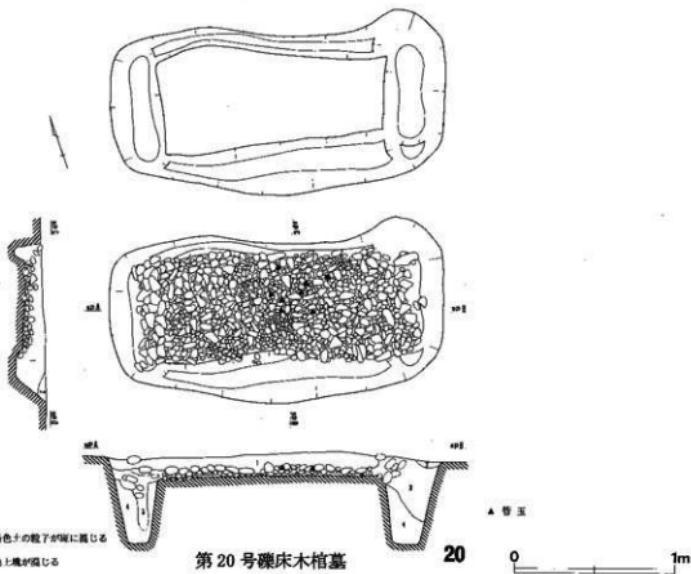
第21図 櫛床木棺墓(5)



第18号櫛床木棺墓



第19号櫛床木棺墓



第20号櫛床木棺墓

- 1 布面漆色土
- 2 1に黑色土と赤色土の粒子が混じる
- 3 黑灰色土
- 4 布面漆色土に黑色土塊が混じる

第22図 櫛床木棺墓(6)

第1号木棺墓 (SK-181) (第24図)

(位 置) X-48 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 長円形
(軸 の 方 向) 主軸 N-0°-E
(規 模) 長軸 195×短軸 85cm
(所 見) 良好に検出された。

(平 面 形 態) やや不整形に検出されたが、短軸が丸みをもつ長方形と考えられる。

(軸 の 方 向) 主軸 N-60°-E
(規 模) 長軸 180×短軸 85cm
(所 見) 小口の幅が左右で異なる。掘り方のためであろうか。

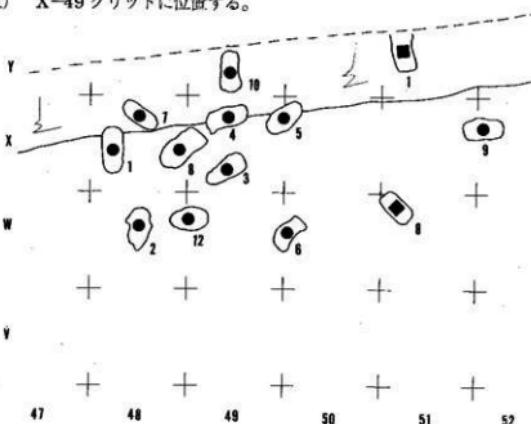
第2号木棺墓 (SK-183) (第24図)

(位 置) W-48 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 検出は不整形だが、底面のあり方などを考慮すれば、短辺が丸みをもつ長方形と考えられる。
(軸 の 方 向) 主軸 N-0°-E
(規 模) 長軸 180×短軸 110cm
(所 見) 不整形に検出されたが、発掘の技術的な問題であろうと考えている。

第4号木棺墓 (SK-187) (第24図)
(位 置) X-49 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) やや不整形に検出した。また、土坑の底面には柱穴状の落ち込みも検出されているが、木の根などの痕跡であろう。
(軸 の 方 向) 主軸 N-67°-E
(規 模) 長軸 180×短軸 80cm
(所 見) 木根等の搅乱によるのだろうか。検出した土坑は不整形であった。

第3号木棺墓 (SK-186) (第24図)

(位 置) X-49 グリッドに位置する。



第23図 木棺墓群

第5号木棺墓 (SK-188) (第24図)

(位 置) X-49、50 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 短辺が丸みをもつ長方形。
(軸 の 方 向) 主軸 N-55°-E
(規 模) 長軸 170×短軸 75cm
(所 見) 一方の小口板を支える穴が小さく浅い。

第6号木棺墓 (SK-189) (第24図)

(位 置) W-49、50 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 不整形に検出されたが、長方形を呈するのであろうか。
(軸 の 方 向) 主軸 N-47°-E
(規 模) 長軸 150×短軸 85cm
(所 見) 技術的な問題があり、不整形に検出してしまった。

第7号木棺墓 (SK-191) (第25図)

(位 置) X, Y-48 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 長円形を呈する
(軸 の 方 向) 主軸 N-58°-W
(規 模) 長軸 165×短軸 70cm
(所 見) 比較的良好に検出したが、小口板を支える穴は幾分深い。

第8号木棺墓 (SK-203) (第25図)

(位 置) X-48、49 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 不整形に検出されたが、短辺が丸みをもつ長方形を呈していたのであろうか。
(軸 の 方 向) 主軸 N-43°-E
(規 模) 長軸 200×短軸 110cm
(所 見) 不整形であり、小口板を支えるための穴も不均等である。場合によつては、木の根等の攪乱も考慮しなければならない。

第9号木棺墓 (SK-209) (第25図)

(位 置) X-51、52 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 長方形を呈する。
(軸 の 方 向) 主軸 N-84°-E
(規 模) 長軸 160×短軸 80cm
(所 見) 良好に検出された。一方の小口板を支えるための穴は小さく、浅い。

第10号木棺墓 (SK-219) (第25図)

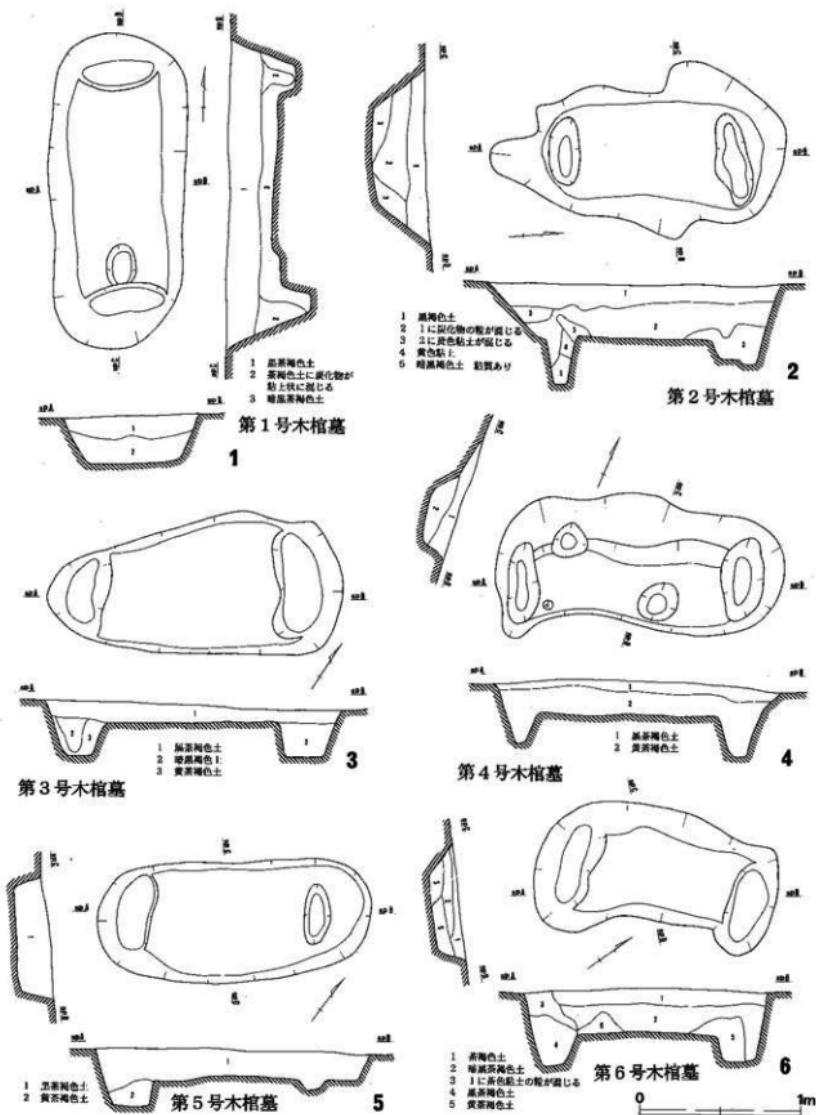
(位 置) Y-49 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 隅丸の長方形を呈する。
(軸 の 方 向) 主軸 N-0°-E
(規 模) 長軸 165×短軸 85cm
(所 見) 検出面からの掘り込みも深く、整っている。

第11号木棺墓 (SK-170) (第25図)

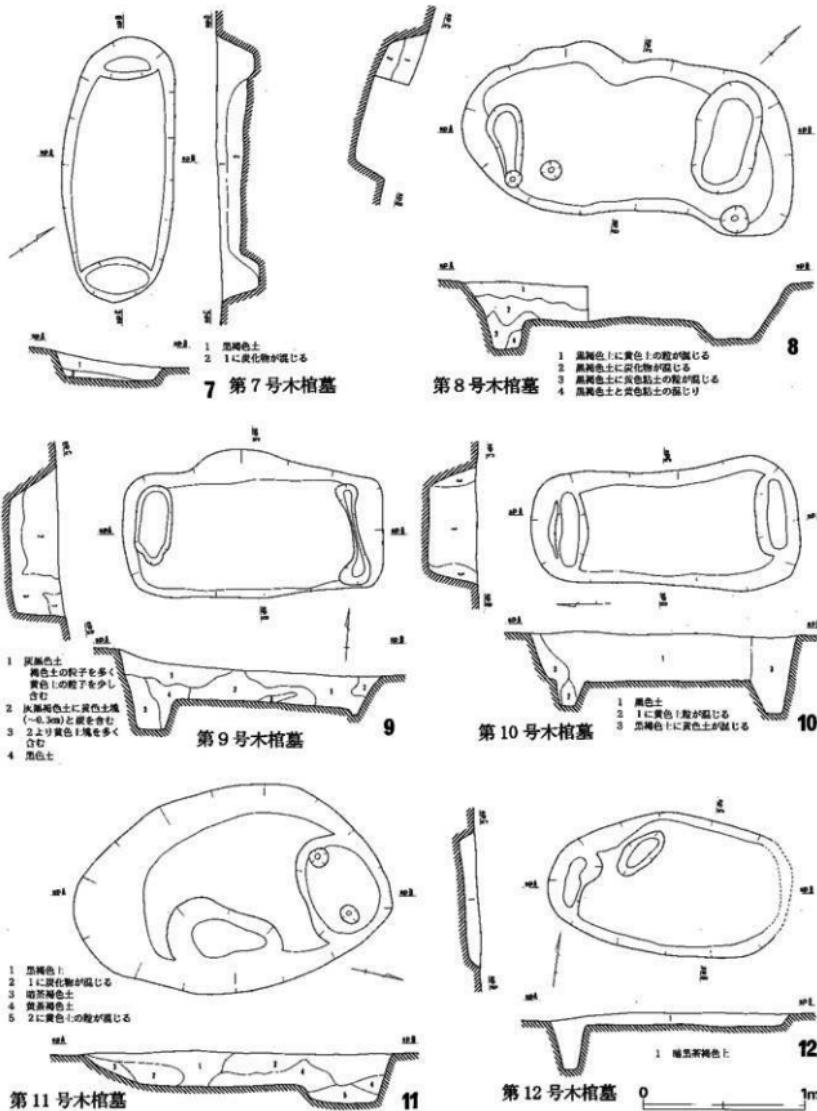
(位 置) R-41 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 不整形円形
(軸 の 方 向) 主軸 N-22°-W
(規 模) 長軸 190×短軸 130cm
(所 見) 一応、木棺墓の可能性を考えたが、自然の凹凸や木の根等による攪乱の可能性も否定できない。

第12号木棺墓 (SK-185) (第25図)

(位 置) W-48、49 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 不整形円形
(軸 の 方 向) 主軸 N-90°-E
(規 模) 長軸 150×短軸 75cm
(所 見) 検出が難しく、全形を把握することはできなかった。



第24図 木棺墓(1)



第25図 木棺墓(2)

6 土坑墓

弥生時代の木棺墓はⅠ区で1基、Ⅱ区で3基、Ⅲ区で4基が検出された。Ⅱ区で検出されたものは疊床木棺墓群(1)(第15図)と、Ⅲ区で検出されたものの内2基は木棺墓群(第23図)と隣接しており、時期差は不明ではあるが、これら集団墓と何らかの関連があるものと思われる。

第1号土坑墓 (SK-201) (第26図)

(位 置) Y-51 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 長方形。
(軸 の 方 向) 主軸 N-14°-W
(規 模) 長軸(160)×短軸80cm
(所 見) 全体として長方形を呈するものと思われる。検出面からの掘り込みも深い。底面に木棺墓の小口板を支えるための掘り込みと良く似た落ち込みを確認したが、土坑墓と考えている。

第2号土坑墓 (SK-63) (第26図)

(位 置) O-15 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 長円形
(軸 の 方 向) 主軸 N-8°-E
(規 模) 長軸 124×短軸 62cm
(所 見) 検出面からの深さも浅く、壁の立ち上がりも緩やかである。又その平面形態も細長い。土坑墓に分類するには無理があるかも知れない。

第3号土坑墓 (SK-95) (第26図)

(位 置) G,H-12 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 長円形
(軸 の 方 向) 主軸 N-55°-W
(規 模) 長軸 130×短軸 105cm

(所 見) 検出面からの掘り込みは比較的あったが、壁の立ち上がりは緩やかであった。壁の立ち上がりが緩やかなことから、自然の落ち込みの可能性も否定できないが、形態が長円形を呈していることから土坑墓とした。

第4号土坑墓 (SK-97) (第26図)

(位 置) H-12 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 不整形な長方形
(軸 の 方 向) 主軸 N-70°-E
(規 模) 長軸 190×短軸 100cm
(所 見) 検出面からの掘り込みが浅く、さらに上面からの搅乱のため壁を検出できない部分もあった。

第5号土坑墓 (SK-111) (第26図)

(位 置) E,F-10 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 不整な長方形
(軸 の 方 向) 主軸 N-0°-E
(規 模) 長軸 150×短軸 70cm
(所 見) 検出面からの掘り込みが浅く、壁の立ち上がりも僅かに確認できただに過ぎない。不整形な平面プランとなってしまったが、本来は長方形を呈するものであろう。

第6号土坑墓 (SK-222) (第26図)

(位 置) V-89 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 長方形
(軸 の 方 向) 主軸 N-48°-W
(規 模) 長軸 145×短軸 75cm
(所 見) 長方形を呈し、検出面からの掘り込みも比較的深い。壁の立ち上がりも良好であった。

第7号土坑墓(SK-195) (第26図)

(位 置) V-47 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 不整長円。
(軸 の 方 向) 主軸 N-45°-W
(規 模) 長軸 120×短軸 75cm
(所 見) 検出面からの掘り込みも深く、
壁は直線的に立ち上がるが、平面
形が不整形である。

第8号土坑墓(SK-208) (第26図)

(位 置) W,X-51 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 長方形。
(軸 の 方 向) 主軸 N-0°-E
(規 模) 長軸 190×短軸 90cm
(所 見) 上面の落ち込み等で、検出が難
しかった。検出面からの掘り込み
も浅く、床面には柱穴状の落ち込
みが確認されるなど、土坑墓とす
るには若干無理がある。

7 土 坑

弥生時代の土坑はI区で3基、II区で2基、III区
で4基が検出された。

第1号土坑 (SK-172) (第27図)

(位 置) R,S-41 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 不整楕円形
(規 模) 長軸 145×短軸 120cm

第2号土坑 (SK-126) (第27図)

(位 置) S-29,30 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 長円形
(規 模) 長軸 150×短軸 110cm

第3号土坑 (SK-223) (第27図)

(位 置) V-87 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 円形
(規 模) 長軸 90×短軸 80cm

第4号土坑 (SK-127) (第27図)

(位 置) T-28 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 円形
(規 模) 長軸 130×短軸 105cm

第5号土坑 (SK-103) (第27図)

(位 置) I-17 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 円形
(規 模) 長軸 80×短軸 80cm

第6号土坑(SK-218) (第27図)

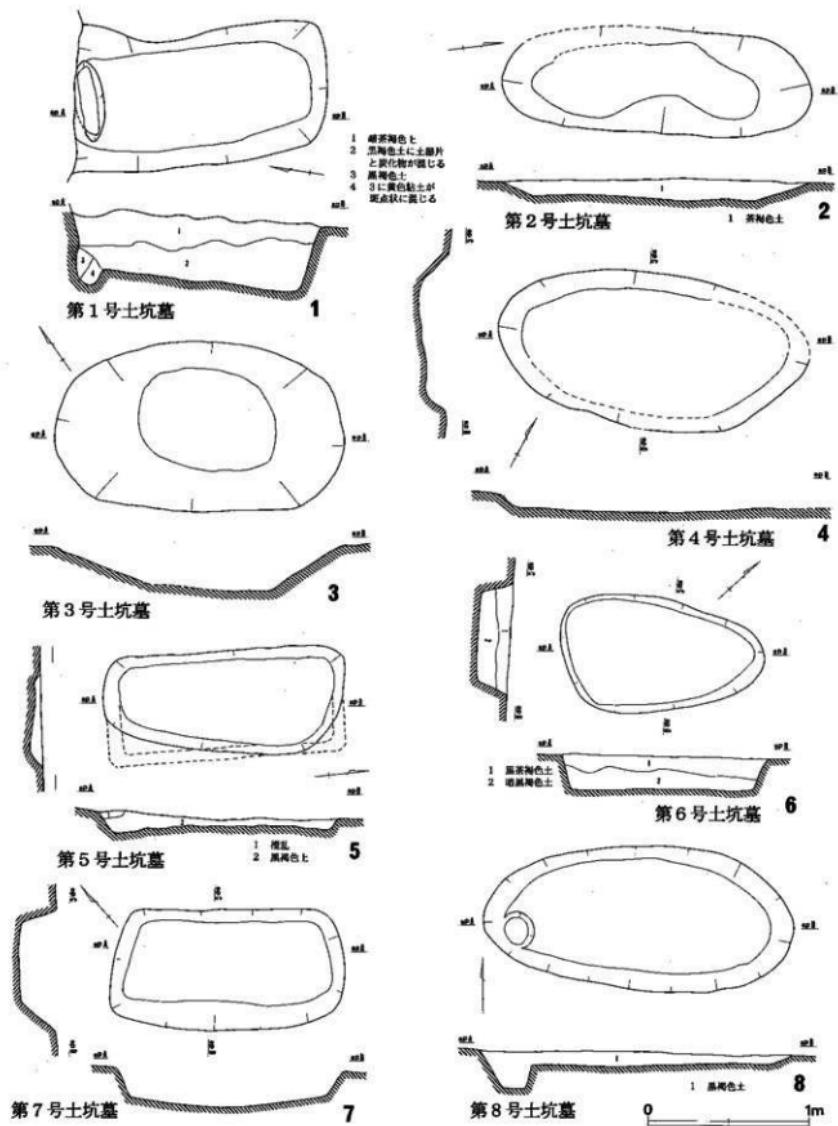
(位 置) W-52 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 長円形
(規 模) 長軸 110×短軸 80cm

第7号土坑(SK-110) (第27図)

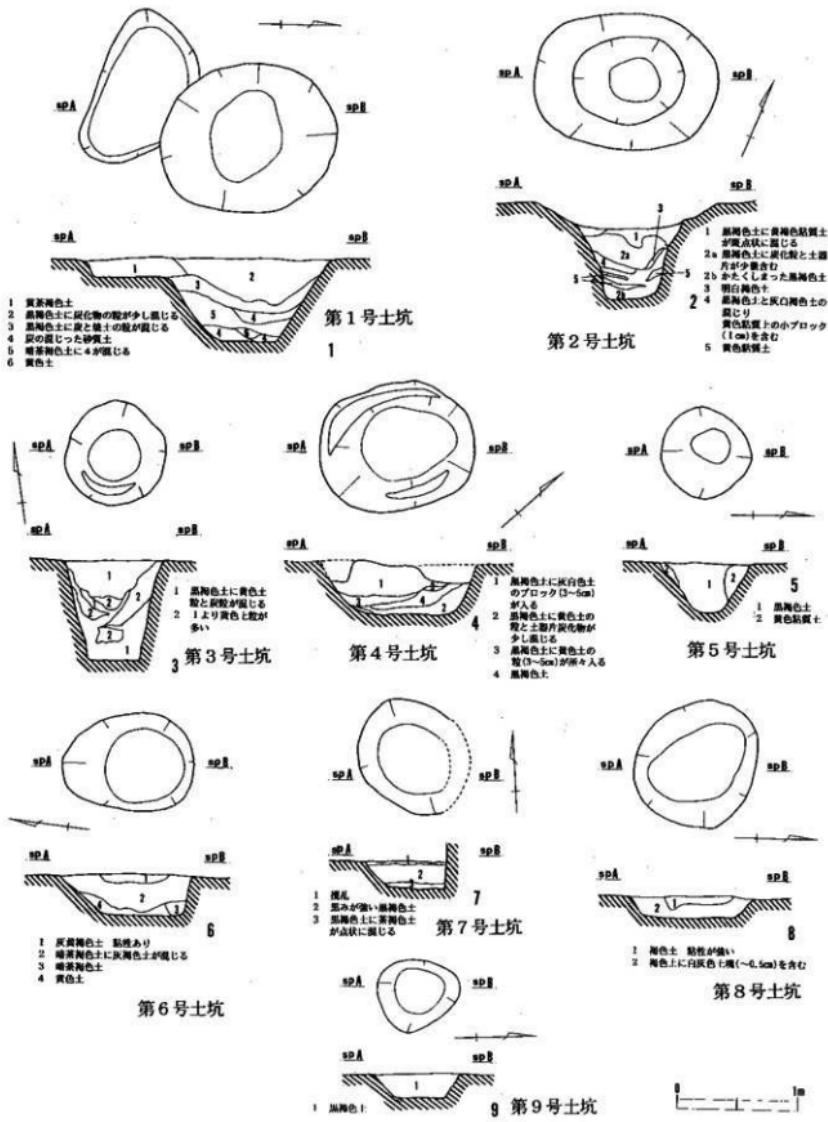
(位 置) E-9 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 円形
(規 模) 長軸(95)×短軸 80cm

第8号土坑(SK-214) (第27図)

(位 置) T-45 グリッドに位置する。
(平 面 形 態) 円形
(規 模) 長軸 110×短軸 100cm



第26図 土坑墓



第27図 土坑

第9号土坑(SK-72) (第27図)

(位置) O-13 グリッドに位置する。

(平面形態) 円形

(規模) 長軸 70×短軸 60cm

第2節 弥生時代の土器

弥生時代の土器は大半がグリッド出土のものである。いずれも弥生時代中期後半、栗林期に編年されるものである。破片資料が大半であり、その時期区分が困難であるが、資料を概観すると、一部に古い様相を残すものもあるが、全体的に栗林式期の新しい段階の様相を呈している。

壺

栗林式土器の壺については、その新旧を考える指標がいくつかあるが、通常はそれらを組み合わせて総合的に判断することが必要である。今回のように破片資料が大半の場合には時期判別が難しい。

口縁部は古い段階のものほど、開きが小さいことが指摘でき、新しくなるにつれて、口縁部も大きくなり、大きく反り返るようになるが、栗林式期の最終段階近くでは反対に口縁部の開きが小さくなる。破片資料のみでそれを鑑別することは難しい。

また、頸部は古い段階では胴部と頸部が分離し、細くて長い傾向にある。他方、新しい段階の頸部は胴部と一体化し、頸部と胴部上半が疎別しがたくなるという傾向がある。

胴部は古い段階ではやや寸詰まりの球形となり、徐々に胴部最大径が胴部下半部に移行するとともに、小さくなり、無花果形になる。

文様は古い段階のものは胴部全体に施文されるが、新しくなるにつれて施文の範囲が限られてくるとともに簡素化してくる。

第29図3は全形を知ることができないが、頸部がやや細く、胴部が球形に近い形状もとるように推測され、文様も胴部一面に展開される類ではなかろうか。古い様相であると考えられる。同様に第30図42も口縁部だけではあるが、口縁の外反が極めて小さく、古い様相を呈していると思われる類であ

る。また、第29図17は受け口状の口縁になるものだが、頸部が細くやや長めの感を受ける。古い様相である。第31図79は胴部下半部であるが、文様が全面に施文されることが予想され、胴部の張りも大きい。古い様相だといえるであろう。

復元実測できた第29図1は全体の形がわかる唯一の例であるが、口縁部の開きが小さく胴部最大径も比較的の上位にある。が、その径は大きくなない。また、胴部上半部の輪郭が直線的であり、文様も胴部全面には展開しない。比較的新しい様相を持っている。胴部上半の輪郭が直線的で、最大胴部径の小さい第29図5、6、7、8、9も新しい段階のものではないかと思われる。

他の口縁部については、即断できないが、栗林期の新しい段階のものと考えてよいであろう。

また、第32図87、88は広口壺である。量的には少ないが何件か。第35図159は頸部がやや内湾して立ち上がる。全面及び内面の口縁部に赤色塗彩されている。第35図162も159とはほぼ同様な形をとるが、通常の壺と同様の文様が施文されている。

甕

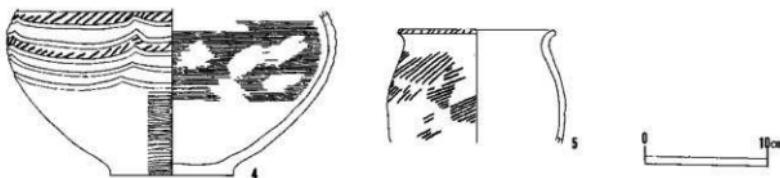
甕は全形が知られないと判断しにくい。その変遷大まかに示すと栗林式期の甕は肩をもたずに、すんなりと底部に至るもののが古く、徐々に胴部にふくらみが生じ、頸部が明確になり、肩部をもつようになり、胴部最大径となると考えられる。そして、一旦、肩部をもつようになった甕の胴部最大径は中位移行し、吉田式へと変遷すると考えられる。しかし、これはあくまで傾向であり、直接的に編年に基づくには困難がある。

第32図89、92、93、95などに見られるように胴部中位が膨らみやや寸詰まりの形態のものは古い様相のものと考えられる。第32図90は受け口状の口縁をもち、胴部中位に胴部最大径をもつ器形とな

第1号住居跡



第3号住居跡



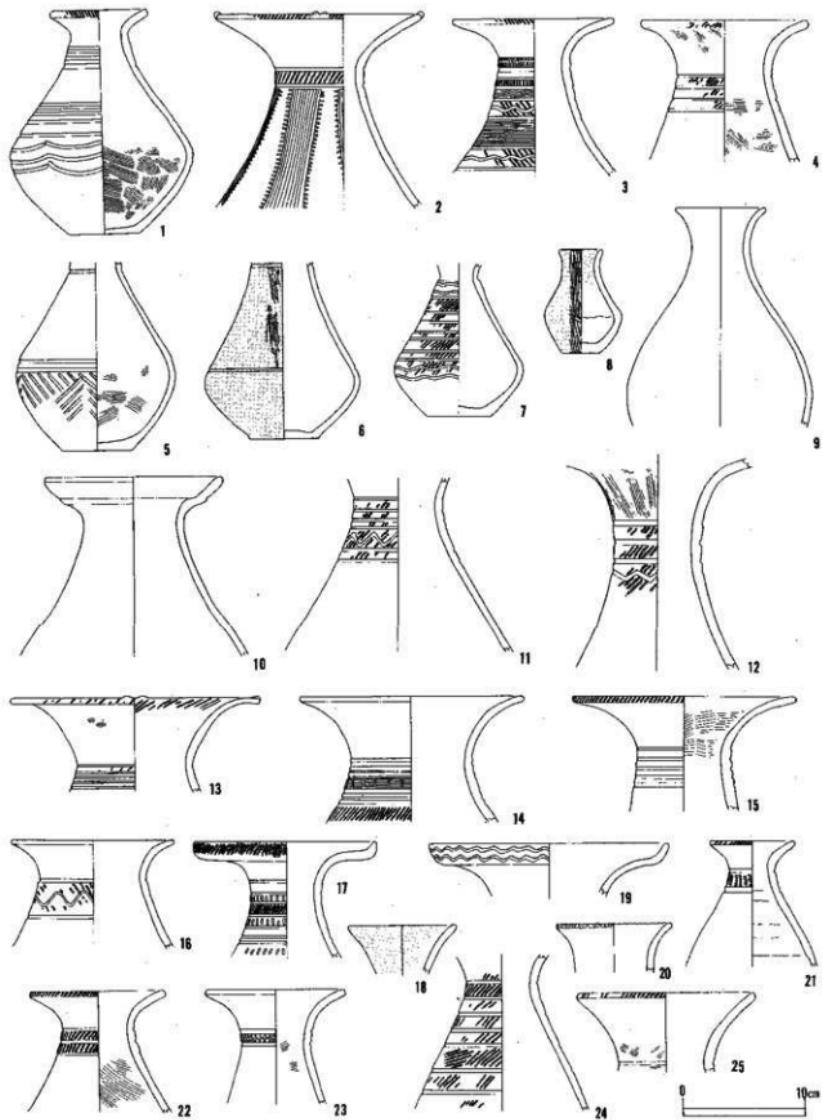
第28図 弥生住居跡出土の土器

らうか。やはり、古い段階のものと考えたいが、現状では受け口状口縁をもつ壺の系譜的变化については明らかではない。第32図91は全形を知りうる資料であるが、全体に細身で胴部中位に最大径をもっている。胴部上半部に櫛描波状文を施し、その下端に刺突文が一条めぐらされている。この刺突文は古い段階に良く認められるものである。器形的には第32図89の類よりもやや新しいと考えられ、そう古い感を受けない。刺突文がこうした器形にまで残るのであろうか。

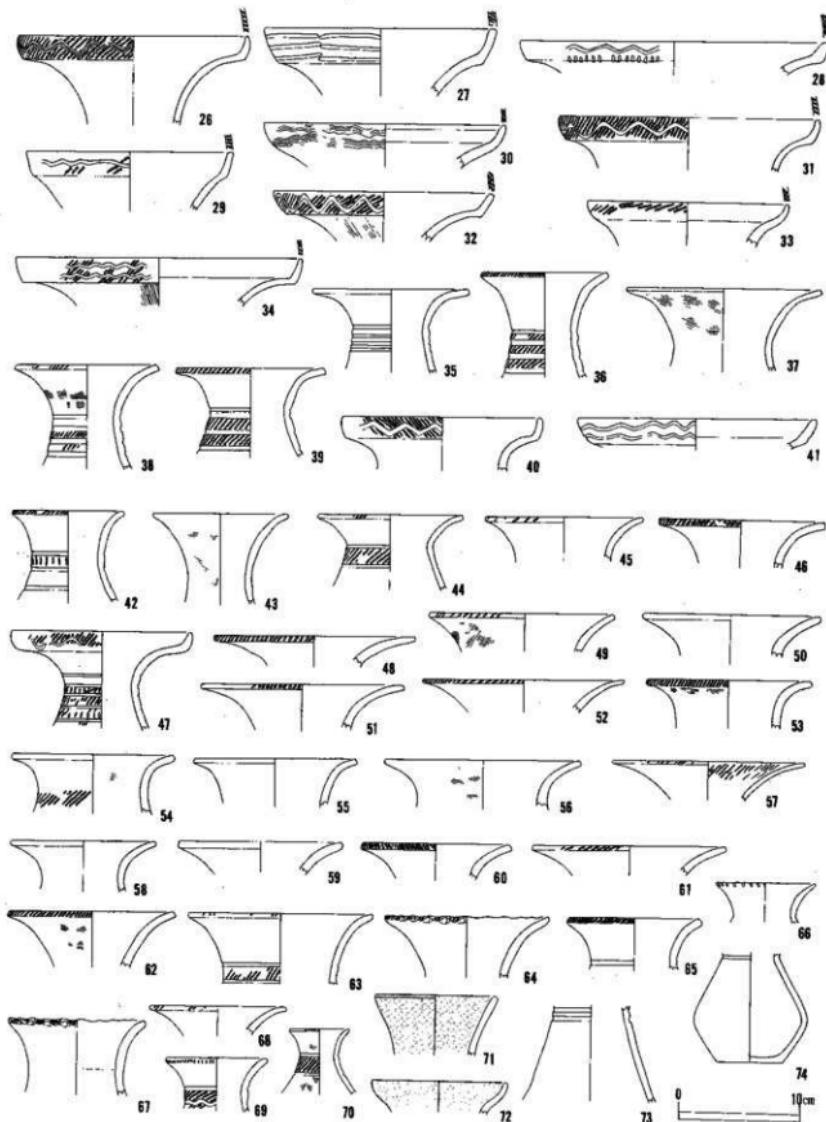
第32図94は全形を知ることはできないが、胴部中位に最大径をもち、底部にいたるやや長めの器形となると推測され、中位の様相をもつものと思われる。第32図96は91と同様に胴部中位に胴部最大径をもち、そのまま底部にいたるものと思われる。91と比較すると胴部の膨らみがやや弱い。中位の古さのものと思われる。第33図99は口縁端部に刻み目が巡る。頸部の屈曲から推測すると胴部の膨らみは小さく、明確な肩をもたないと思われ、中位の古さである。第33図100はやや受け口状の口縁をも

ち、頸部の屈曲から見て、肩を持つように思われる新しい段階のものであろうか。第33図101は口縁端部に刻み目をもち、頸部の屈曲から考えて、肩部をもちらながら胴部に至る器形をとるものと思われる。第33図102は口縁部の外反度が弱く、胴部の膨らみも小さいことが予想される。文様も縄文のみであり、やや特異な感を受ける。第33図103は栗林期のものでないかも知れない。第33図104は受け口状の口縁を呈する。頸部の屈曲から考えて、肩部をもつものと思われ新しい段階のものであろう。第33図105は緩やかに口縁部が外反し、緩やかに屈曲して底部にいたるのであろうか。第33図106、108、109、111、112、113、118は胴部上位に肩部をもち、底部にいたる器形となるものと思われ、いずれも新しい段階のものと思われる。

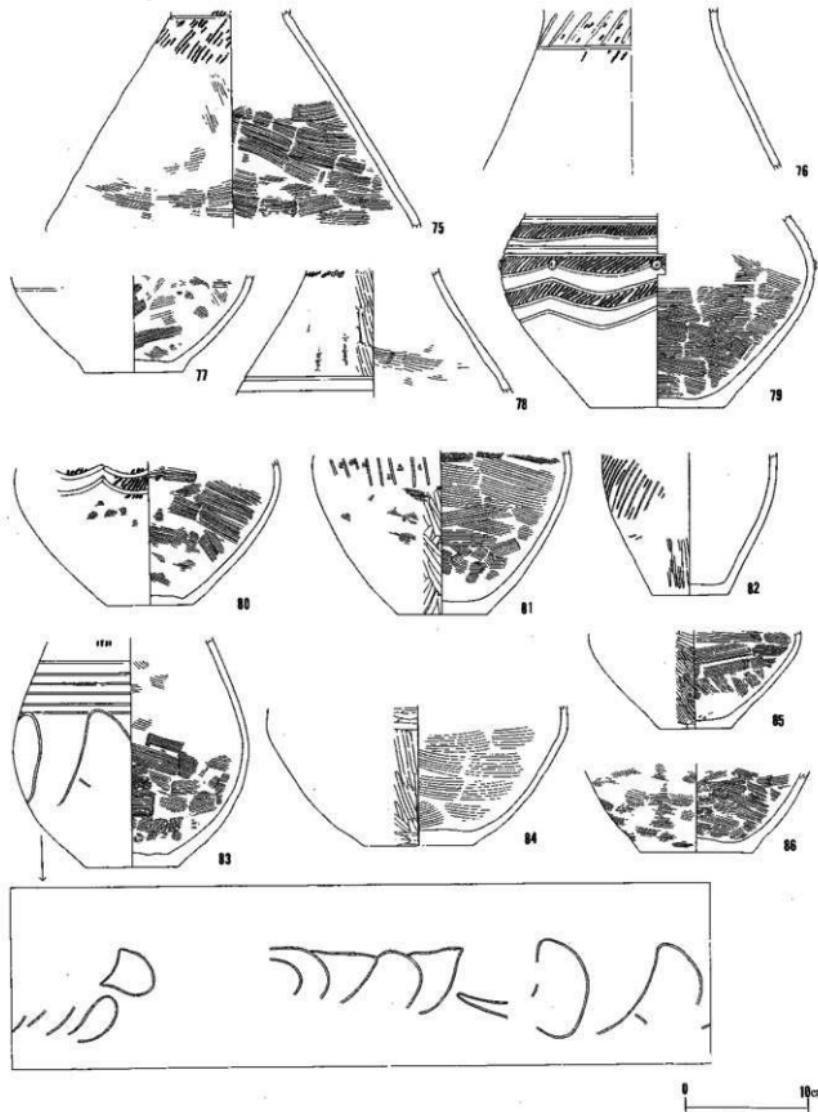
第33図110は小型の壺であるが、文様が施文されず特異なものである。第33図114、122はコの字重ねの文様を持つもので、114は器形的には第33図106の類と同様であろう。122は受け口状の口縁をもち、脚をもつ台付壺の器形となろうか。第33



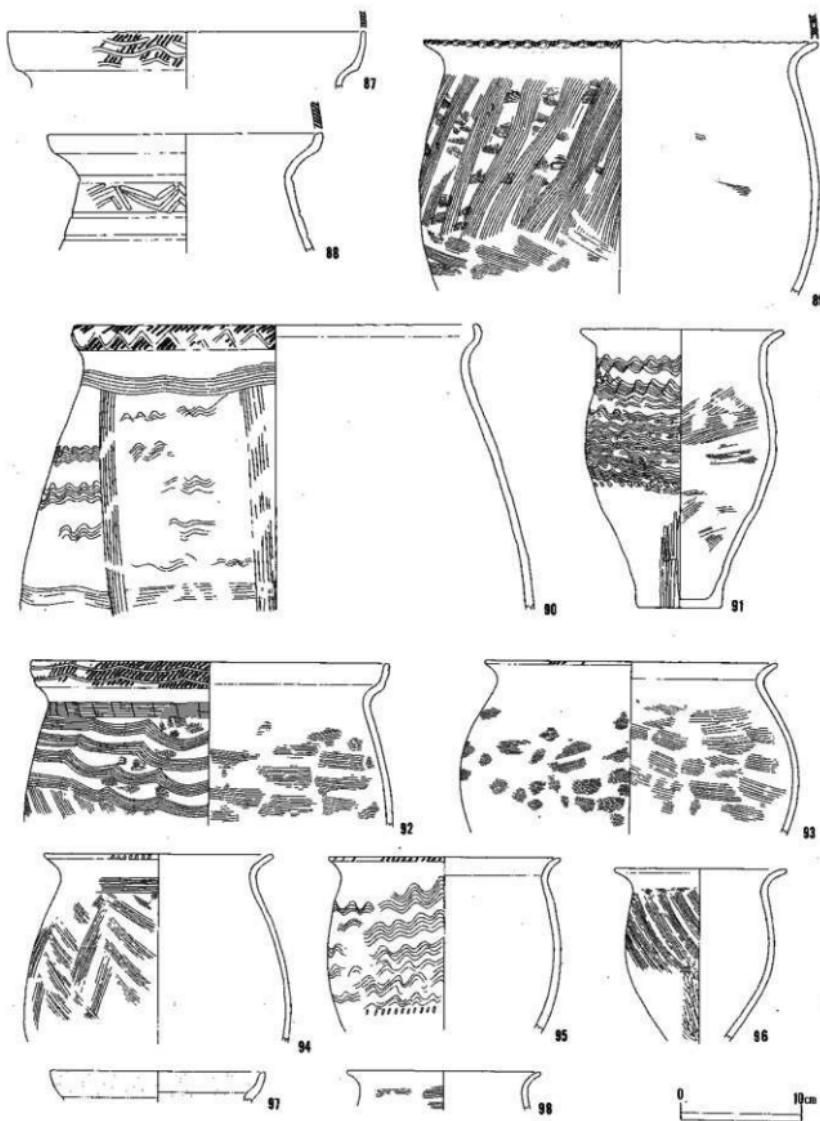
第29図 弥生時代の土器(1)



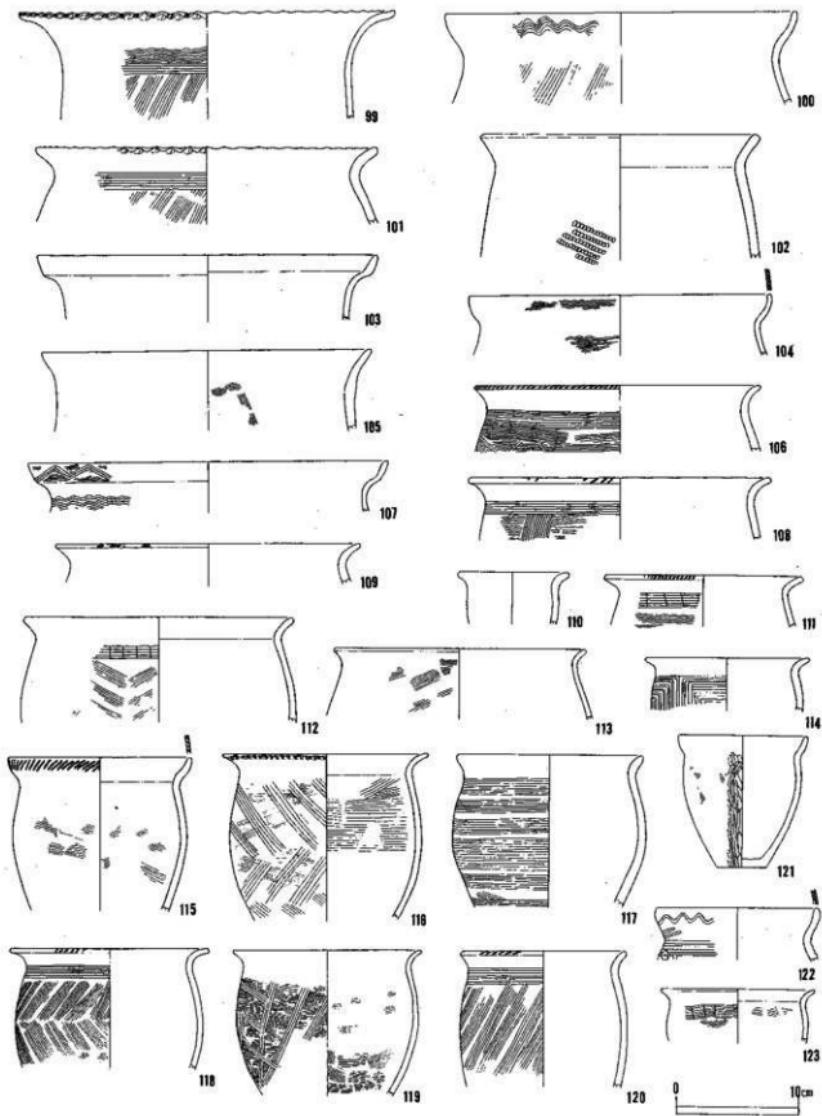
第30図 弥生時代の土器(2)



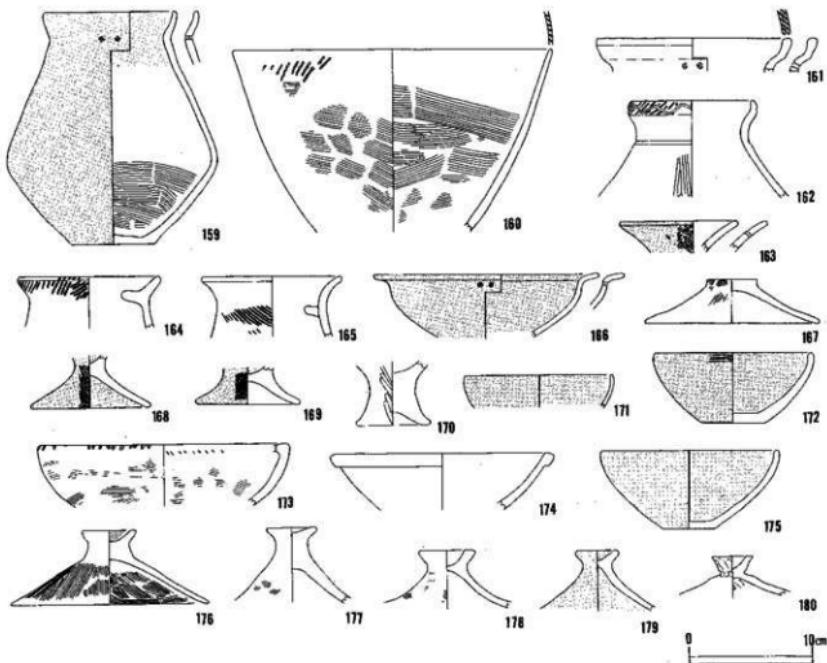
第31図 弥生時代の土器(3)



第32図 弥生時代の土器(4)



第33図 弥生時代の土器(5)



第35図 弥生時代の土器(7)

図115、121は特異な形状の甕である。いずれも受け口状の口縁をもち、胴部中位に胴部最大径をもち、緩やかに底部にいたる器形をとるものである。

第33図116、117、119、第34図126は胴部中位に胴部最大径をもち、やや寸詰まりな形態をとるものである。第32図89の類と同様であり、古い様相と考えている。

第33図123は頭部まで、全形を知ることができないが台付甕となると考えられる。

第34図124から132は肩部をもち底部にいたる器形をとるものと思われる。第33図106の類と同様で新しい様相をもつものであろう。ただし、第34図128は肩の張りが小さいものと思われ、若干古い

様相をもつものと思われる。

第34図133はほとんど肩をもたずに底部にいたる器形をとるものと考えられ、頸部も発達していない。また、沈線による横位の文様が背文される。古い段階のものであろう。第34図135は肩部をもつが頸著ではない。やや古様相、中位のものであろう。

第34図136、139、140、141は頸部が発達せずに胴部上端が強く外反したものである。器形的には最も古い段階に位置づけられると考えられるものであるが、県内の他地域の土器（中信）が持ち込まれているとも考えられ即断できない。136や141が器形的には古相であり、139、140がやや新しいものと考えられる。第34図143はこの類に近いもので

ほとんど肩部をもたず、そのまま底部に至るものである。

第34図138、142、144は胴部中位に胴部最大径をもち、寸詰まりな器形となるものと思われる。この中では138がその典型である。第34図148は口縁端部に縄文が背文され、肩部が直立つ。

第34図145、146、147、150、151は肩部をもち底部にいたる器形をとるものと思われるが、全形を知りえないために肩部の位置が定かではない。たとえば、146と147を比較すると147の方が肩部の発達が弱いように見える。こうした微妙な変化は全形がわかる資料でなくては判断しにくい。

第34図149は受け口状の口縁をもち、胴部にコの字重ね文が背文される。器形的には強い肩部をもたず、やや胴部が膨らむコップ状の形になるものと推測する。

第34図152は頸部が明瞭ではなく、そのまま底部に至る器形になるものか。やや古い様相をもっているものと思われる。第34図154も同様の器形となろうか。

第34図153は胴部中位に肩部をもち、底部にいたる器形をとるものと思われ、新しい段階のものであろう。第34図157も同様であろう。

第34図155はコ字重ね文の施文される受け口状の壺である。胴部が寸詰まりになると思われ、台付壺になろうか。第34図158は胴部の上位に肩部をもつ壺であろう。

鉢

第35図160は大型の鉢になるものと思われるあまり見ない器形である。第34図171、172は標準的な鉢であろう。第34図175は赤色塗彩されない。1

第34図174は口縁端部が折り返されて、突帯状に口縁端部を巡る。高杯の可能性もある。

高杯

第35図166、168、169が高杯である。全形を知りうるものはない。166は口縁部は水平にちかく開き、杯部の上半で屈曲するが稜を形成するにはいたらない。168、169の脚部は小さく広がり、短い。

蓋

第35図167、176、180が蓋である。167はつまり状に外反せず、平坦である。

その他

第35図164、165は広口の壺状呈するものと思われるが、口縁内部の頸部にちかい位置に張り出しがつくが一周はしない。口縁部は特に水差し状に成形された様子は特に認められない。

第35図173は鉢状を呈するが、口縁部が内側に折れている。

第3節 古墳時代の土器

古墳時代は遺物のみが検出され、遺構は検出されなかった。

壺

第36図1から4、6から10、第37図20が壺と考えられる。

第36図1は受け口状の口縁で、口縁部の上端及び下端に刻み目が認められ、二本の棒状突起が四単位垂下している。器面はへら磨きされる。第36図2は緩やかに外反する素口縁の土器である。第36図3は全体的に2と同様の外反するが、口縁部上端でやや外側を開く。口縁端部に水平方向のハケ整形痕が残る。明確なミガキの痕跡は認められない。第36図4は受け口状口縁であるが、1のように明確ではなく、屈曲するように外反する。全面ヘラミガキがなされている。第36図6は僅かにしか残存していないが、壺の口縁と考える。第36図7も壺の口縁部であろう。ハケ整形痕が残る。第36図8は大型の壺の底部、内外面ともにハケ整形した後にナデ整形されている。第36図9は小型丸底壺の胴部であろう。第36図10は壺の胴部下半部と考えたが、弥生の壺かも知れない。

壺

第36図11から36図19、第36図21から第37図40、42が壺である。

第36図11はくの字に外反する口縁をもち、球形の胴部をもつ。器表及び内面のヘラケズリの痕跡が残る。また、口縁部も中ほどでやや膨らんで端部いたる。

第36図12は11とほぼ同様の器形をとるものと考えられるが、口縁部の外反はくの字のように急激

に外反せず緩やかである。

第36図13は口縁部が弱いくの字状を呈し、球形の胴部をもつものと考えられる。口縁端部はメントリがなされる。器表及び内面にハケ整形痕が残る。

第36図14は口縁部がくの字状に外反し、胴部はやや肩をもつ球形になろうか。ハケ整形痕が残る。

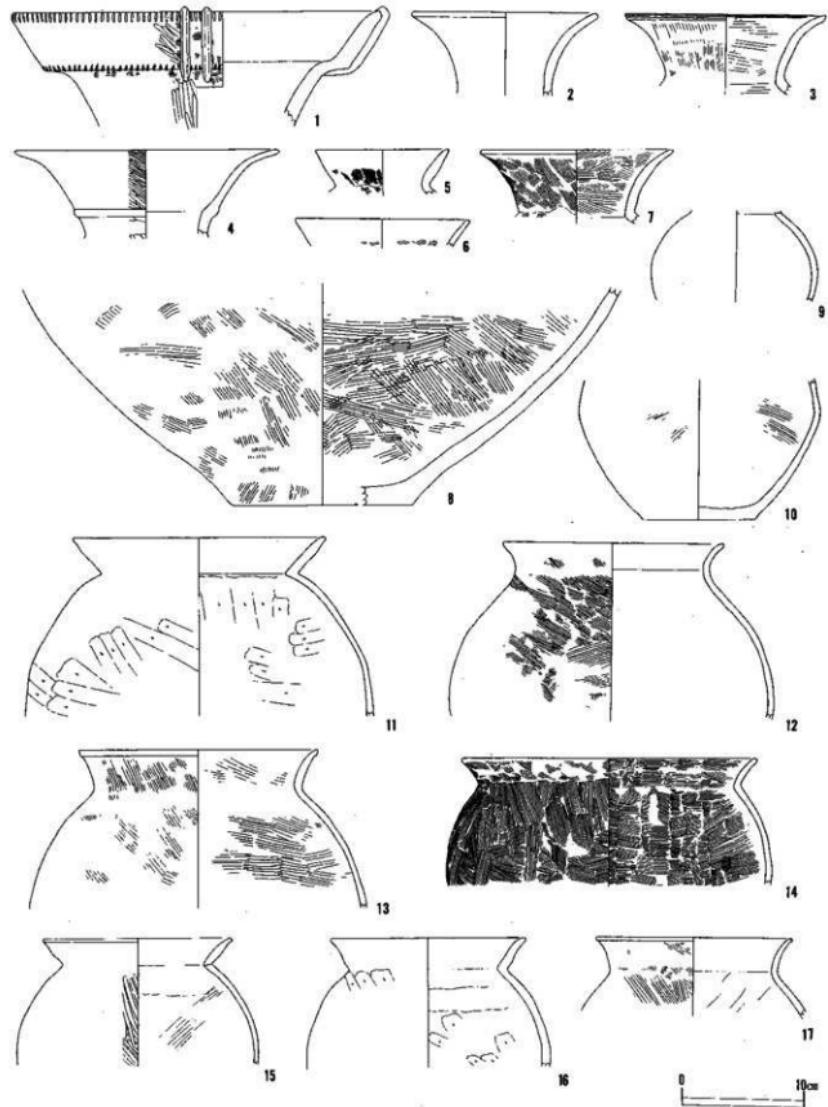
第36図15は口縁部がくの字状に外反し、球形の胴部をもつものと思われる。口縁部は中ほどやや厚くなり、口縁端部はメントリされる。内面にはハケ整形痕が残り、器表はヘラミガキされるが、口縁部にまで及んでいない。頸部と口縁部の接合痕が認められた。

第36図16はくの字状に外反する口縁と長めの球形にちかい胴部をもつものと思われる。口縁部は中程で厚みを増し、独特の輪郭を呈する。

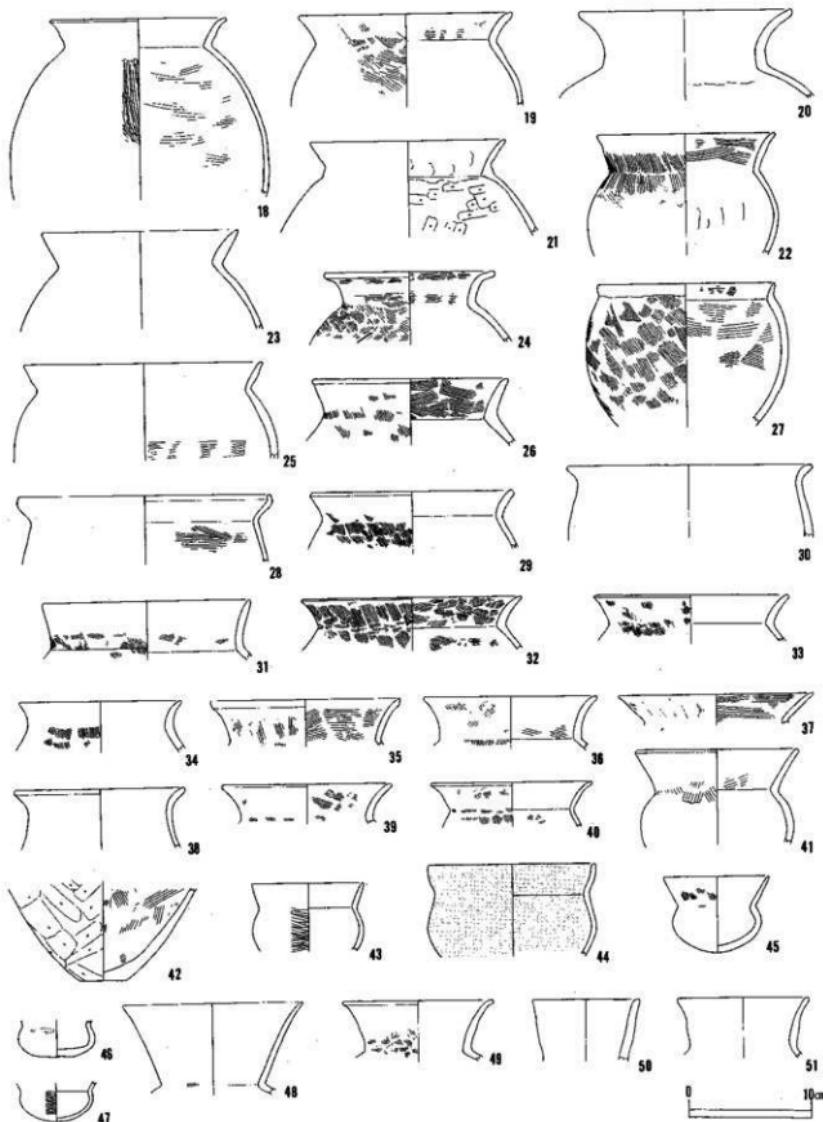
第36図17は緩やかなくの字状に口縁部が外反し、球形にちかい胴部をもつものであろうか。外面にはハケ整形痕が認められ、内面には僅かにヘラケズリ痕が観察される。

第37図18はくの字状に外反するやや長めの胴部をもった壺と思われる。口縁部は中程でやや厚くなり、端部はメントリされる。外面はヘラミガキされ、内面にはハケ整形痕が残る。第37図19はくの字状に外反する口縁部と球形にちかい胴部をもつ壺であろうか。口縁部はやや厚い。外面にはハケ整形痕が残り、内面も口縁部内面に僅かにハケ整形痕が残る。第37図21はくの字状に外反する口縁部と球形にちかい胴部をもつ壺である。内面はヘラケズリされる。

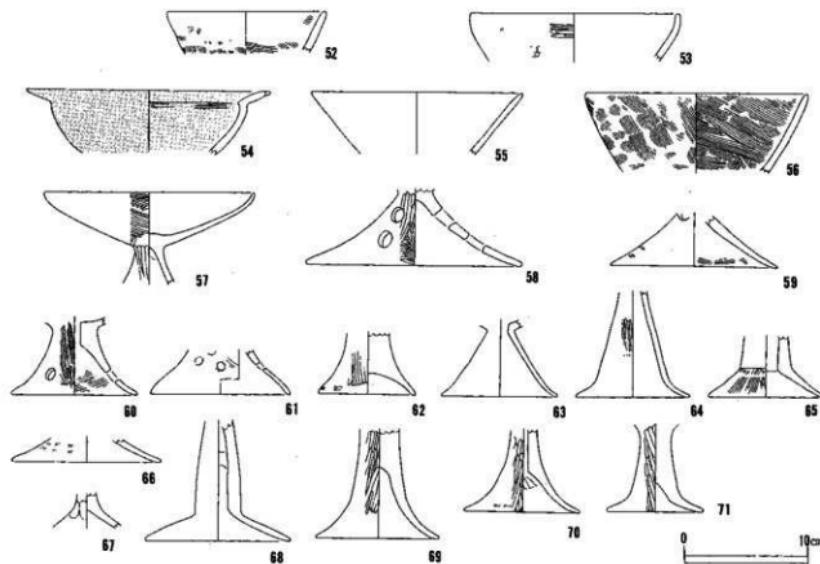
第37図22は口縁部が緩やかなくの字状に外反し、ほぼ球形の胴部をもつ。外面の頸部、口縁部の内側にハケ整形痕が残る。第37図23はくの字状に口縁部が外反し、やや長めの球形の胴部をもつ壺であろうか。第37図24はコの字状に口縁が外反し、ほぼ球形の胴部をもつであろうか。外面及び口縁部内部にハケ整形痕がのこる。第37図25はくの字状に外反し、ほぼ球形の胴部をもつものであろうか。口



第36図 古墳時代の土器(1)



第37図 古墳時代の土器(2)



第38図 古墳時代の土器(3)

小型丸底土器

縁部は中程で厚くなる。第37図26もくの字状に口縁部が外反する。胸部はやや肩をもつか、球形であろう。第37図27は球形にちかい胴部をもち、極端に短い口縁部をもつ。外面にハケ整形痕がのこる。第37図28は口縁部が内湾し、口縁部の立ち方も緩い。内面にハケ整形痕が残る。第37図29はくの字状に外反する口縁部の破片である。外面にハケ整形痕が残る。第37図30は一応古墳時代の土器と考えたが、類似する器形がなく、古墳時代のものではないかも知れない。第37図31は直線的に口縁部が立ち上がり、くの字状に外反しない。頸部との接合部を中心にハケ整形痕が残る。第37図32はくの字状の口縁をもつ。外面にハケ整形痕が残る。

第37図34から40は壺の口縁部破片ある。

第37図43から第38図52は小型丸底土器である。形態から二種に分類できる。第37図43から47のように寸詰まりで小型のものと第37図48から第38図52のように大型のものである。第37図49は一応この類に含めたか壺の可能性がある。

高杯

第38図53から71が高杯である。全形を知りうる例はない。第38図54は弥生中期のものである可能性がある。杯部はやや深い第38図55や56と浅い57がある。脚部は大きく開く第38図58から61、63、66、67と筒状の62、64、65、68から71がある。

第4節 平安時代以降の遺構

1 概要

本遺跡からは平安時代以降の遺構・遺物が検出された。I区では、竪穴式住居跡28棟・掘立柱建物跡4棟が検出された。II区では、竪穴式住居跡1棟・掘立柱建物跡1棟が検出された。III区では、竪穴式住居跡14棟・掘立柱建物跡3棟が検出された。IV区では検出されなかった。

2 竪穴式住居跡

平安時代以降の竪穴式住居跡は43棟検出された。検出段階では他に41棟の竪穴式住居跡と思われる遺構を検出していたが、いずれも検出面から掘りこみは浅く、壁のたちあがりは明確でない等で、住居跡とするにはいたらなかった。住居跡は調査区のI区とIII区に全体的に分布するが、その配置に規則性は認められない。大別すると3群に分類できるが、1ヶ所に何軒もの住居跡が重複している部分も多く、その年代の開きも多いものと思われる。(前出第9図)

第4号住居跡(SB-1)(第39図)

(位置) N、O-18、19グリッドに位置する。

(検出状況) SB-2、SB-13と重複して検出された。SB-13が最も古く、SB-1が最も新しい。

(軸の方向) 主軸N-81°-E

(平面形態) 方形。

(規模) (東西)4.1×(南北)4.1m深さ約25cm。

(竪) 南東隅に位置し、竪壁内の心材として、礫を用いていた。煙道が棟の外にのびる。

(柱穴) 柱穴状の落ち込みを4ヶ所に検出したが、その配置が整っておらず、柱穴とするかどうか判断に迷う。

ず、柱穴とするかどうか判断に迷う。

(床面壇状遺構) 竪の設けられた南壁と対応する北壁のはば中央に、低い階段状の高まりを検出した。検出は覆土中の硬軟を手がかりとしている。入り口の構造に伴う施設、あるいは屋内の棚状施設であろうか。

(遺物出土状況) 覆土中、住居床面より、浮いた状況で検出された。

(その他) 住居址床面で、SK-7、SK-8の二つの土坑が検出されたが、本住居址に伴うものではないと考える。

第5号住居跡(SB-2)(第40図)

(位置) N、O-17、18グリッドに位置する。

(検出状況) SB-1、SB-13と重複して検出された。東壁はSB-1に切られている。新旧関係はSB-13→SB-2→SB-1と新しくなる。

(平面形態) 方形を呈するが、東壁はSB-1によって切られていた。

(軸の方向) 主軸N-0°-E

(規模) (南北)4.2×(東西)(3.7)m深さ約25cm。

(竪) 明確に検出できなかった。東壁の南端に焼土と礫を検出した。しかし、明確ではなく、焼土や礫が本住居に伴うかどうか断言できない。

(柱穴) 合計6ヶの柱穴状の落ち込みを検出したが、その配置は不規則で、本住居に伴う柱穴とは断言できない。

(床面壇状遺構) 北壁のほぼ中央に舌状を呈する床面が壇状に高くなっている部分を検出した。床面より約16cm高く、フラットである。幅約1m、長さ約1.2mを計測した。

SB-1のものと類似するが、本住居の方が形態的に整っている。その機能等については、知る手がかりはないが、入り口に関連するもの、あるいは屋内の棚状遺構の可能性を指摘することができよう。

(遺物出土状況) 遺物の出土量は少ない。第72図20、第73図23が床面び密着して検出されたが、その他は覆土中より検出された。

第6号住居跡(SB-3)(第41図)

(位 置) P、Q-18、19グリッドに位置する。

(検出状況) SB-4、SB-33、SB-35、SB-36、SB-37の6軒の住居址が複雑に重複している。この住居群の北側部分ではほとんど壁の立ち上がりを検出できない状況であった。重複の状況から、SB-35、SB-37とSB-3、SB-4、SB-33、SB-36の二群に分類することができようか。

SB-3は南東コーナーが検出されたに過ぎない。

(窯) 南壁の南東隅で、礫を窯壁の芯として用いた窯が確認できた。

第7号住居跡(SB-4)(第41図)

(位 置) P、Q-17、18グリッドに位置する。

(検出状況) 南壁と東壁の一部が確認されたにとどまる。SB-33と切りあうが、両者の前後関係は確認できなかった。

(平面形態) 方形を呈する。

(軸の方向) 主軸 N-13°-W

(規模) (南北) 不明 × (東西) 3.1m

(窯) 東壁の中央南よりの部分に礫と焼土が検出された。ほとんど原形をたもっていないが、窯と判断している。

第8号住居跡(SB-5)(第42図)

(位 置) P、Q-16、17グリッドに位置する。

(検出状況) 北壁西半分の壁の立ち上がりは検出できなかった。

(平面形態) 方形

(軸の方向) 主軸 N-13°-W

(規模) (南北) 3.6 × (東西) 3.4m 深さ約15cm。

(遺物出土状況) 遺物の大半は床面より浮いた覆土中から出土したが、第74図57の大型甕は破損した状況で床面直上から出土した。

第9号住居跡(SB-6)(第42図)

(位 置) O、P-16、17グリッド。

(検出状況) 床面、周溝状遺構を検出したにとどまる。壁の立ち上がりは確認できなかった。

(平面形態) 全体を知ることができないが方形であろう。

(軸の方向) 主軸 N-12°-W
(規模) (南北) (4.1) × (東西) (3.7)
m。

(窓) 北東隅と考えられる部分から、
窓壁の芯にした窓が検出された。
(柱穴) 床面の範囲と考えられる部分か
ら、5ヶ所の柱穴状の落ち込みが
検出された。うち、4ヶ所の落ち
込みは方形に配置されるが、その
配置のあり方は確認した平面ブ
ランの軸と異なる。

第10号住居跡 (SB-7) (第43図)

(位置) L~N-19, 20 グリッド。
(検出状況) 検出面に平面プランは良好に検
出され、掘り込みも深かったため
良好に検出された。

(平面形態) 長方形を呈する。周溝が南壁の
東半をのぞいて巡る。

(軸の方向) 主軸 N-0°-E
(規模) (南北) 4.8 × (東西) 3.8m、
深さ約 25cm。

(窓) 南壁の南東隅で検出された。窓
の構築材は明確に確認できなか
ったが、窓壁の芯として用いられ
て疊及び焼土を検出した。

(柱穴) 床面に6ヶの柱穴状の落ち込み
が検出されたが、その配置は不規
則である。

(周溝) 壁直下に、幅約 20cm、深さ数
cm の周溝が検出された。

(土坑) 南東隅にある窓から、やや西に
離れた南壁際に、約 60×50cm、
深さ約 25cm の土坑が検出された。

(床面壇状遺構) 南壁のほぼ中央に、舌状に張り
出した壇状の遺構を検出した。先

壇部の幅は約 90cm、壁からの張
り出しの長さ約 50cm、床面より
の高さ約 10cm 弱である。

同様の遺構は SB-1、SB-2、
SB-12 でも検出されたが、本例
が最も整った形態を呈している。
その用途は明らかではないが、入
口の構造に関わるものか、屋内の
棚状の遺構ではないかと推測し
ている。

(遺物出土状況) 特筆すべき出土状況はない。い
ずれも床面から浮いた住居の覆
土から検出された。ただし、実測
可能な土器は窓付近で検出され
たものが多い。

第11号住居跡 (SB-8) (第44図)

(位置) O、P-14、15 グリッド。
(検出状況) SB-9、SB-43、SB-45 と重
複して検出された。確認面からの
掘り込みは極めて浅く、壁の立ち
上がりをわずかに検出したにと
どまる。軸の方向は、いずれの住
居も同じである。

検出面での切りあい関係の新旧
関係を確認することはできなかっ
たが、土層の断面の観察から、SB
-45→SB-43→SB-9→SB-8
と考えられる。

(平面形態) ほぼ方形を呈する。
(軸の方向) 主軸 N-15°-W
(規模) (南北) 3.3 × (東西) 4m
(窓) 東壁の南隅に疊が集中していた。
窓の残骸とも考える。
(柱穴) 二箇所に柱穴状の落ち込みを確
認したが、本住居に伴うかどうか

は不明である。

(遺物出土状況) 覆土から検出されたが、竈の前面部に集中する傾向がある。

第12号住居跡 (SB-9) (第45図)

(位 置) O、P-14、15 グリッドに位置する。

(検出状況) SB-8と重複する。SB-45→SB-43→SB-9→SB-8と考えられる。検出面での確認が難しく、わずかに住居の南半分と西壁の壁の立ち上がりを検出したにとどまる。

(平面形態) 全形を知りえないが、方形ないし長方形を呈するものと思われる。

(軸の方向) 主軸 N-9°-W

(規模) (南北) 不明 × (東西) 4.1m 深さ約 13cm

第13号住居跡 (SB-10) (第45図)

(位 置) O-25、26 グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面での確認が難しく、西側半分を検出したにとどまる。

(平面形態) 方形ないし長方形を呈するものと考えられる。

(規模) (南北) 3.1m × (東西) 不明

(竈) 検出した範囲内では確認することができなかった。

(柱穴) 床面に柱穴状の落ち込みを二箇所確認したが、本住居に伴うものか否かは判断できない。

(遺物出土状況) 床面より浮いた状況で、覆土内から出土した。

(位 置) N-26 グリッドに位置する。

(検出状況) 住居の南西コーナーのみが検出された。検出面より約 20cm ほどの落ち込みであったが、攪乱などにより、平面プランを検出できなかつた。

床面には径約 60cm、深さ約 10cm の焼土を伴う皿状の落ち込みを検出した。竈の痕跡かもしれない。

(遺物出土状況) 覆土中に散在していた。

第15号住居跡 (SB-12) (第46図)

(位 置) R、S-23、24 グリッドに位置する。

(検出状況) 他の遺構との切りあいもなく、良好に確認できたが、南壁は調査の都合上検出できなかつた。

(平面形態) 南壁を欠くが長方形と考えられる。

(軸の方向) 主軸 N-10°-W

(規模) (南北) (3.8) × (東西) 4.4m 深さ約 20cm。

(柱穴) 4ヶ所に柱穴が確認できた。大きさもほぼ同様であり、配置も六角形に配置されていたように考えられ、本住居の柱穴と考えられる。

(土坑) 住居の北西隅と東壁の北よりに、径約 60cm、深さ約 10cm、径約 50cm 深さ約 10cm の土坑が検出された。

(床面壇状遺構) 西壁の北よりに幅約 80cm、奥行き 60cm、高さ約 10cm の壇状の遺構が確認された。

(遺物出土状況) 覆土中及び床面の直上より炭化物を出土した。遺物には床面の直

第14号住居跡 (SB-11) (第46図)

上のもの、床面よりもやや浮いた覆土中のものがある。両者は特に区別されるものではなく、一体と考えたほうがよいであろう。住居の南西部に集石状の遺構が認められる。遺物も集中した。遺物の出土状況などを考えると、土坑等別の遺構が確認できなかつたものではないかと考える。

第16号住居跡 (SB-13) (第47図)

- (位置) N-18グリッドに位置する。
- (検出状況) SB-1、SB-2と重複する。これららの住居のために、北及び東壁の大半が検出できなかつた。
- (平面形態) 北及び東壁の大半が不明であるが、方形を呈するものであろう。
- (軸の方向) 主軸 N-0°-E
- (規模) (南北) 不明 × (東西) 2.9m。
- (竪) 検出することができなかつた。南壁の中央に SK-26 があり、この土坑で失われた可能性もある。
- (柱穴) 柱穴状の落ち込みが、床面に3ヶ所、確認されたが、その配置に規則性がなく、本住居に伴うとは考えにくい。
- (土坑) 南壁のはば中央に 100×70cm、床面よりの深さ約 20cm の土坑が検出されたが、本住居に伴うものではないと考える。
- (遺物出土状況) 覆土から検出された。

第17号住居跡 (SB-14) (第47図)

- (位置) M、N-17、18グリッドに位置する。

(検出状況) SB-18、SB-21、SB-22 重複して検出された。検出面からの掘り込みは極めて浅く、かろうじて北西部の壁の立ち上がりを確認したにとどまる。床面には SK-24 や SK-19 などの土坑もあり、床面も明確に確認できなかつた。

第18号住居跡 (SB-15) (第48図)

(位置) M、N-7、8グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面からの掘り込みはわずかである。住居跡の東側部分については比較的良好に検出することができたが、その他の部分についてはかろうじて、壁の立ち上がりを検出できたという状況である。また、SB-39 と切りあい関係をもつものと考えられるが、SB-39 の北側部分が検出されていないため、その新旧関係は不明である。

(平面形態) 長方形を呈する。

(軸の方向) 主軸 N-0°-E

(規模) (南北) 3.55 × (東西) 4.8m 深さ 15cm。

(竪) 住居跡の南東隅で検出したが、構造の大半は失われ、浅い皿状の落ち込みと焼土、煙道を確認したにとどまる。

(柱穴) 合計 4ヶ所に柱穴状の落ち込みを確認したが、配置には規則性がなく、本住居に伴うものか疑問である。

- (周溝) 北、東壁に幅約 10cm の周溝を確認したが、南及び西壁では確認できなかった。
- (その他) 南西隅に直径約 30cm の焼土を伴う柱穴状の落ち込みを確認している。本住居跡に伴うものかどうかは判然としない。
- (遺物出土状況) 覆土中より検出した。

第 19 号住居跡 (SB-16) (第 48 図)

- (位置) L-5 グリッドに位置する。
- (検出状況) 窯を中心にはその左右にわずかに壁の立ち上がりを確認したにとどまる。床面も追及したが明確にすることはできなかった。
- (窯) 粘土状の土壤を用いて、窯の両袖を構築している。幅、奥行きともに 1m を測るやや大型の窯であった。
- (遺物出土状況) 窯を中心には床面と思しき範囲から、実測可能な土器が比較的多く出土した。

第 20 号住居跡 (SB-17) (第 49 図)

- (位置) Q、R-20、21 グリッドに位置する。
- (検出状況) 検出面からの掘り込みは深く、良好に平面検出ができたが、住居跡の南側部分に溝状の擾乱があり、北壁は削られていた。
- (平面形態) 方形を呈するものと思われる。
- (軸の方向) 主軸 N-12°-W
- (規模) (南北) 不明 × (東西) 4.0m 深さ 35cm
- (窯) 焼土と浅い皿状の落ち込みを東壁の南隅近くに検出したが、窯で

あると明確に確認することができなかった。

- (柱穴) 床面上に五個の柱穴状の落ち込みを確認したが、その配置は不規則であり、本住居跡に伴う柱穴と断定できない。

- (遺物出土状況) 覆土中より検出されるが、窯の痕跡と思われる焼土を伴う皿状の落ち込み部分に集中する傾向がある。

第 21 号住居跡 (SB-18) (第 49 図)

- (位置) L、M-17、18 グリッドで検出された。
- (検出状況) 検出面からの掘り込みが浅く、住居跡の南側部分のみが検出された。住居と断定できないが、本報告では住居としておく。床面に SK-20、SK-21、SK-22 の三個の土坑を検出した。これらは、本住居跡に伴うものではないと考える。

- (平面形態) 南側部分を確認したにとどまるが、方形ないし長方形を呈するものと思われる。

- (軸の方向) 主軸 N-12°-W
- (規模) (南北) 不明 × (東西) 3.3m、深さ 15cm。
- (遺物出土状況) 覆土中から散漫に確認された。

第 22 号住居跡 (SB-21) (第 50 図)

- (位置) M、N-17、18 グリッドで検出された。
- (検出状況) 掘り込み面からの掘り込みが浅く、住居の西側部分を確認したにとどまる。

- (平面形態) 西側部分を検出したにとどまるが、方形ないし長方形を呈するものと思われる。
- (規模) (南北) 4.5m × (東西) 不明 深さ約 15cm。
- (柱穴) 床面に三個の柱穴状の落ち込みを確認したが、その配置は不規則で、本住居址に伴うものかどうか判然としない。
- (遺物出土状況) 覆土の下層から出土したが、その数は少ない。
- (第23号住居跡 (SB-24) (第50図)
- (位置) L、M-15、16 グリッドに位置する。
- (検出状況) SB-25 に、西側部分を切られる。検出面からの掘り込みは浅く、わずかに壁の立ち上がりを検出したにとどまる。
- (平面形態) 長方形を呈するものと思われる。
- (軸の方向) 主軸 N-8°-W
- (規模) (南北) 4.0m × (東西) 不明 深さ 10cm。
- (遺物出土状況) 覆土中より出土したが、量は少ない。
- (第24号住居跡 (SB-25) (第51図)
- (位置) L、M-15、16 グリッドに位置する。
- (検出状況) 検出面からの掘り込みは浅く、ようやく床面と壁の立ち上がりを確認したにとどまる。住居の中央西側に焼土が二箇所検出されたが、その性格は不明である。SB-24 を切る。
- (平面形態) 方形を呈する。
- (軸の方向) 主軸 N-8°-W
- (規模) (南北) 3.9 × (東西) 3.7m、深さ 10cm。
- (竪坑) 確認できなかつたが、西壁のほぼ中央で礫が4個ほど確認された。竪の袖の芯として利用されたものかも知れない。
- (柱穴) 床面二箇所より、径の小さい柱穴状の落ち込みを検出した。
- (床面壇状造構) 東壁のほぼ中央に、幅約 70cm、奥行き 30cm の舌状の壇状の床面の高まりを確認した。
- (土坑) 南壁の中央やや東よりに、土坑を確認した。
- (遺物出土状況) 覆土中より検出したが、その量は少ない。
- (第25号住居跡 (SB-34) (第51図)
- (位置) O、P-21、22 グリッドに位置する。
- (検出状況) 検出面からの掘り込みは比較的深く、平面プランも良好に確認できた。覆土中には炭化物や焼土が、床面より浮いた状況で散布していた。
- (平面形態) 長方形を呈する。
- (軸の方向) 主軸 N-0°-E
- (規模) (南北) 4.0 × (東西) 3.7m、深さ 30cm。
- (竪坑) 南壁の東隅で検出された。礫を壁の芯に用いている。また、焚口の上部にも礫を芯材として用いており、礫がブリッジ状に残されていた。幅約 1m、奥行き 1.5m である。
- (土坑) 竪の西側に隣接して、不整長方

形の土坑が検出された。約 70×50cm、深さ約 20cm を測る。

(遺物出土状況) 本住居跡の覆土中には、床面よりも浮いた形で、焼土や炭化材がブロック状に出土した。遺物も焼土や炭化材とほぼ同レベルで検出された。相対的ではあるが、竈の周辺に遺物が集中する傾向を読み取れる。本住居の全体の遺物出土状況は焼失した住居跡の窪みに遺物を廃棄、あるいは流入した状況を示していると考えられる。それにも関わらず、竈の周辺に遺物が集中する傾向があるのは不思議である。

第 26 号住居跡 (SB-39) (第 52 図)

(位置) L, M-7, 8 グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面は床面の直上であり、壁の立ち上がりは 10cm に満たない。床面の範囲を確認するように努めたが、南半分の検出にとどまった。SB-15 との切り合いも想定されるが、北半分が検出できなかつたため、不明である。

(平面形態) 方形ないし長方形を呈するものと思われる。

(規模) (南北) 不明 × (東西) 3.6m、深さ 5 cm。

(竈) 住居跡の南東隅近くに、僅かな焼土の分布を確認した。また、その部分の南壁が煙道上に掘り込むことができた。竈の痕跡と考えることができよう。

(柱穴) 小さな柱穴状の落ち込みを一箇

所確認したが、おそらく、木根などの痕跡が誤って検出されたものであろう。

(土坑) 竈の前面に、長さ約 160cm、幅約 60cm、深さ約 30cm ほどの不整形な土坑が検出された。床面から掘り込まれており、本住居跡に伴う遺構と考えている。

(遺物出土状況) 覆土中で検出された。

第 27 号住居跡 (SB-48) (第 52 図)

(位置) Q, R-29, 30 グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面からの掘り込みは比較的深く、ほぼ全形を確認したが、東壁の竈より、南半分は検出することができなかった。

(平面形態) 方形を呈する。

(軸の方向) 主軸 N-0°-E

(規模) (南北) 3.5 × (東西) 3.7m。

(竈) 東壁のほぼ中央に検出された。僅かに、竈の構築材が残っていた。また、竈の内側に礫を確認した。おそらく、竈壁の芯材となっていたものであろう。

(柱穴) 床面より、合計十個の柱穴状の落ち込みを確認している。やや直径が小さく、その配置は不整形である。

(遺物出土状況) 覆土中より検出された。

第 28 号住居跡 (SB-49) (第 53 図)

(位置) G-17, 18 グリッドに位置する。

(検出状況) 僅かな床面の残存をたよりに、住居跡と思われる方形の平面プランを検出した。壁の立ち上がり

は僅かである。床面上にいくつかの柱穴状の落ち込みを確認したが、木根等の痕跡であろう。

(窟) 南壁の南東隅に皿状の落ち込みと焼土を確認した。窓の可能性を考えることができるが、断定できない。

(遺物出土状況) 覆土中より出土した。

第29号住居跡 (SB-52) (第53図)

(位 置) R、S-28、29 グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面で僅かに色調の異なる部分を確認したが、平面プランが明確に確認できないため、トレンチを十字に設定し、床面をおうという調査方法を選択した。その結果、北側部分は SB-55 に切られるが、東、西、南壁の立ち上がりを確認することができた。

(平面形態) 長方形を呈する。

(軸の方向) 主軸 N-10°-W

(規 模) (南北) 不明 × (東西) 4.2m、深さ 20cm。

(窟) 南壁の南東隅に、礫が集合し、その下部に皿状の落ち込みを検出した。焼土は検出されなかったが、窓の痕跡と考える。本遺跡では窓がそのまま残されていることは少なく、本住居例のように礫が本来の位置から離れて確認されることが多い。

(柱 穴) 合計 5 個の柱穴状の落ち込みを確認したが、径がやや小さく、その配置も不規則である。

(床面壇状遺構)

西壁の中央、やや南側に、二段の壇状の遺構を確認した。北側半分は設定したトレンチによって壊してしまった。壇状の遺構は確認したものの、設定したトレンチの土層セクションでは観察することができなかった。同様の壇状の遺構は本住居以外でも検出しているが、明確に確認することは難しい。調査時に意識しすぎた結果であるかも知れず、今後の類例の増加等を待ちたい。

(遺物出土状況) 窓周辺の覆土より検出した。

第30号住居跡 (SB-53) (第54図)

(位 置) R、S-27、28 グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面での平面プランの確認が困難であったため、トレンチを設定し、床面を追うことで壁の立ち上がりを検出した。西側は調査区の外に延びる。南壁の立ち上がりは確認できなかったが、北及び東の壁の立ち上がりは比較的良好に検出することができた。

(平面形態) 方形ないし長方形を呈するものと考えられる。

(軸の方向) 主軸 N-5°-W

(規 模) (南北) 不明 × (東西) 不明

(窟) 南壁の南東隅で検出された。礫を窓の壁の芯に用いる。

(柱 穴) 大小 5 個の柱穴状ビットを検出した。配置は不規則であり、本住居の柱穴とは考えられない。

(遺物出土状況) 特に集中するようなことはなく、

覆土内に散在して検出された。

(遺物出土状況) 覆土中から検出された。

第31号住居跡 (SB-54) (第55図)

(位置) S、T-29、30 グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面で落ち込みを確認したが、明確でなかったため、トレンチを設定して床面を追い、壁の立ち上がりを確認したが、住居の南東隅を確認したにとどまる。床面は凹凸が目立つ。

(竈) 南壁の南東隅よりから検出されたが、検出時に大半が失われており、皿状の落ち込みと焼土を確認したにとどまる。

(遺物出土状況) 竈周辺の覆土より、少量の遺物を検出した。

第32号住居跡 (SB-55) (第55図)

(位置) S、T-28、29 グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面では複数の住居の切りあいが予想されたが、平面プランを明確に検出することができなかった。そこで、トレンチを設定し、床面を追い、壁の立ち上がりを確認する手法をとった。北、西、及び東壁の一部をかろうじて検出した。

(平面形態) 長方形を呈する。

(軸の方向) 主軸 N-10°-W

(規模) (南北) 不明 × 東西 3.2m。

(柱穴) 床面に大小の柱穴状の落ち込みを確認したが、配置が不規則であり、本住居の柱穴かどうか不明である。

第33号住居跡 (SB-56) (第56図)

(位置) W、X-43 グリッドに位置する。

(検出状況) 当初、竈らしい遺構を確認しため、周囲を精査したが、明確な平面プランを確認できかった。

(竈) 住居の南壁、南東隅近くで検出された。礫を芯材として構築されていたものと思われる。

(土坑) 竈に隣接して不整円形の土坑が確認されている。

(柱穴) 柱穴状の落ち込みを2ヶ所から検出したが、本住居に伴うものではないと考える。

(遺物出土状況) 覆土内に散在して検出された。

第34号住居跡 (SB-57) (第57図)

(位置) U-W-42、43 グリッドに位置する。

(検出状況) 黒色土中にやや性格の異なる黒色土が落ち込みであり、平面プランの検出や壁の立ち上がりを確認することは大変に難しかった。精査したが西壁の立ち上がりは確認できなかった。覆土中には炭化材がブロック状に検出された。

(平面形態) 長方形

(軸の方向) 主軸 N-0°-E

(規模) (南北) 5.8m × (東西) 不明。深さ 20cm。

(竈) 住居の南東隅にいくつかの土坑が確認されたが、竈は検出することができなかった。

(遺物出土状況) 覆土中より検出された。

第 35 号住居跡 (SB-62) (第 58 図)

(位 置) W、X-45、46 グリッドに位置する。

(検出状況) 当初、一軒の住居と考えて、調査を開始したが、内側にすっぽりと収まるようにもう一つの住居が検出された。拡張の痕跡かもしれない。

(平面形態) 不整方形

(軸の方向) 主軸 N-0°-E

(規模) (南北) 不明 × (東西) 4.9m、深さ 25cm。

(竈) 西壁の中央、やや北よりに検出された。大半は失われ、燃焼部の床面等が僅かに残る程度である。若干の礫が散布することから、礫を竈壁の芯にしたものと考えられる。

(柱穴) 床面に小さな柱穴状の落ち込みを確認されたが、木根等の搅乱によるものであろう。

(遺物出土状況) 覆土中より検出された。

第 36 号住居跡 (SB-64) (第 59 図)

(位 置) W、X-48、49 グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面から掘り込みが浅く、僅かな壁の立ち上がりを確認したにとどまる。一軒の住居としては規模が大きく、二軒以上の住居の切りあいを一軒にしているのであろう。

(平面形態) 長方形

(軸の方向) 主軸 N-14°-E

(規模) (南北) 5.1 × (東西) 7.2m、深さ 20cm。

(竈) 南東隅に検出された。礫を芯材とした竈壁を構築していたものと考えられる。煙道が比較的良好に検出された。

(土坑) 竈に隣接して、円形の土坑が検出された。

(遺物出土状況) 覆土中より検出されたが、竈部分からの出土が比較的多い。

第 37 号住居跡 (SB-66) (第 60 図)

(位 置) R、S-45、46 グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面で床面の一部が露呈した状況で検出されたため、床面を追い、僅かな壁の立ち上がりを確認した。

(平面形態) 長方形

(軸の方向) 主軸 N-0°-E

(規模) (南北) 6.0 × (東西) 4.8m、深さ 10cm。

(竈) 南東隅で検出された。僅かに、芯材となった礫と細長い燃焼部の床面が焼土とともに検出されたにとどまる。

(柱穴) 床面に十個の柱穴状の落ち込みを確認したが、径がやや小さく、配置も不規則である。本住居に伴うものではないと判断する。

(床面上の焼土) 住居のほぼ中央、及び南東側に偏った部分で、床面上に焼土を確認している。

(遺物出土状況) 遺物はほとんど出土しなかった。

第 38 号住居跡 (SB-67) (第 61 図)

(位 置) R、S-46、47 グリッドに位置する。

(検出状況) 中央部に大きな搅乱があったが、壁の立ち上がり等比較的良好に検出できた。床面から大型の土坑が2基検出されたが、いずれも本住居に伴うものではないと判断される。

(平面形態) 方形を呈する。

(軸の方向) 主軸 N-10°-E

(規模) (南北) 4.5 × (東西) 4.0m、深さ30cm。

(窯) 南壁の南東隅と東壁の南東隅の2箇所で確認した。窯を作り替えたためであろう。南壁のものが古く、東壁のものが新しいと考える。東壁に検出された窯は窯壁の芯材として礫や土器片を用いる。一部粘土のブロックも確認されたが、窯壁全体には分布しない。

(遺物出土状況) 覆土中より検出されたが、東壁の窯の部分に集中する傾向がある。土器片が窯周辺に集中する傾向は本住居以外でも観察される。

第39号住居跡 (SB-75) (第61図)

(位 置) X、Y-47、48 グリッドに位置する。

(検出状況) SB-76と重複して検出されたが、南東隅の一部が検出されたのみである。

(平面形態) 全形を知ることはできないが、方形ないし長方形を呈するものと考えられる。

(規 模) (南北) 不明 × (東西) 不明

第40号住居跡 (SB-85) (第62図)

(位 置) O、P-38、39 グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面からの掘り込みが浅く、当初は溝状の平面プランであった。精査すると、溝の内側も僅かに掘り込まれていた。また、南東隅に窯が検出されたことから住居と判断した。

(平面形態) 長方形

(軸の方向) 主軸 N-0°-E

(規模) (南北) 5.2 × (東西) 4.1m、深さ10cm。

(窯) 南東隅に検出した。礫を窯壁の芯材としたものと思われる。

(遺物出土状況) 床面直上及び窯周辺の覆土から検出された。

第41号住居跡 (SB-86) (第62図)

(位 置) P、Q-38、39 に位置する。

(検出状況) 検出面からの掘り込みが深く、良好に検出された。

(平面形態) 方形

(軸の方向) 主軸 N-0°-E

(規模) (南北) 3.4 × (東西) 3.2m、深さ30cm。

(窯) 住居の南東隅で検出された。窯壁の芯材に礫を用いている。

(遺物出土状況) 遺物は覆土中から検出されたが、窯周辺に集中し、この部分では床面直上のものもあった。

第42号住居跡 (SB-88) (第63図)

(位 置) Q、R-35、36 に位置する。

(検出状況) 検出面からの掘り込みも深く、プランの確認も比較的容易である。

った。

(平面形態) 方形だが、南東隅がやや膨らむ。

(軸の方向) 主軸 N-0°-E

(規模) (南北) 4.0 × (東西) 4.5m、深さ 40cm。

(竈) 磁が僅かに残り、竈壁の下部には礫を固定したためと思われる小穴が確認できた。

(土坑) 竈の西側に、皿状の落ち込みが確認された。

(遺物出土状況) 覆土層の下部から検出された。竈周辺に集中していた。

(位置) W-41、42 グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面での平面プランの確認は難しかった。搅乱を受けており、南壁と東壁、西壁の一部を確認したにとどまる。

(平面形態) 搅乱を受け、全体が明らかではないけれども、方形を呈するものと思われる。

(竈) 東壁の南東隅近くで検出した。得意な形態の竈である。焚口が通常の竈のように、壁に向かっているのではなく、東壁に沿うように設けられている。焚口及び竈の西壁(住居の壁と並行する)には礫が使用されていたが、その他の竈壁は地山を掘り下げて竈壁としている。焚口の幅は約 30cm、奥行き 100cm ほどである。

(遺物出土状況) 竈の内部には大型の土器片が検出された。また、焚口の前方には完形の土器が 2 個体検出された。

第 43 号住居跡 (SB-111) (第 64 図)

(位置) T、U-28、29 グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面にて、落ち込みを確認したが明瞭ではなかったため、トレシチを設定し、その床面を追い、壁の立ち上がりを確認した。

(平面形態) 方形

(軸の方向) 主軸 N-0°-E

(規模) (南北) 4.2 × (東西) 4.7m、深さ 30cm。

(竈) 南東隅で確認したが痕跡を残すのみであった。焼土と礫を固定したと思われる小穴の検出にとどまる。

(土坑) 竈の痕跡の西側に土坑を検出した。また、東壁や床面でも土坑を検出したが、これらは本住居に伴うものではないと考える。

(遺物出土状況) 覆土下層部より出土した。

第 45 号住居跡 (SB-115) (第 65 図)

(位置) V-41 グリッドに位置する。

(検出状況) 竈の痕跡を確認し、周囲を精査したが僅かに壁の立ち上がりを確認したにとどまる。住居の南東隅であろう。検出された床面と思われる部分で焼土を検出した。

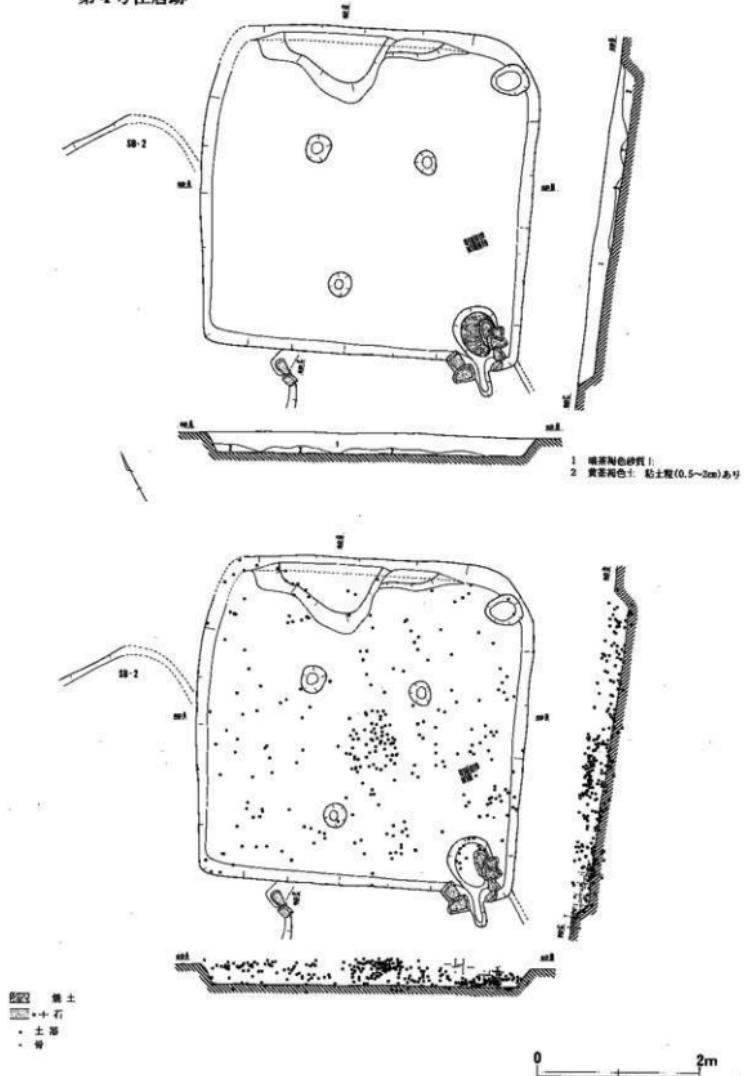
(竈) 竈壁の芯材には礫が用いられていた。

第 46 号住居跡 (SB-117) (第 66 図)

(位置) S、T-30、31 グリッドに位置

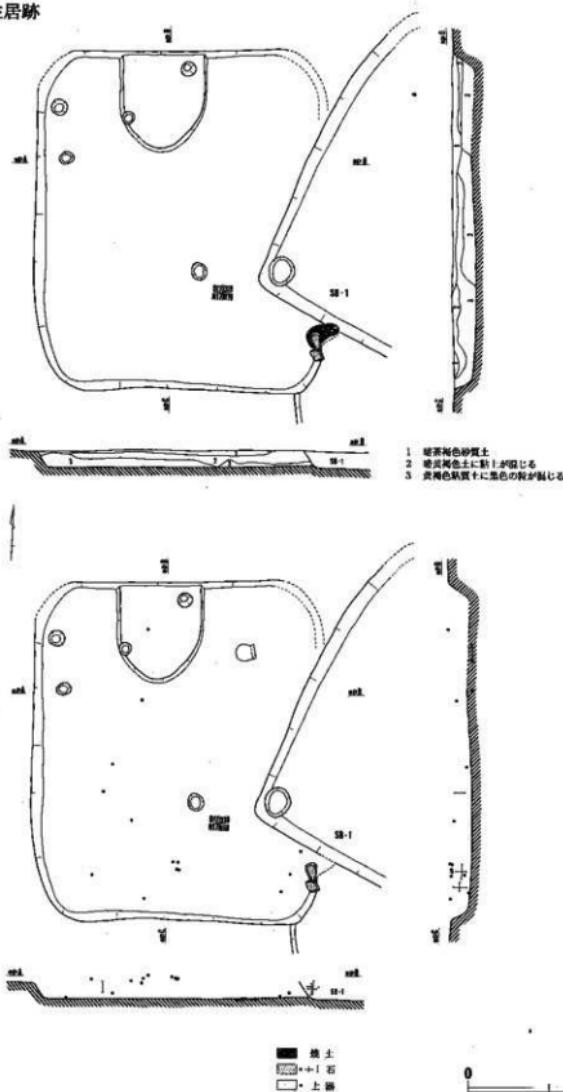
第 44 号住居跡 (SB-114) (第 65 図)

第4号住居跡



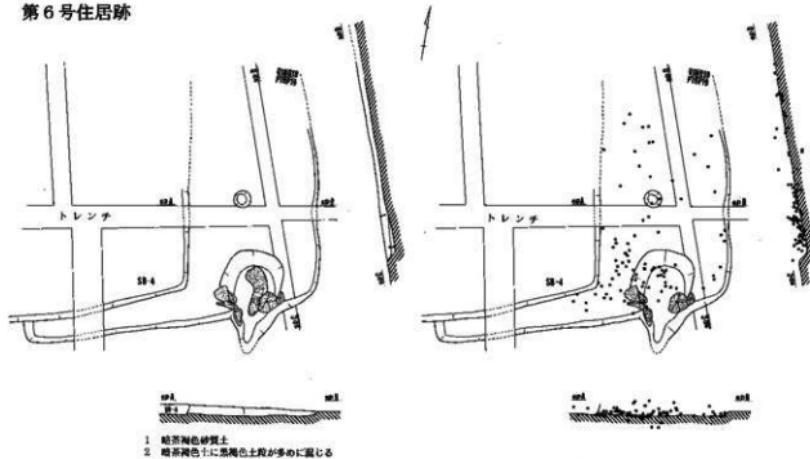
第39図 壇穴式住居跡(3)

第5号住居跡

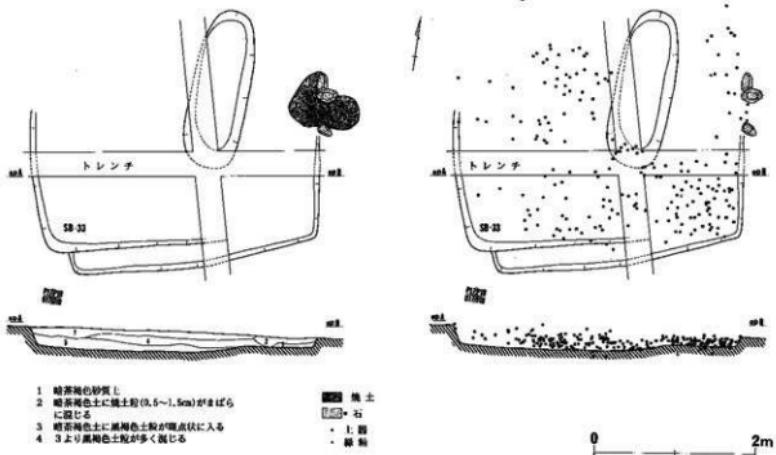


第40図 竪穴式住居跡(4)

第6号住居跡

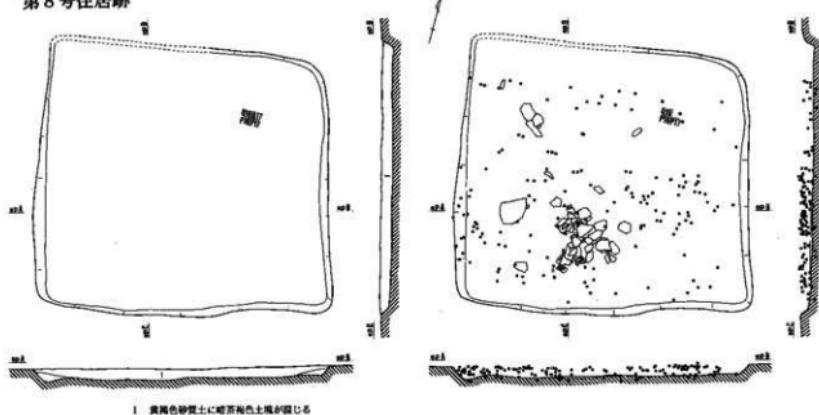


第7号住居跡

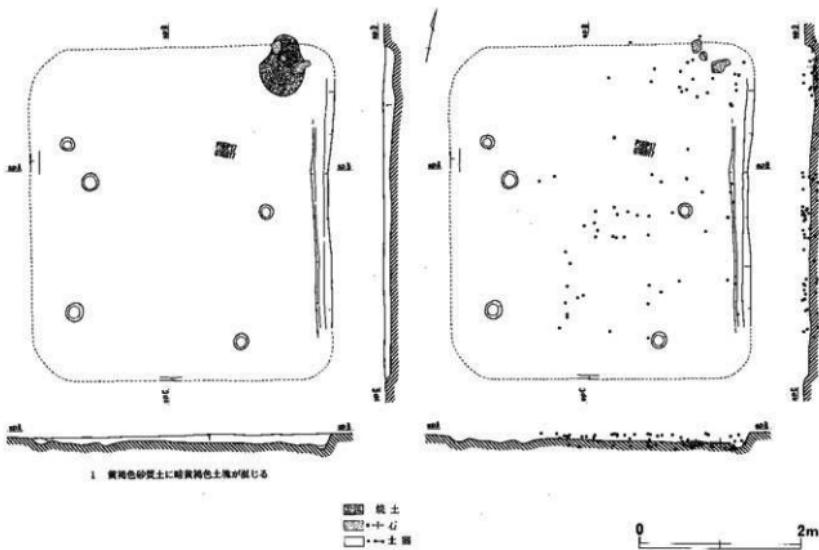


第41図 竪穴式住居跡(5)

第8号住居跡

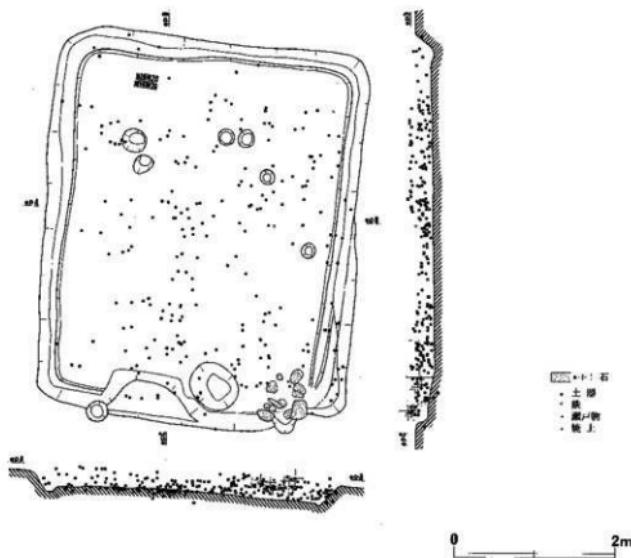
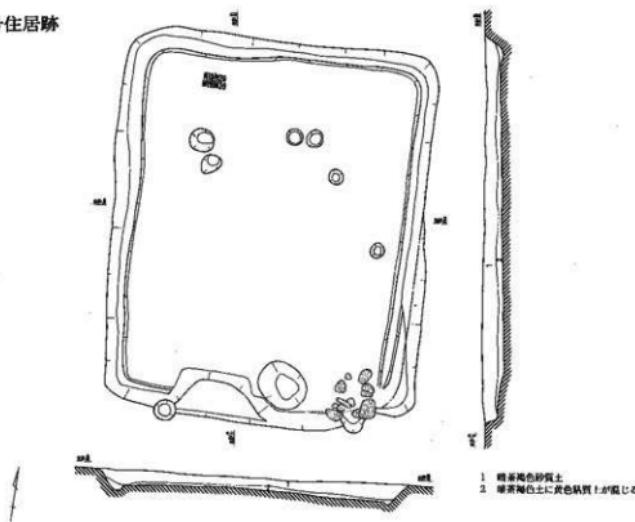


第9号住居跡



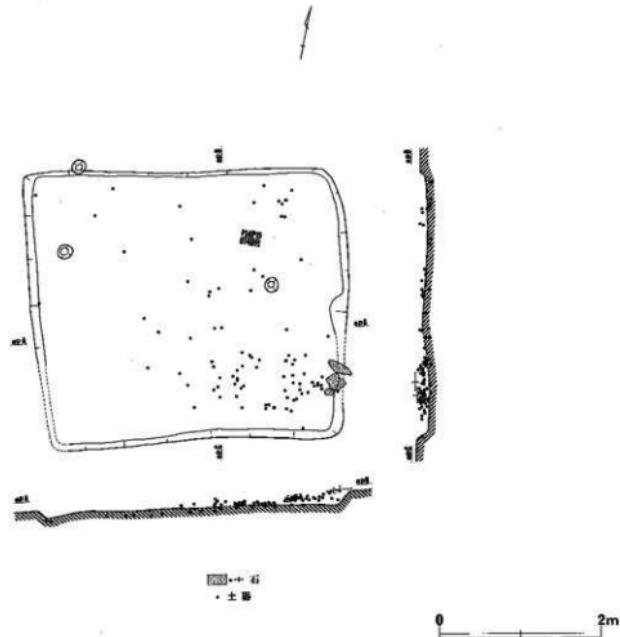
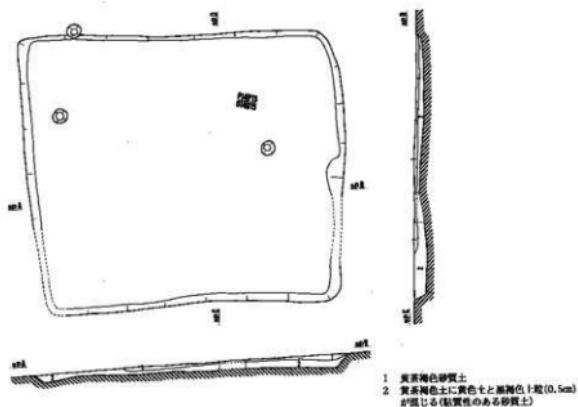
第42図 堪穴式住居跡(6)

第 10 号住居跡



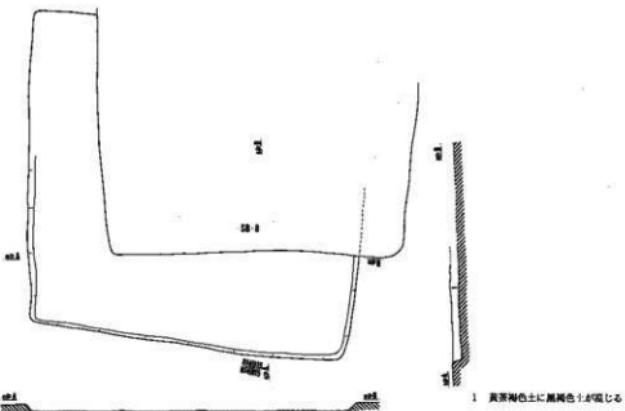
第 43 図 穴式住居跡(7)

第 11 号住居跡

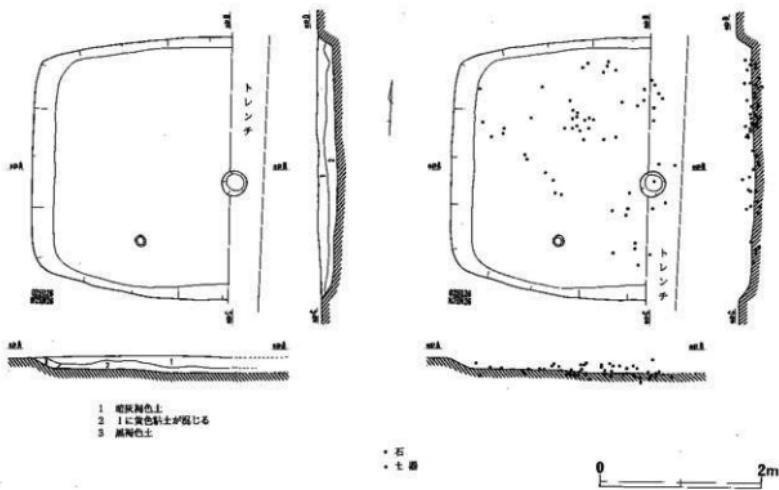


第 44 図 壁穴式住居跡(8)

第12号住居跡

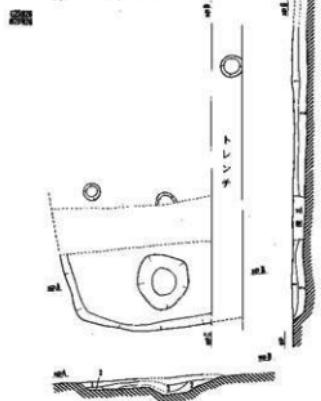


第13号住居跡



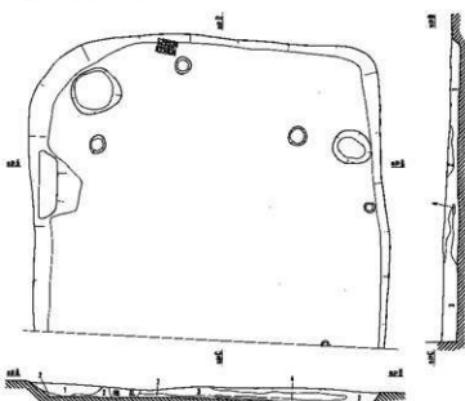
第45図 積穴式住居跡(9)

第14号住居跡

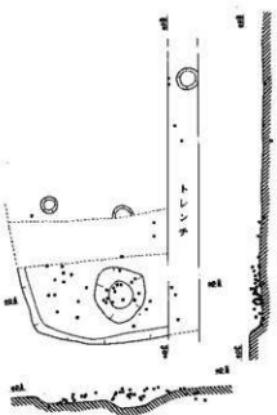


- 1 灰灰褐色土
- 2 1に黄色粘土が混じる
- 3 2に炭化物と粘土の小粒子が混じる

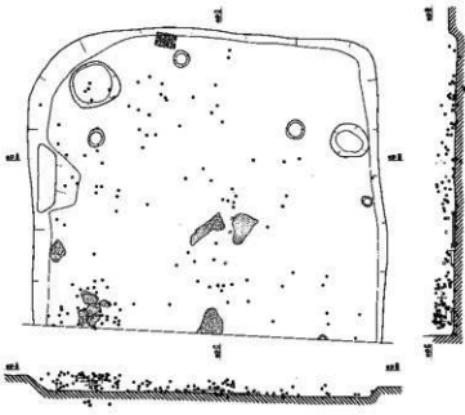
第15号住居跡



- 1 灰灰褐色土
- 2 黄褐色砂質土
- 3 2に灰が混じる
- 4 黄色粘土



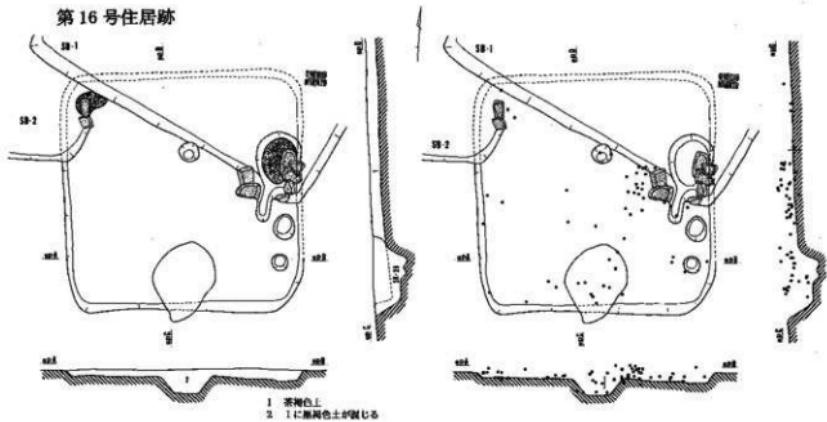
- ―― 炭化物
- ―― 小石
- ―― 土器
- ◆―― 骨玉



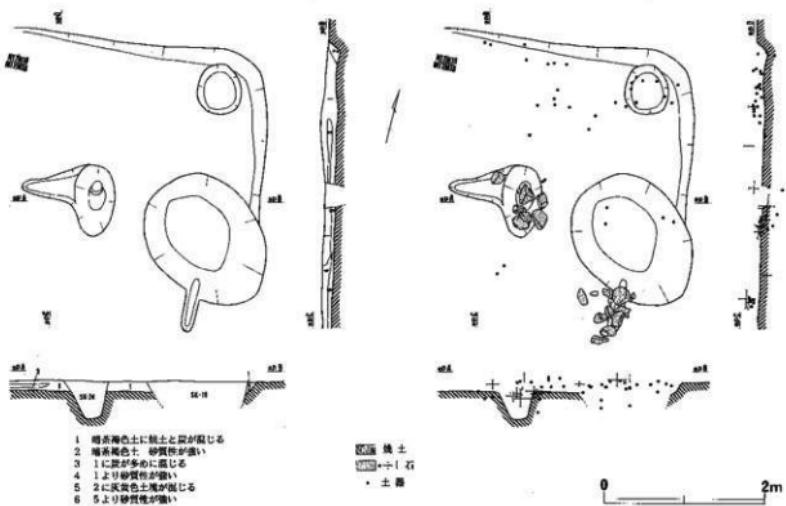
0 2m

第46図 壕穴式住居跡(10)

第 16 号住居跡

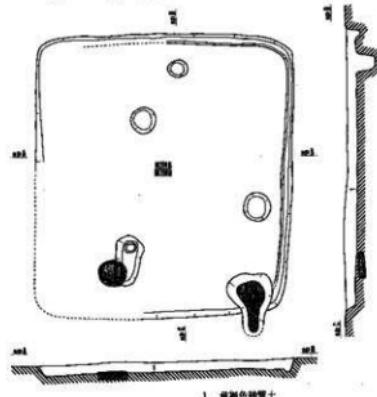


第 17 号住居跡

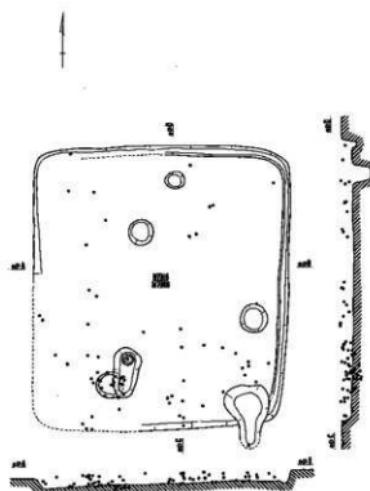
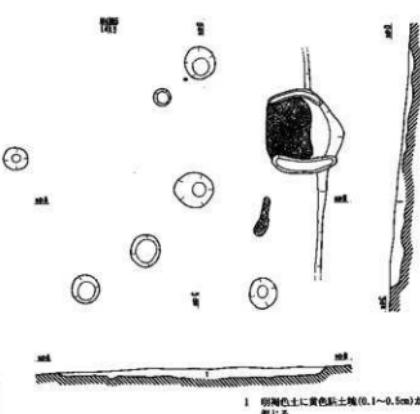


第 47 図 積穴式住居跡(11)

第 18 号住居跡



第 19 号住居跡

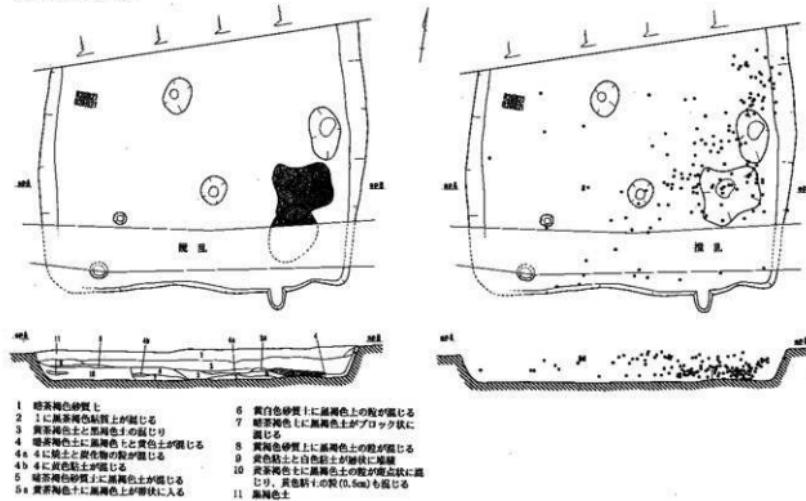


■ 土
● 石
▲ 上部

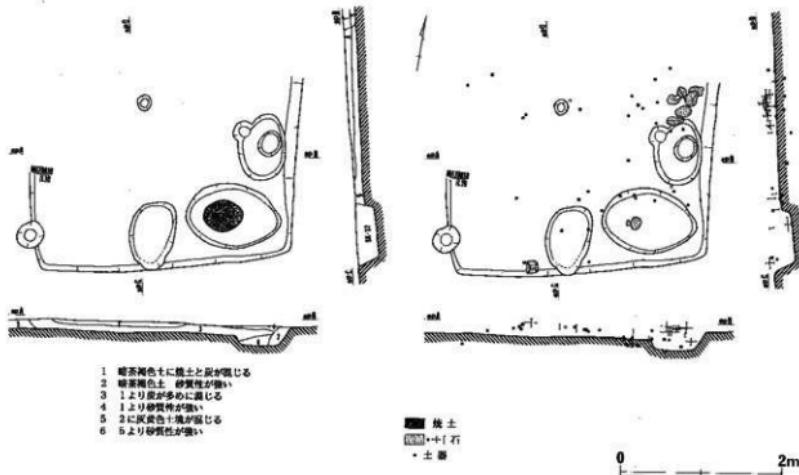
0 2m

第 48 図 竪穴式住居跡(12)

第 20 号住居跡

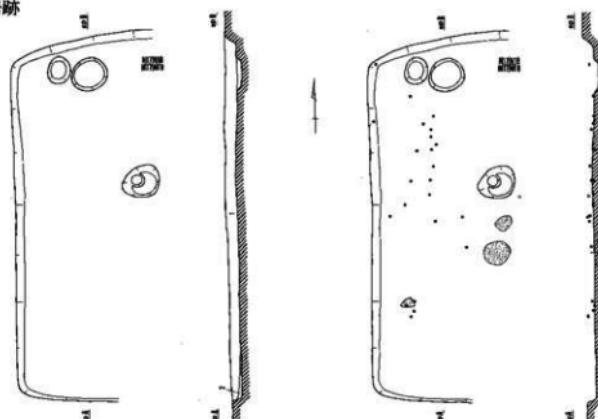


第 21 号住居跡



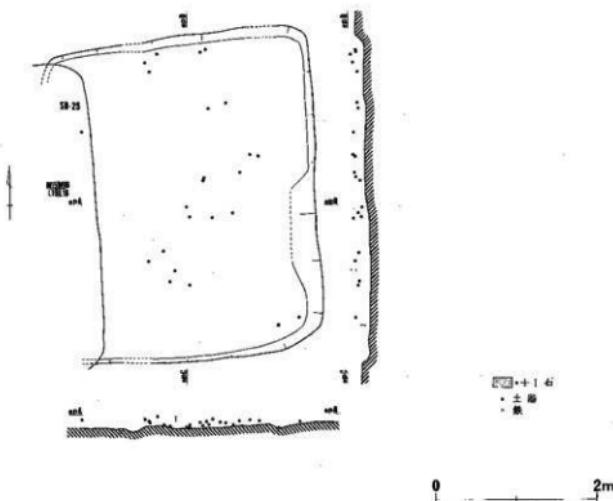
第 49 図 竪穴式住居跡(13)

第 22 号住居跡



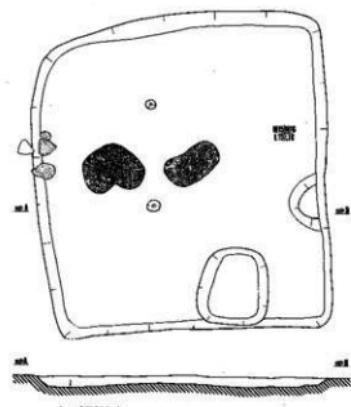
1. 茶褐色土 粒子が小さく粘質性あり
2. 田沢茶褐色土 粘質性あり

第 23 号住居跡

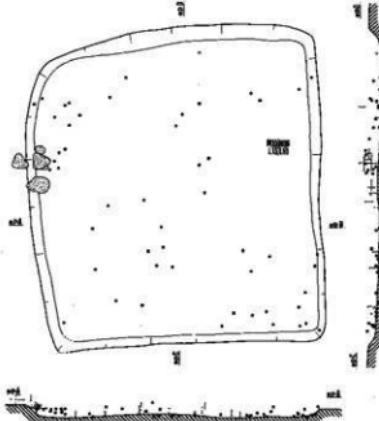


第 50 図 積穴式住居跡(14)

第 24 号住居跡

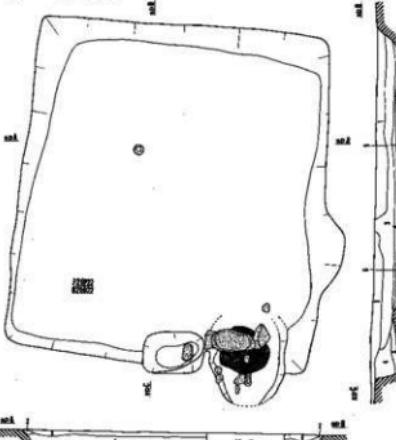


■ 黒茶褐色土



■ 暗褐色土
■ 黑褐色土
■ 黄褐色土
□ 砂
— 土壁
● 石

第 25 号住居跡



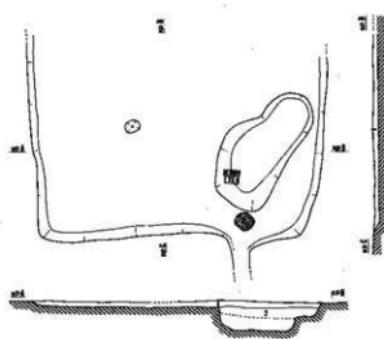
- 1 黄褐色土に黄色粘土の粒(0.5cm)が混じる
- 2 黄褐色土
- 3 黄色砂質土と黄褐色土の混じり
- 4 黄褐色土に白色粘土質土が混じる
- 5 黄褐色土と黑褐色土上の混じりて粘土と混じる(0.5cm)が混じる
- 6 黑褐色土に粘土と粒(0.5cm)、反が石に混じる
- 7 黄褐色土に黑褐色土が斑点状に現じる



2m

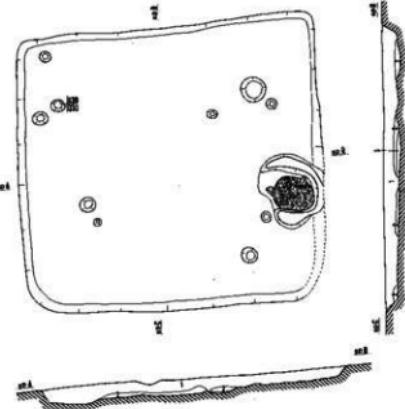
第 51 図 竪穴式住居跡(15)

第 26 号住居跡

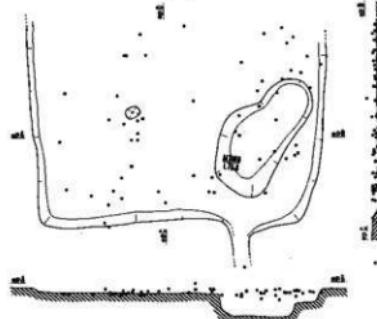


- 1 緑茶褐色土に燒土と炭の粒が混じる
- 2 緑茶褐色土に黒褐色土が混じり、
1より多めの燒土と炭の粒が混じる

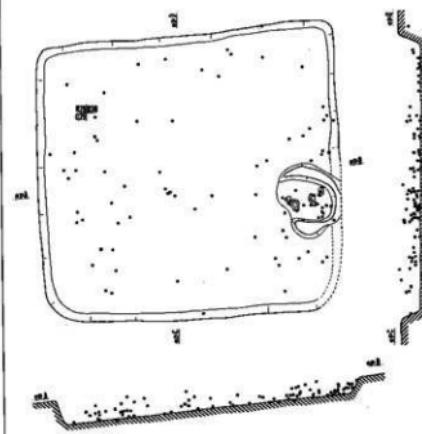
第 27 号住居跡



- 1 黄茶褐色土・砂質性が強い
- 2 1に黄茶褐色土が混じる
- 3 黄茶褐色土に黒褐色土の粒が混じる



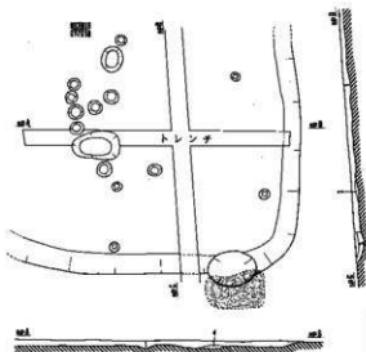
■ 燃土
■ 石
● 上層



0 2m

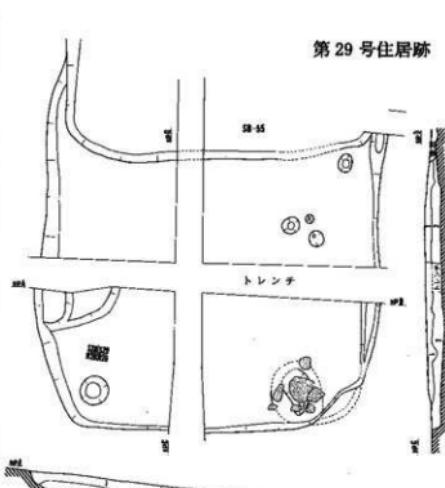
第 52 図 竪穴式住居跡(16)

第 28 号住居跡

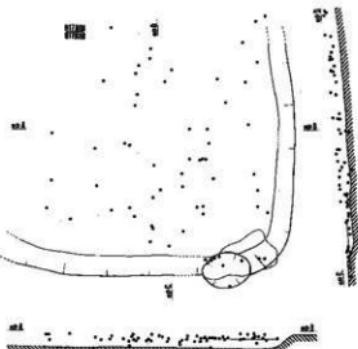


- 1 黄褐色土
- 2 1に炭化(3.2~1m)が混じる
- 3 1に炭土段(0.2~cm)がまばらに入る
- 4 鮎青褐色土

第 29 号住居跡



- 1 鮎青褐色砂質土
- 2 元青褐色砂質土と赤褐色土の混じり
黒褐色土の斑点状に混じる

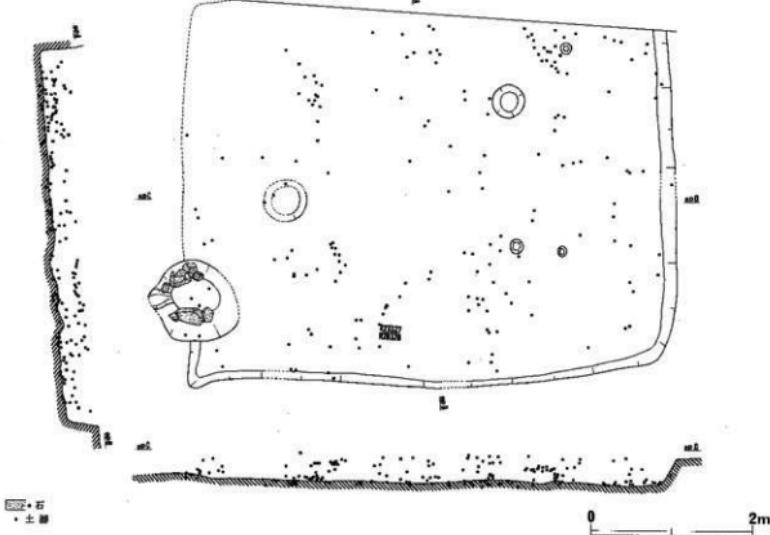
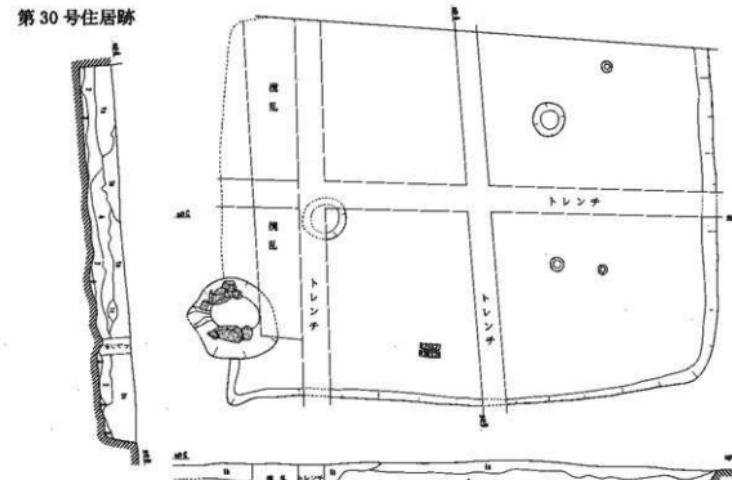


■ 土上
■ 石
□ → 土面

0 2m

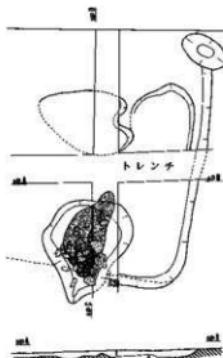
第 53 図 壁穴式住居跡(17)

第30号住居跡



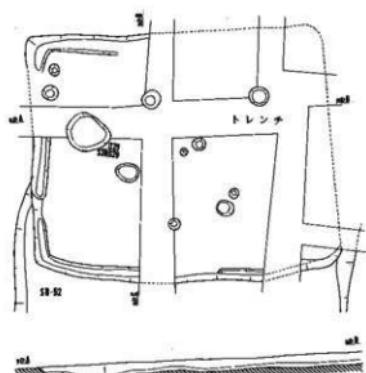
第54図 窓穴式住居跡(18)

第31号住居跡

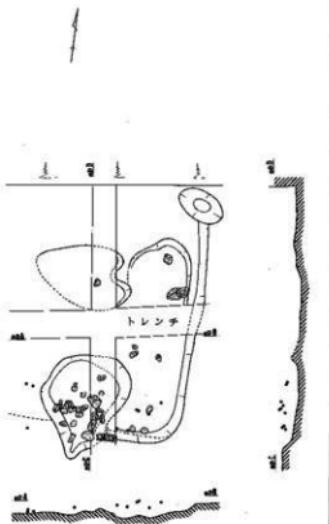


- 1 基本褐色砂質土
- 2 黒褐色砂質土と基褐色土の
混じりに灰と燒土の殻が混じる

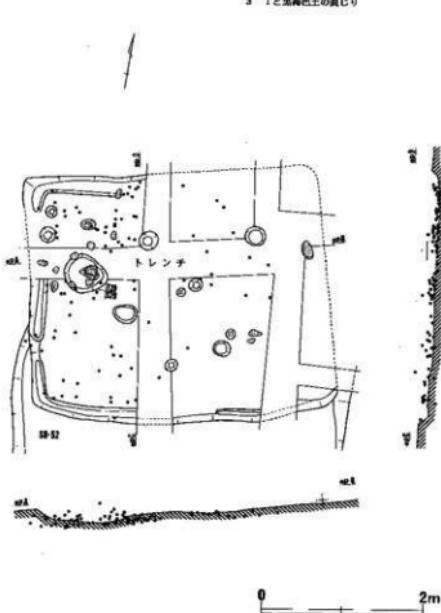
第32号住居跡



- 1 基本褐色砂質土
- 2 黒褐色砂質土と基褐色土の
混じりに灰と燒土の殻が混じる
- 3 1と黒褐色土の混じり

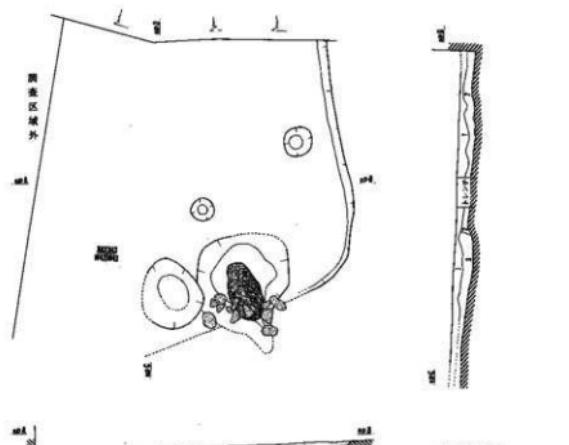


- 烧土
- +■+石
- 土器

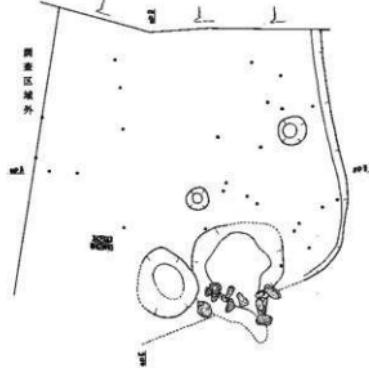


第55図 橫穴式住居跡(19)

第33号住居跡



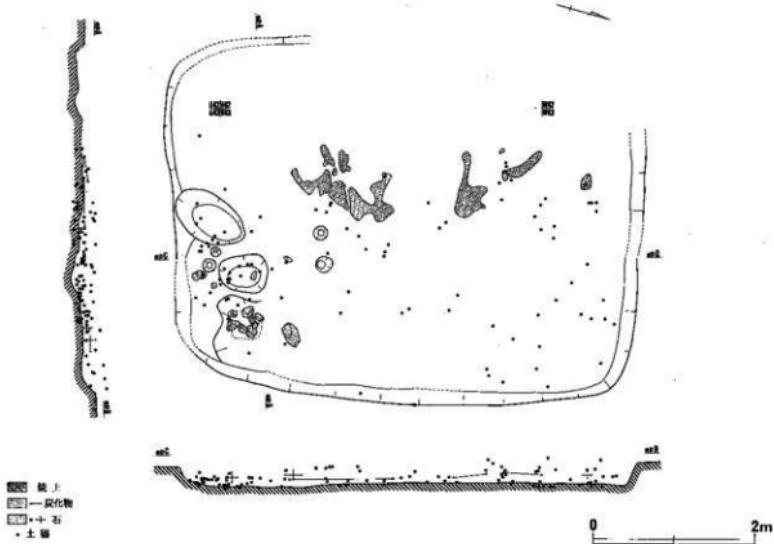
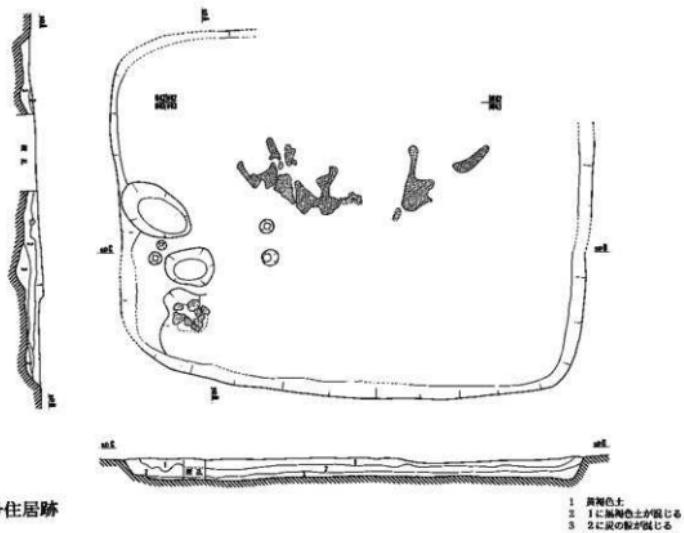
1. 緑茶褐色土
2. 1よりやや色が濃い
3. 2に炭化物と焦土が混じる



■ 焦土
● 石
● 土層

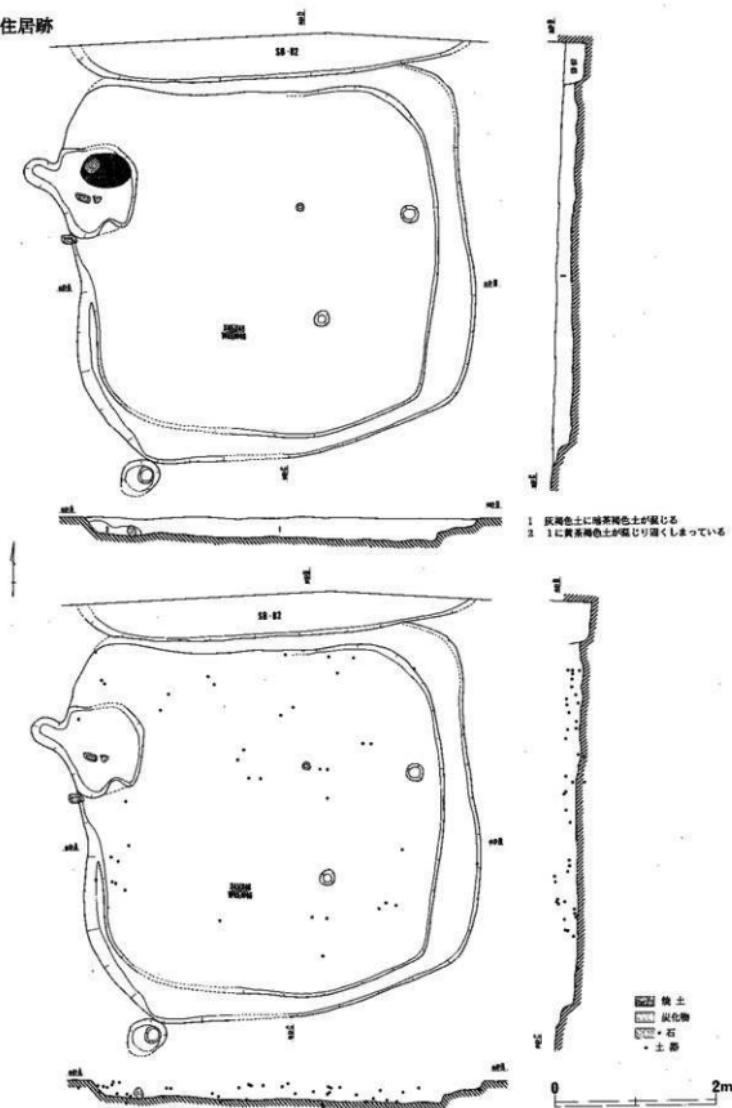
0 2m

第56号 壺穴式住居跡(20)



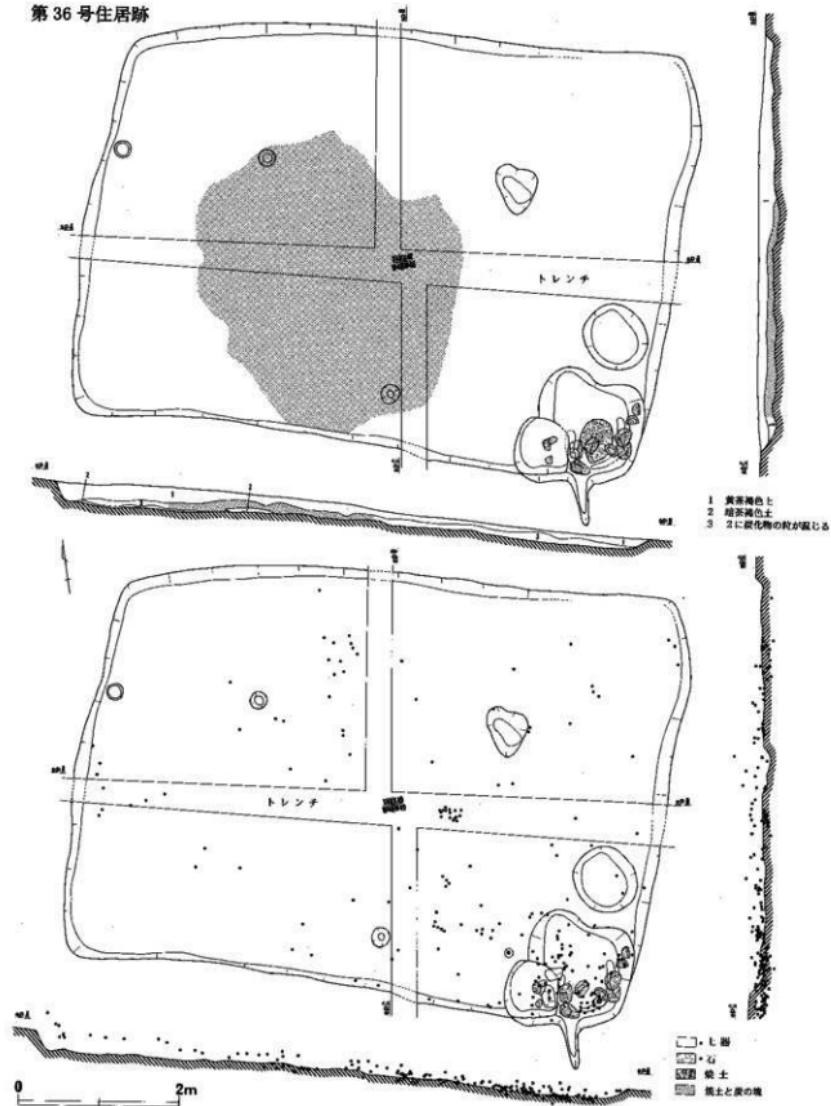
第57図 墅穴式住居跡(21)

第35号住居跡

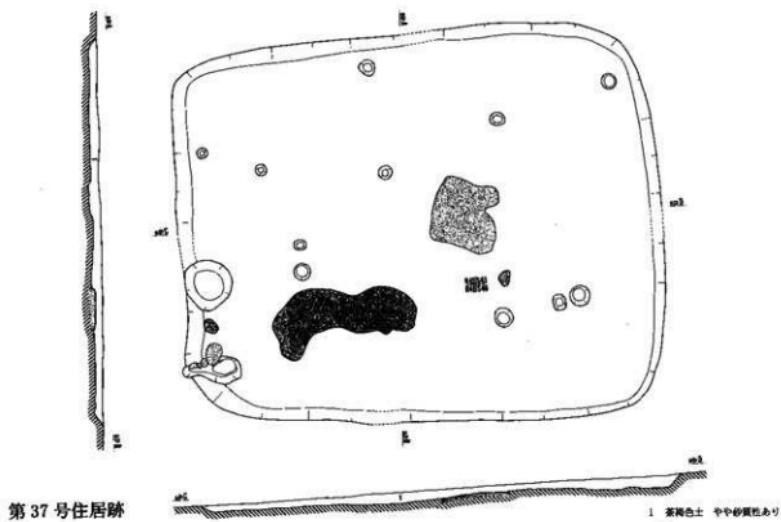


第58図 墓穴式住居跡(22)

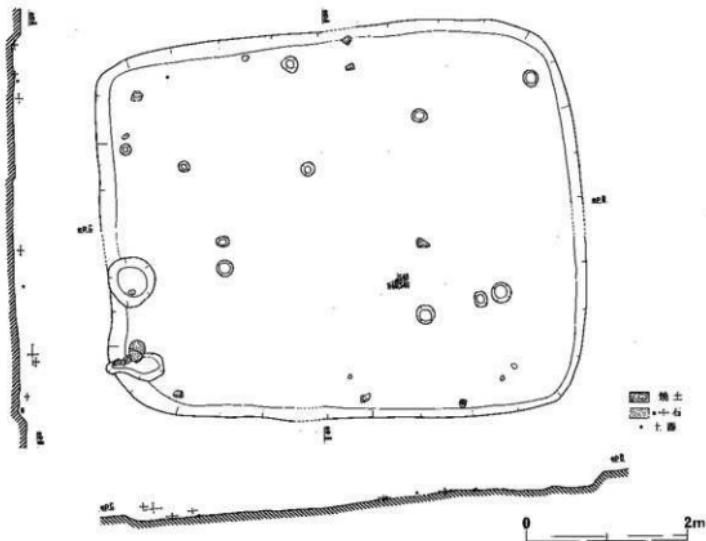
第36号住居跡



第59図 積穴式住居跡(23)

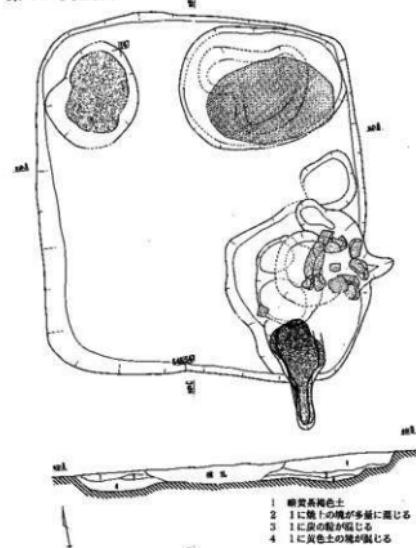


第37号住居跡

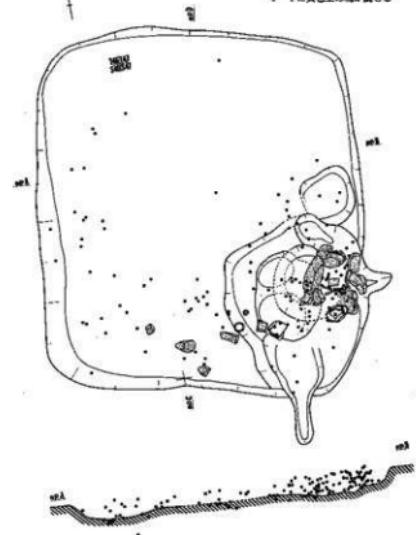
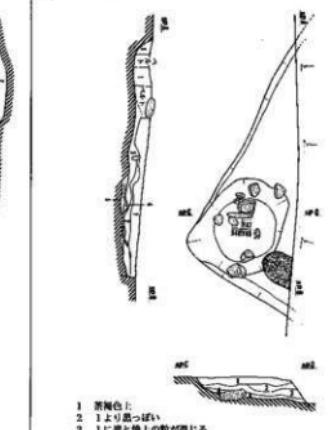


第60図 積穴式住居跡(24)

第38号住居跡



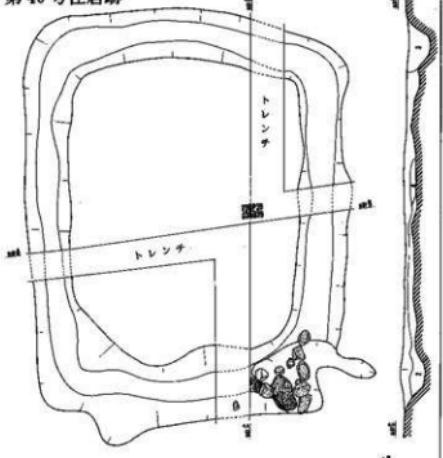
第39号住居跡



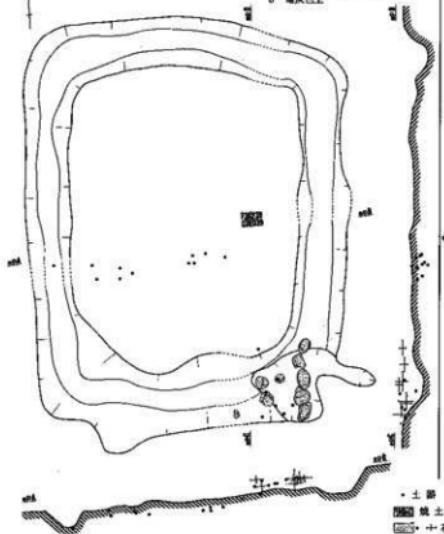
0 2m

第61図 積穴式住居跡(25)

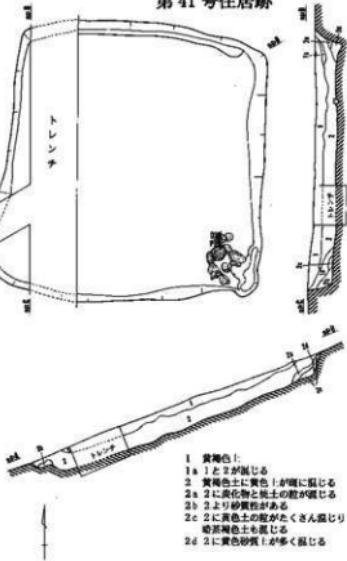
第 40 号住居跡



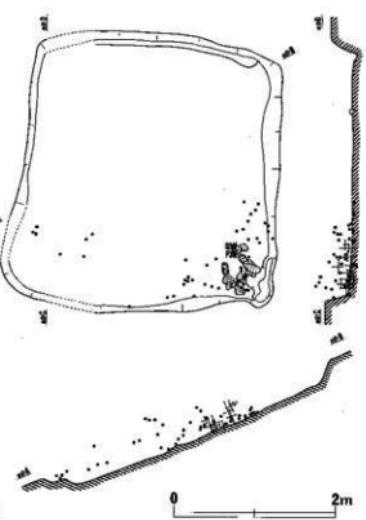
- 1 黄褐色土：砂質性が強い
- 2 1よりやや暗く砂質性が強い
- 3 黄褐色土
- 4 1に黄色土が多く混じる
- 5 鹿灰色土



第 41 号住居跡

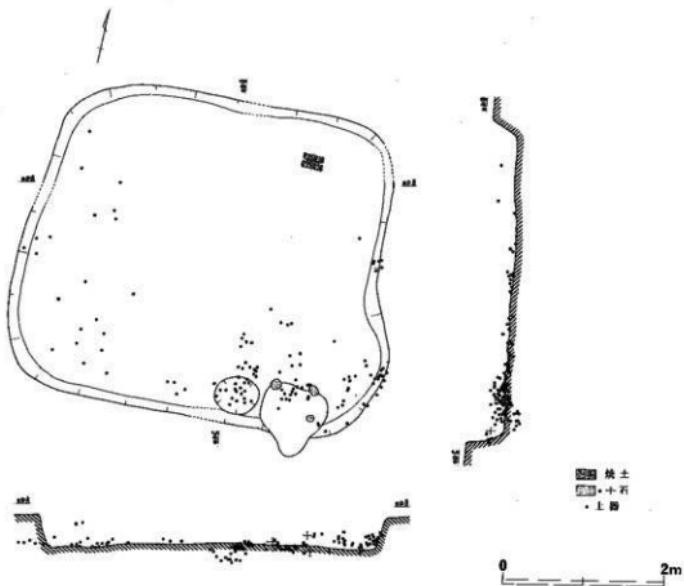
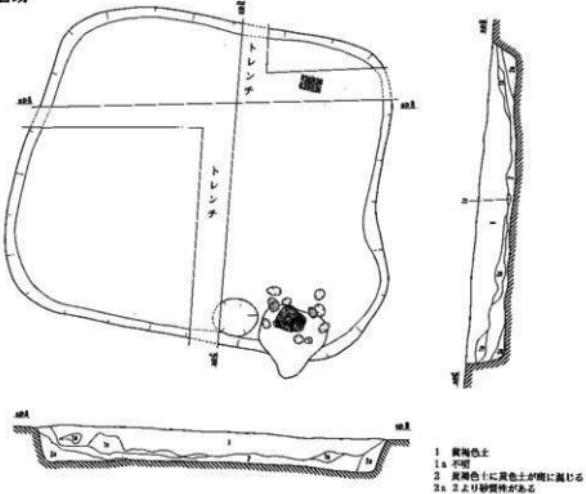


- 1 黄褐色土：
- 1a 1と2が混じる
- 2 黄褐色土に黄色土が間に混じる
- 2a 2に炭化物と灰土の粒が混じる
- 2b 2より砂質物がある
- 2c 2は黄色土の粒がたくさん混じり
鹿灰色土も混じる
- 2d 3に黄色の質土が多く混じる



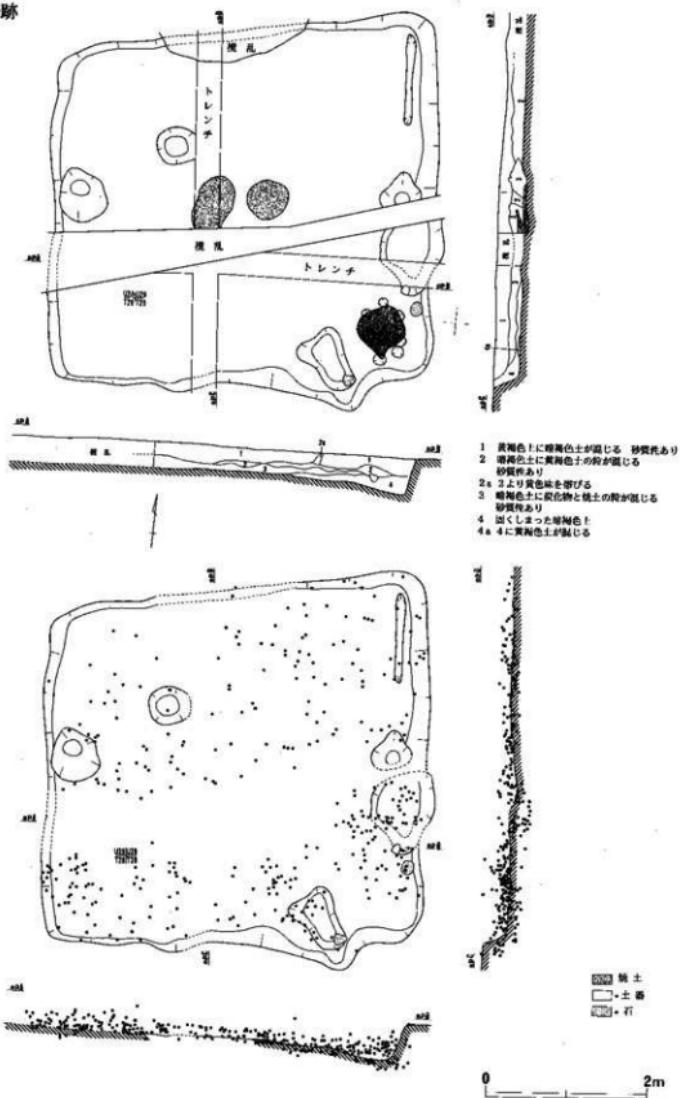
第 62 図 竪穴式住居跡(26)

第 42 号住居跡



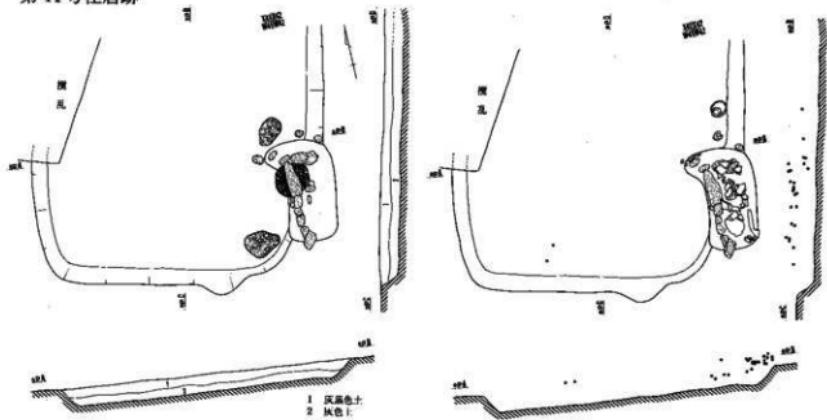
第 63 図 竪穴式住居跡(27)

第 43 号住居跡

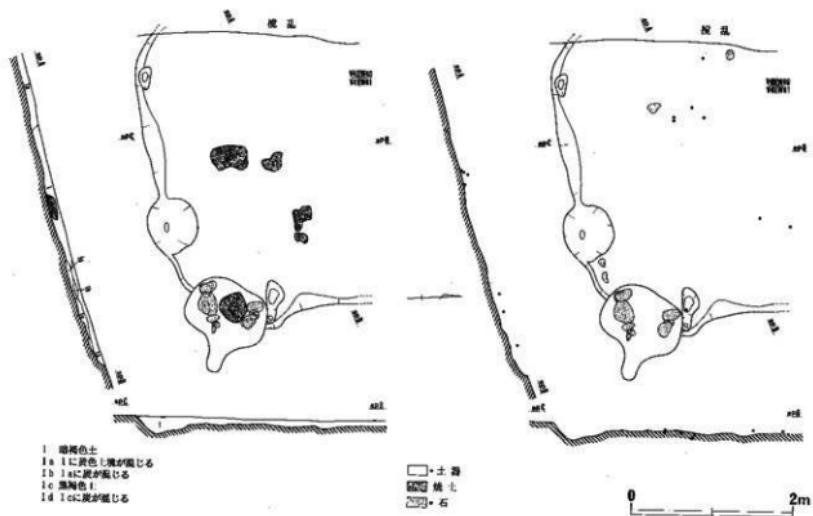


第 64 図 竪穴式住居跡(28)

第44号住居跡

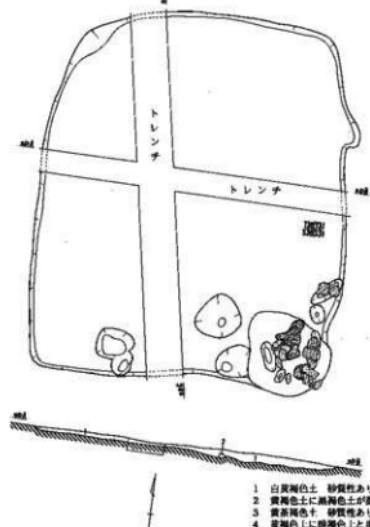


第45号住居跡

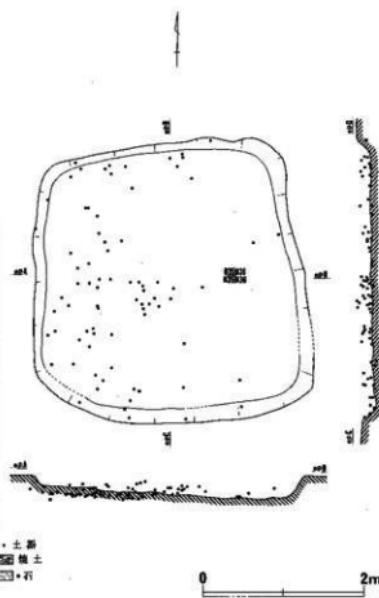
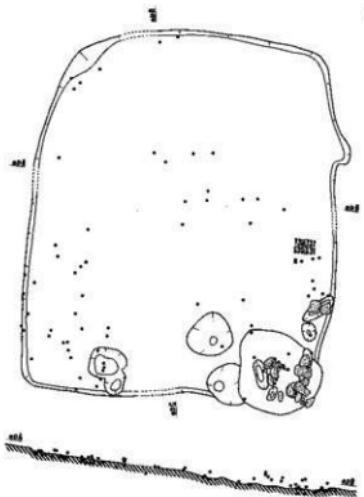
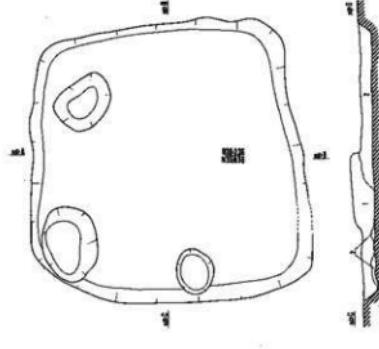


第65図 積穴式住居跡(29)

第 46 号住居跡



第 47 号住居跡



第 66 図 壁穴式住居跡(30)

する。

(検出状況) 瓦の痕跡を最初に検出し、周辺を精査したが平面プランが明瞭でないため、トレンチを設定し、床面を追った。床面の範囲を確認するにとどまる。

(平面形態) 長方形を呈する。

(軸の方向) 主軸 N-0°-E

(規模) (南北) 4.5 × (東西) 2.8m、深さ 5 cm。

(瓦) 住居址の南東隅に検出した。礫を芯材として用いる。

(柱穴) 柱穴状の落ち込みが何箇所か検出されているが、本住居に伴うものではないであろう。

(遺物出土状況) 僅かに残った覆土中より検出した。

第 47 号住居跡 (SB-118) (第 66 図)

(位置) N、O-35、36 グリッドに位置する。

(検出状況) 検出面よりの掘り込みは深く、比較的容易に平面プランも検出された。一応、住居址として報告する。が、瓦は確認されず、床面に土坑状の落ち込みが不自然に配置される。住居址ではない可能性も考えられる。

(平面の形) 方形

(軸の方向) 主軸 N-0°-E

(規模) (南北) 3.5 × (東西) 3.4m、深さ 30cm。

(遺物出土状況) 覆土中より検出された。

3 掘立柱建物跡

平安時代以降の掘立柱建物跡は I 区で 4 株、II 区

で 2 株、III 区で 3 株検出された。とくに配列に規則性は認められない。I 区で第 11、12 号掘立柱建物跡が 2 株並列しており、これを 1 株と考えれば他と比して約 3 倍の大きさである。また III 区で第 13 号掘立柱建物跡は 8 本の主柱の周囲に補助柱が存在する形態であると思われ、他と比して約 4 倍の大きさである。

第 8 号掘立柱建物跡 (SH-11) (第 67 図)

(位置) G-9、10 グリッドに位置する。

(軸の方向) 主軸 N-0°-E

(規模) 長軸 2.8 × 短軸 2.4m 面積 6.7 m²

(柱穴) 6 本柱

第 9 号掘立柱建物跡 (SH-12) (第 67 図)

(位置) F、G-9 グリッドに位置する。

(軸の方向) 主軸 N-0°-E

(規模) 長軸 3.5 × 短軸 1.5m 面積 5.3 m²

(柱穴) 6 本柱

第 10 号掘立柱建物跡 (SH-15) (第 67 図)

(位置) P-29、30 グリッドに位置する。

(軸の方向) 主軸 N-87°-E

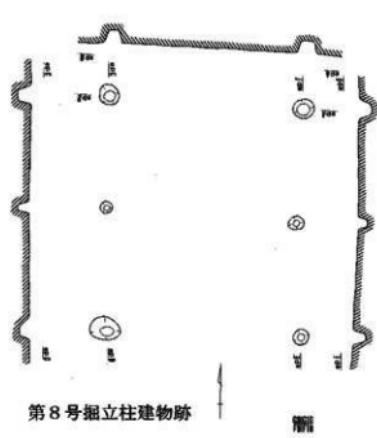
(規模) 長軸 3.6 × 短軸 1.9m 面積 6.8 m²

(柱穴) 6 本柱

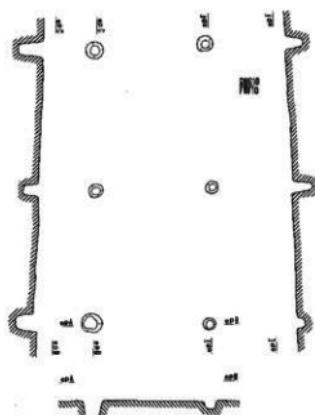
第 11 号掘立柱建物跡 (SH-13A) (第 68 図)

(位置) Q、R-26、27 グリッドに位置する。

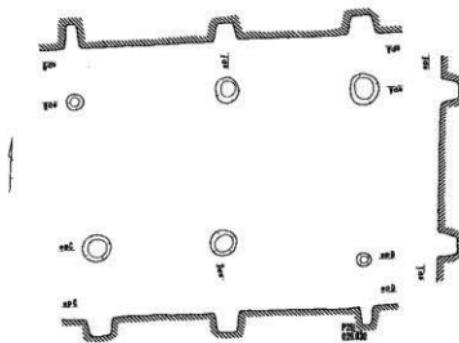
(検出状況) 第 12 号掘立柱建物跡と横に並列しており、合わせて 1 株と考えるかは微妙であるが、個別の掘立柱建物跡と考える。



第8号掘立柱建物跡



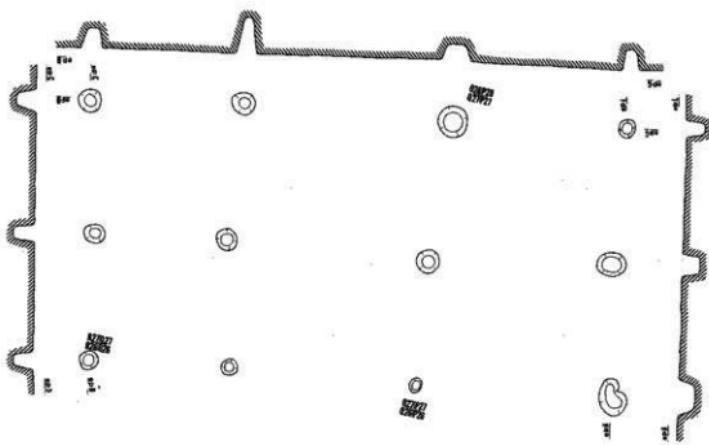
第9号掘立柱建物跡



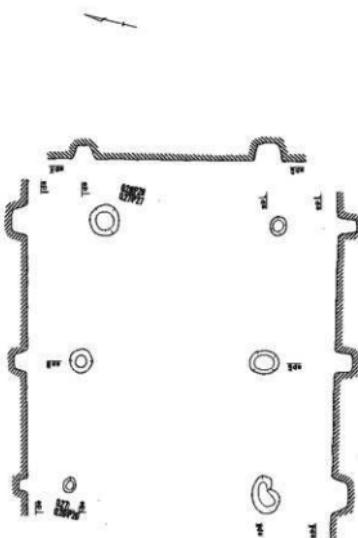
第10号掘立柱建物跡

0 2m

第67図 掘立柱建物跡(4)



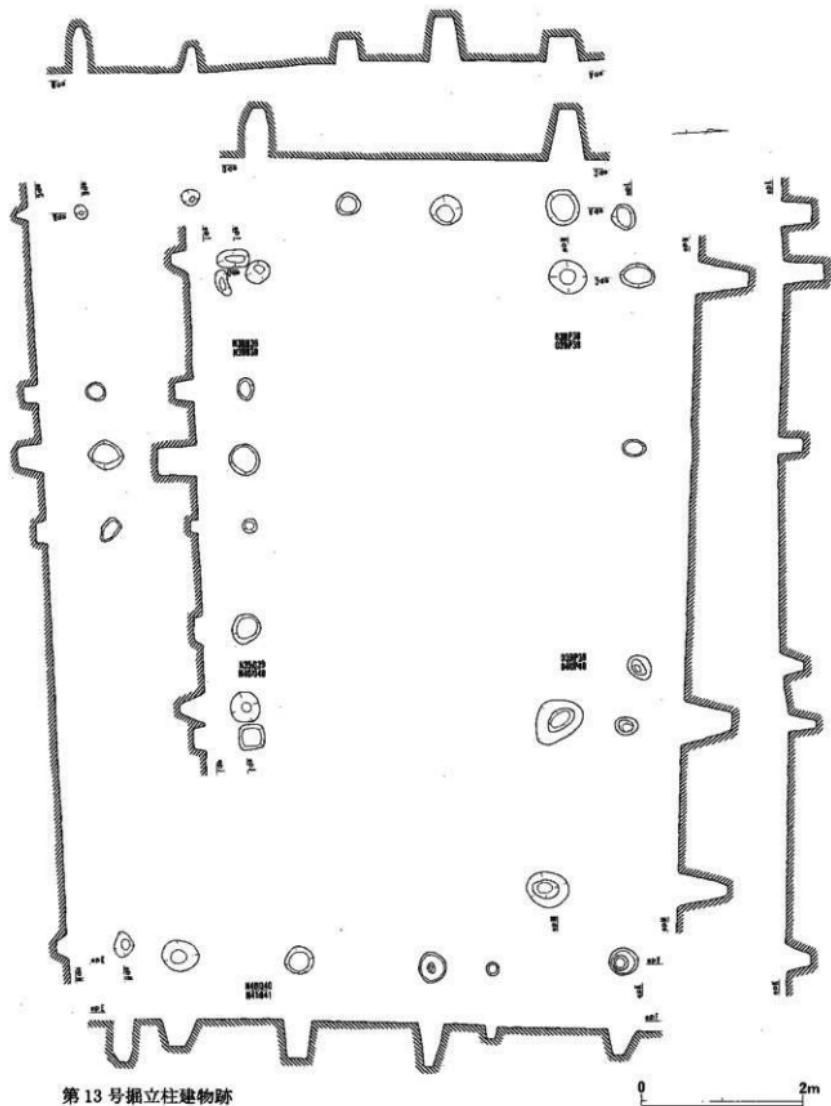
第 11 号掘立柱建物跡



第 12 号掘立柱建物跡

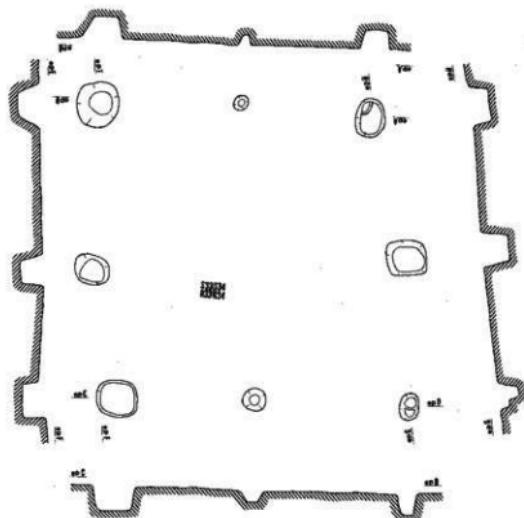
0 2m

第 68 図 掘立柱建物跡(5)

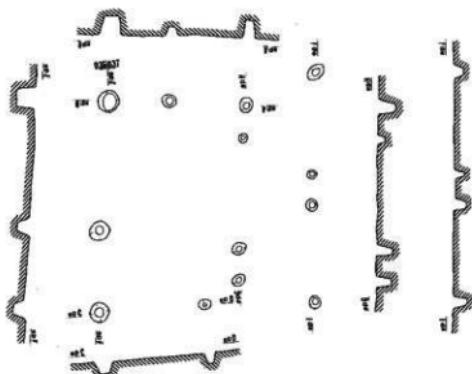


第13号据立柱建物跡

第69図 据立柱建物跡(6)



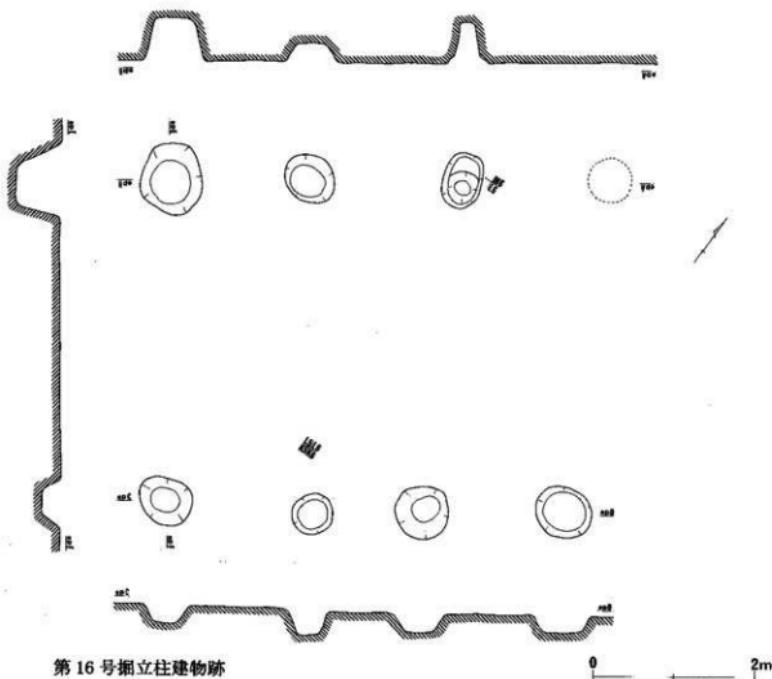
第14号掘立柱建物跡



第15号掘立柱建物跡

0 2m

第70図 掘立柱建物跡(7)



第 16 号掘立柱建物跡

第 71 図 掘立柱建物跡(8)

(軸の方向) 主軸 N-14°-W

(規模) 長軸 3.3 × 短軸 1.9m 面積
6.8 m²

(柱穴) 6 本柱

第 12 号掘立柱建物跡 (SH-13B) (第 68 図)

(位置) P、Q-27、28 グリッドに位置
する。

(軸の方向) 主軸 N-14°-W

(規模) 長軸 3.4 × 短軸 2.3m 面積
7.8 m²

(柱穴) 6 本柱

第 13 号掘立柱建物跡 (SH-23) (第 69 図)

(位置) N-P-38~40 グリッドに位置
する。

(検出状況) 8 本の主柱の周囲に補助柱が存
在する形態であると思われる。第
11、12 号掘立柱建物跡と同様に横
に並列していると考えるか、ある
いは 2 棟が重複していると考え
るかは微妙であるが、1 棟の掘立
柱建物跡と考える。

(軸の方向) 主軸 N-86°-W

(規模) 長軸 7.8 × 短軸 4.0m 面積
31.2 m²

(柱 穴) 8本柱

第14号掘立柱建物跡 (SH-25) (第70図)

(位 置) R、S-33、34 グリッドに位置する。

(軸 の 方 向) 主軸 N-9°-W

(規 模) 長軸 3.7 × 短軸 3.7m 面積
18.7 m²

(柱 穴) 6本柱

第15号掘立柱建物跡 (SH-31) (第70図)

(位 置) N-36、37 グリッドに位置する。

(軸 の 方 向) 主軸 N-10°-E

(規 模) 長軸 2.6 × 短軸 1.7m 面積
4.4 m²

(柱 穴) 6本柱

第16号掘立柱建物跡 (SH-32) (第71図)

(位 置) K~M-5、6 グリッドに位置する。

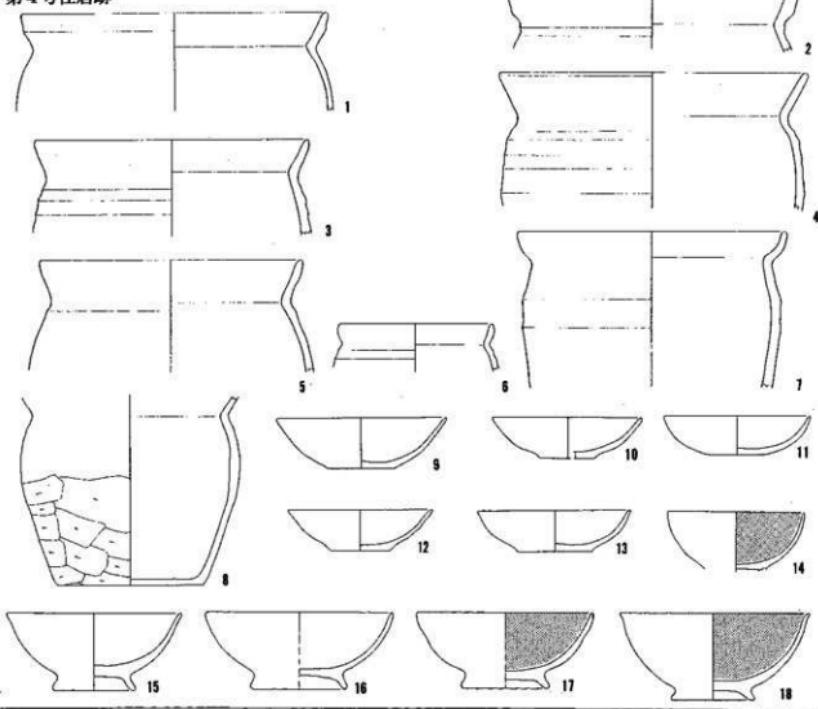
(軸 の 方 向) 主軸 N-55°-E

(規 模) 長軸 5.0 × 短軸 4.0m 面積
20.0 m²

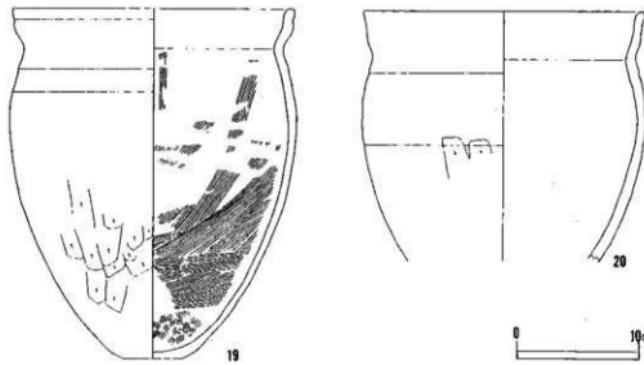
(柱 穴) 8本柱

第5節 平安時代以降の土器

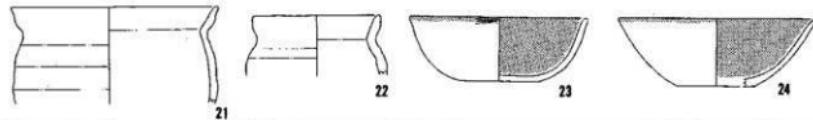
第4号住居跡



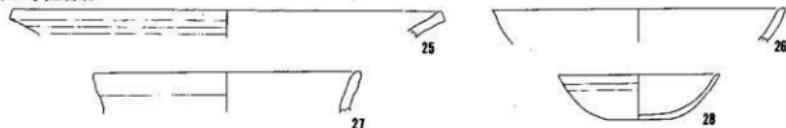
第5号住居跡



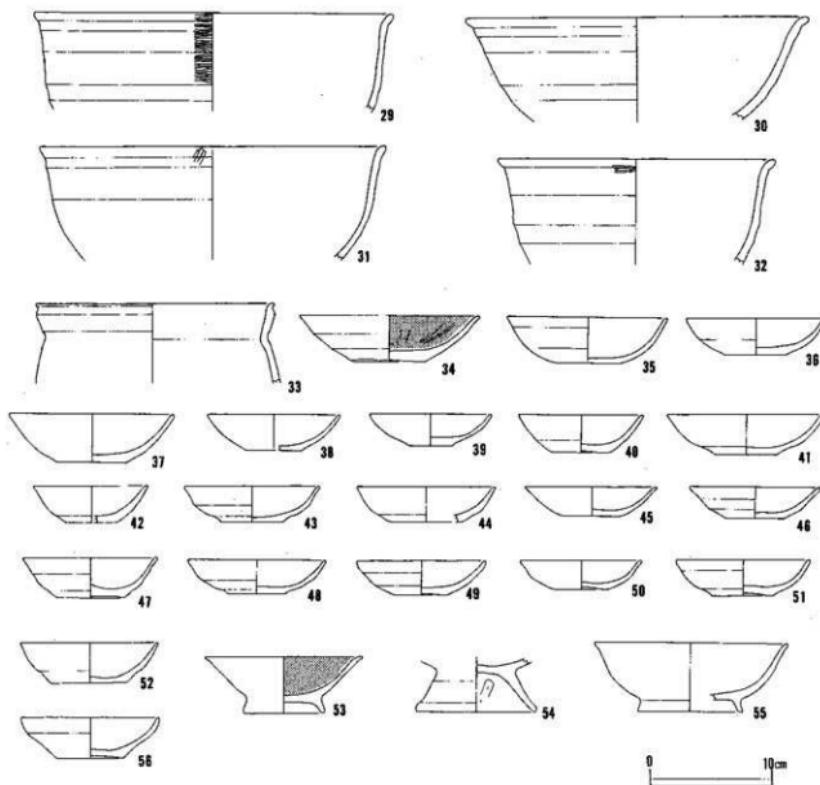
第72図 平安住居跡出土の土器(1)



第6号住居跡

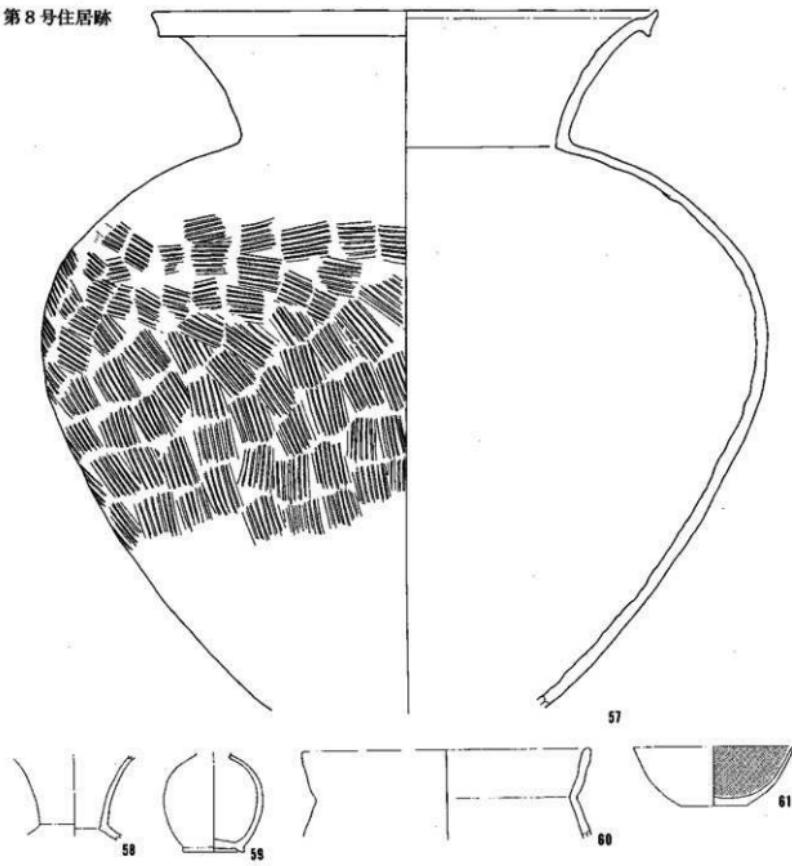


第7号住居跡

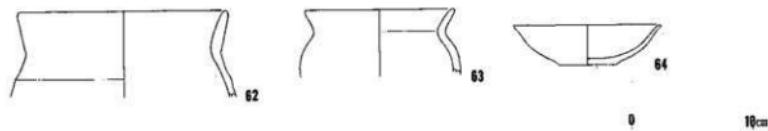


第73図 平安住居跡出土の土器(2)

第8号住居跡

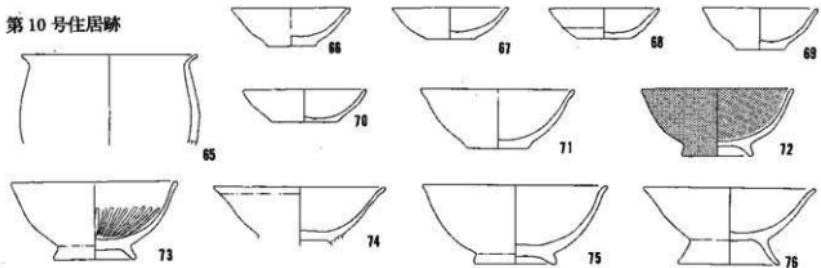


第9号住居跡

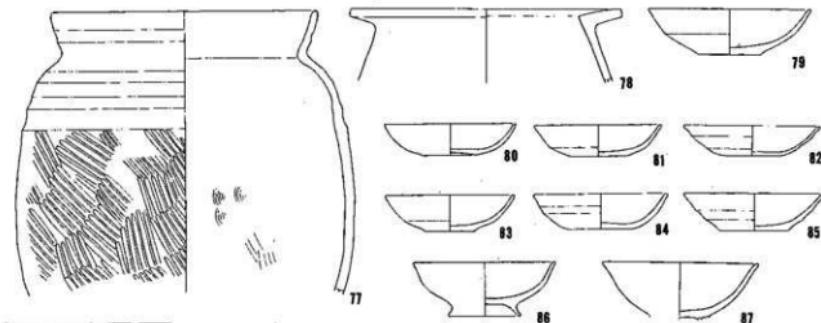


第74図 平安住居跡出土の土器(3)

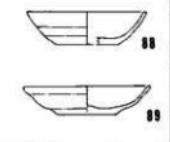
第10号住居跡



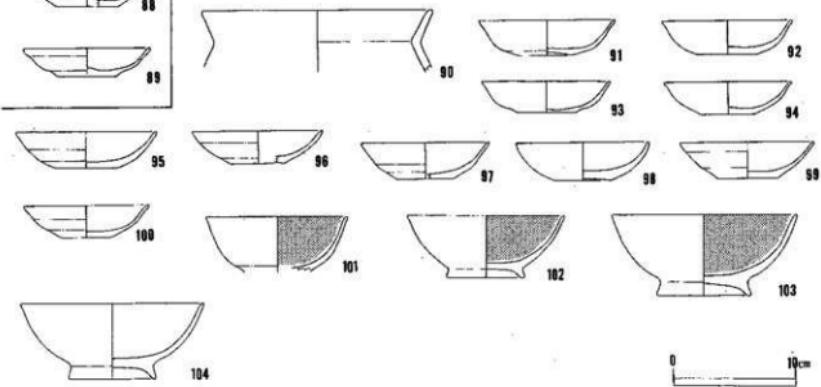
第11号住居跡



第13号住居跡



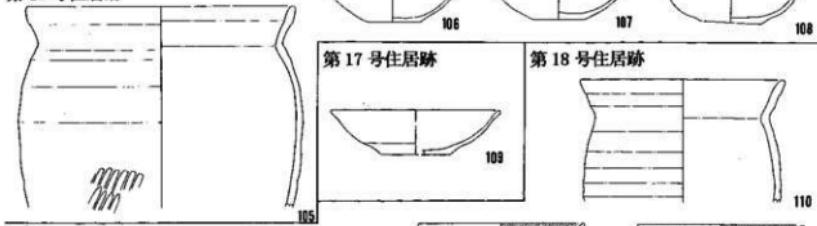
第15号住居跡



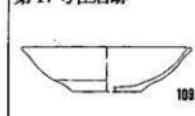
0 10cm

第75図 平安住居跡出土の土器(4)

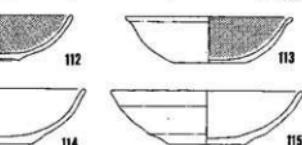
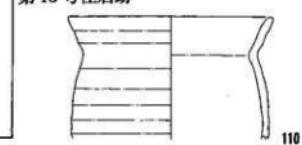
第16号住居跡



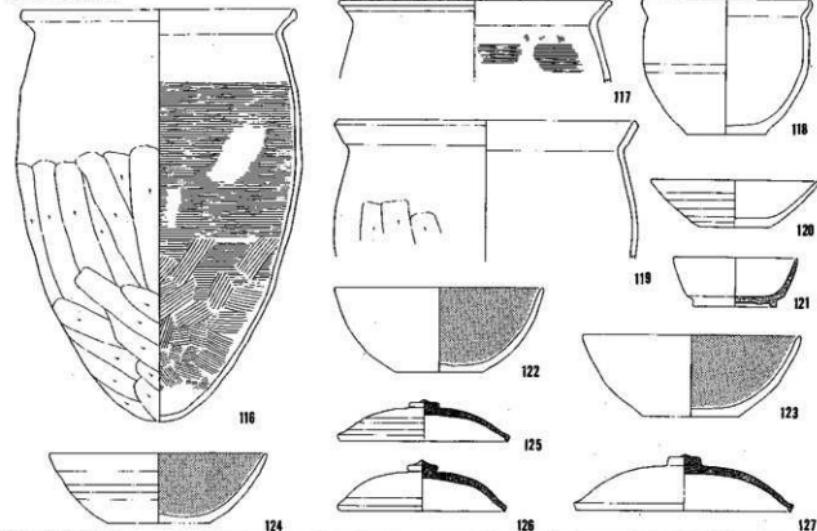
第17号住居跡



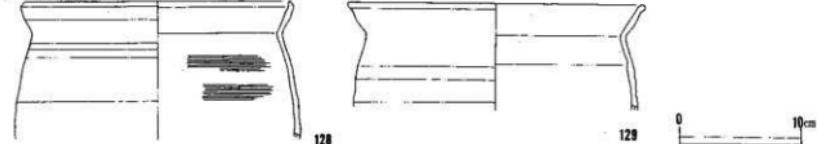
第18号住居跡



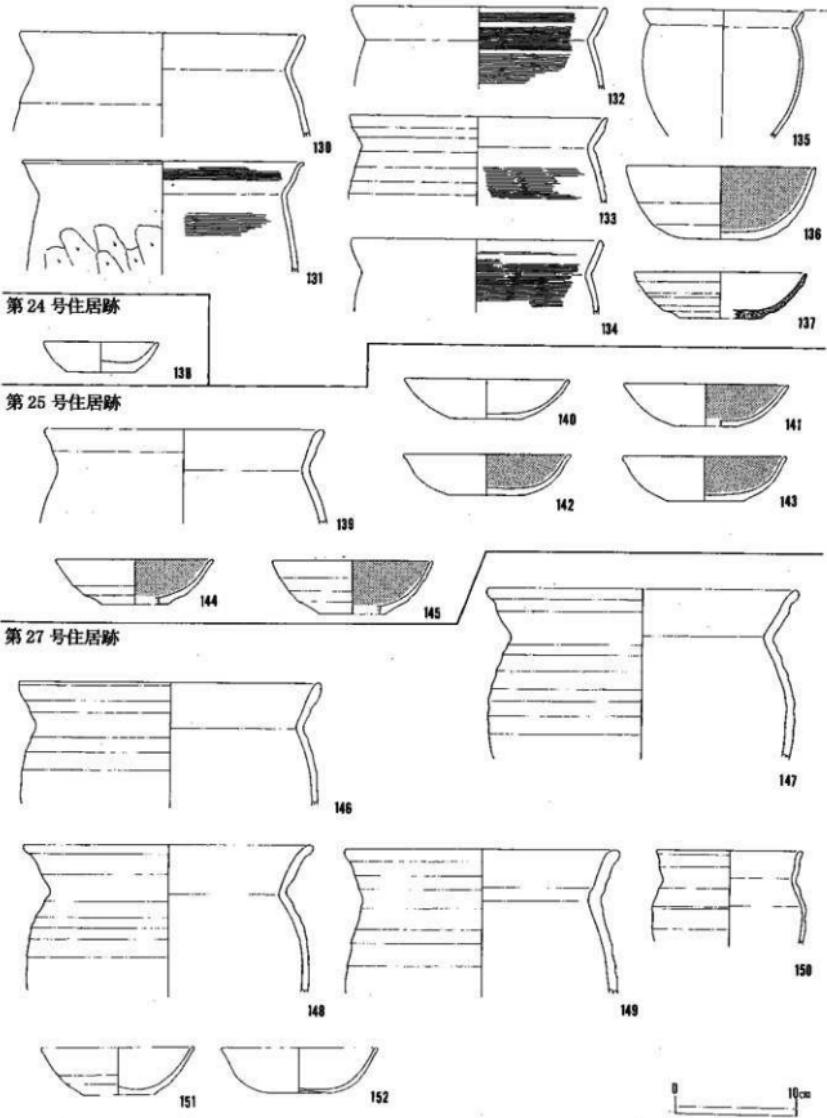
第19号住居跡



第20号住居跡

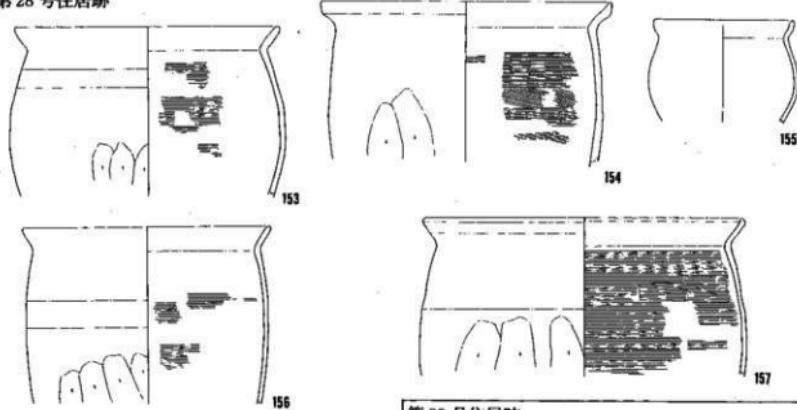


第76図 平安住居跡出土の土器(5)

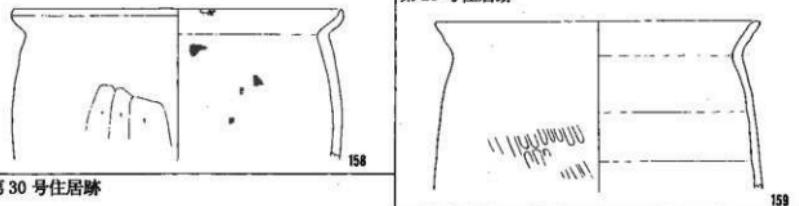


第77図 平安住居跡出土の土器(6)

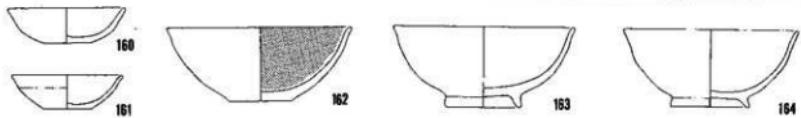
第28号住居跡



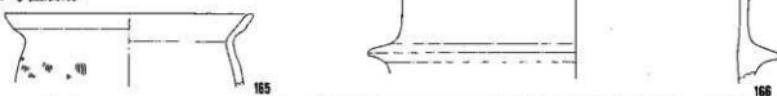
第29号住居跡



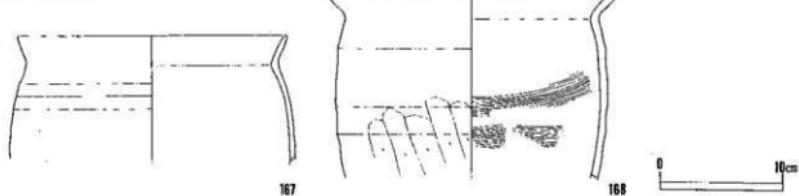
第30号住居跡



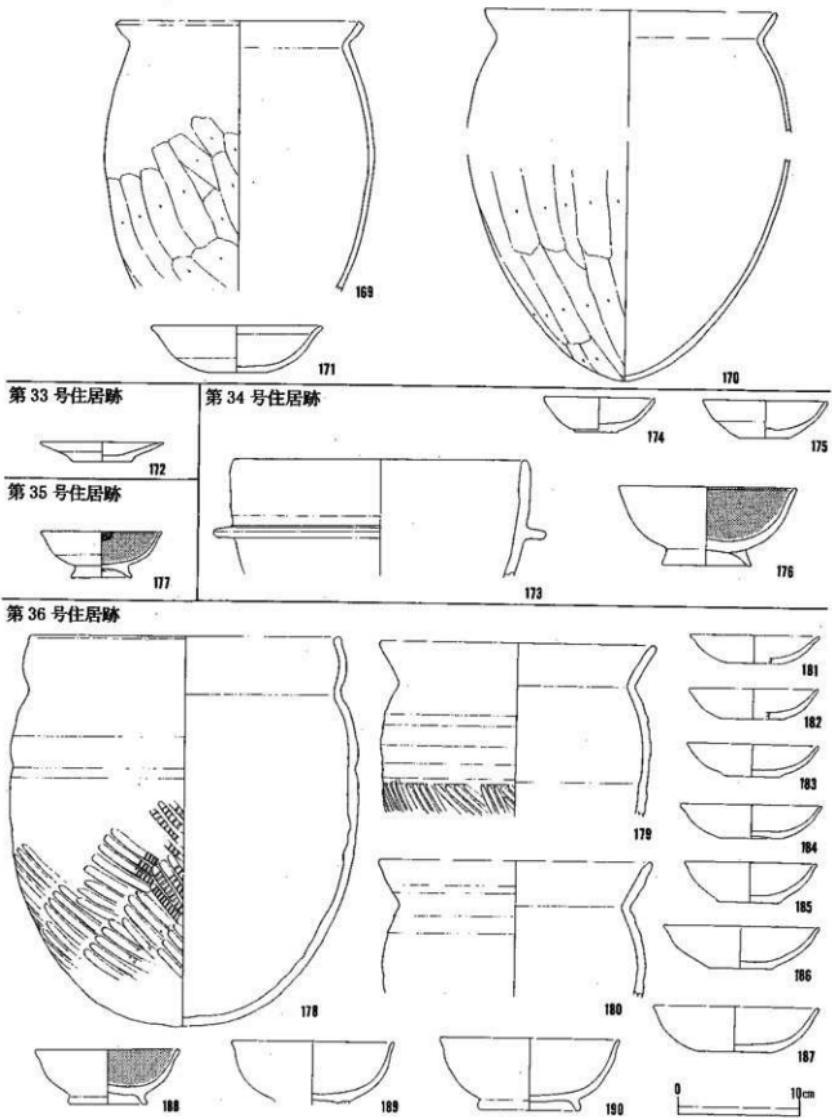
第31号住居跡



第32号住居跡

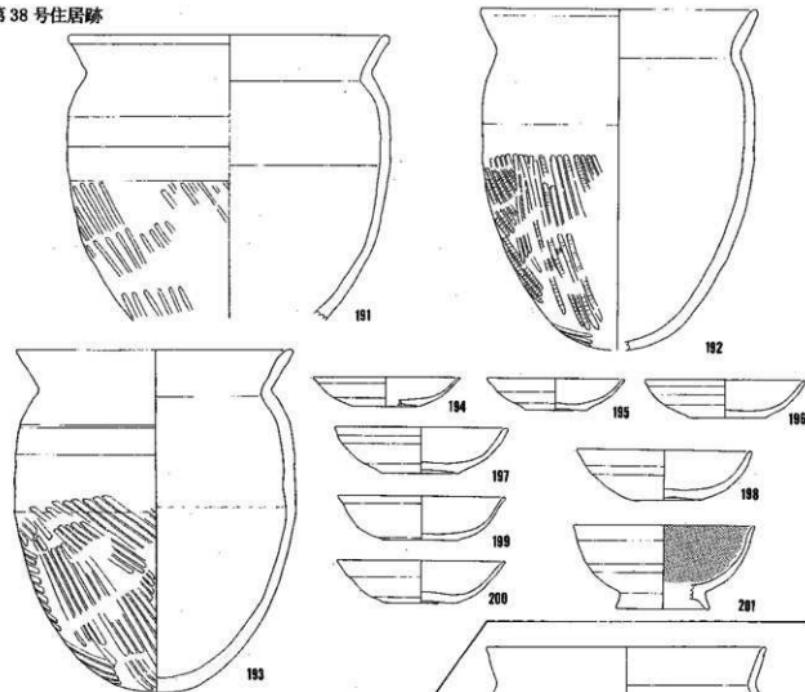


第78図 平安住居跡出土の土器(7)

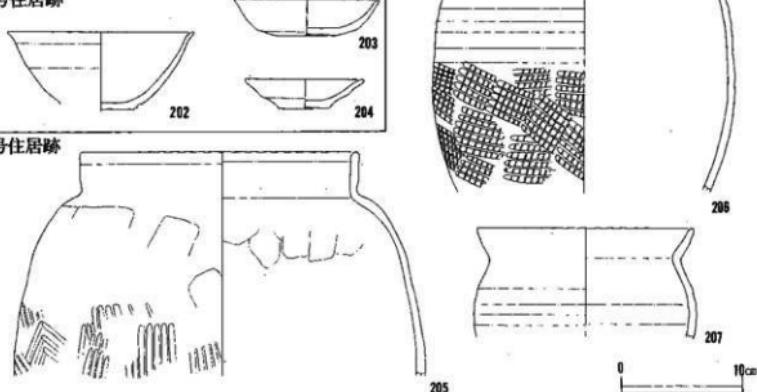


第79図 平安住居跡出土の土器(8)

第38号住居跡

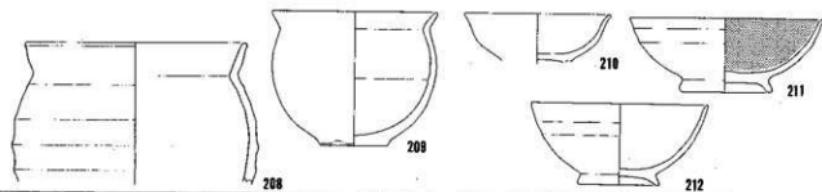


第40号住居跡

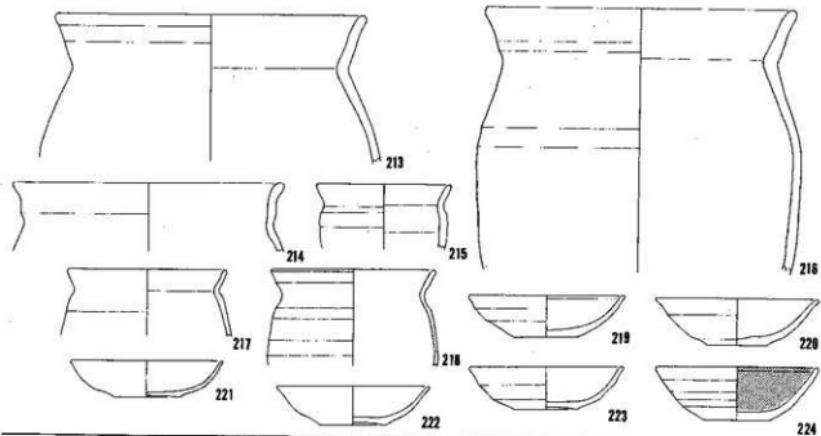


第41号住居跡

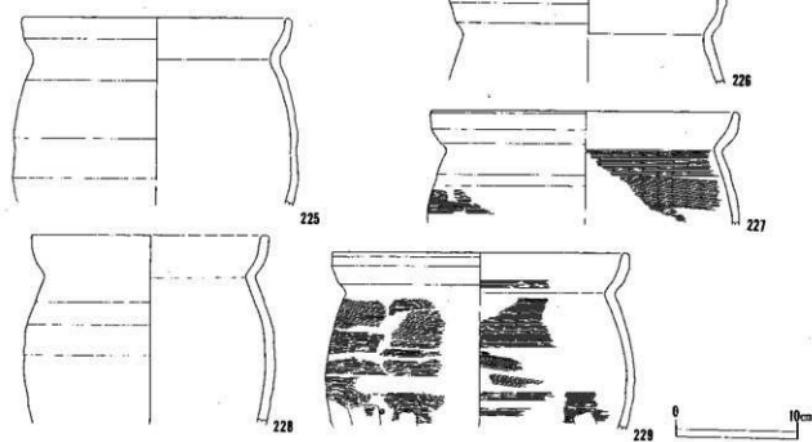
第80図 平安住居跡出土の土器(9)



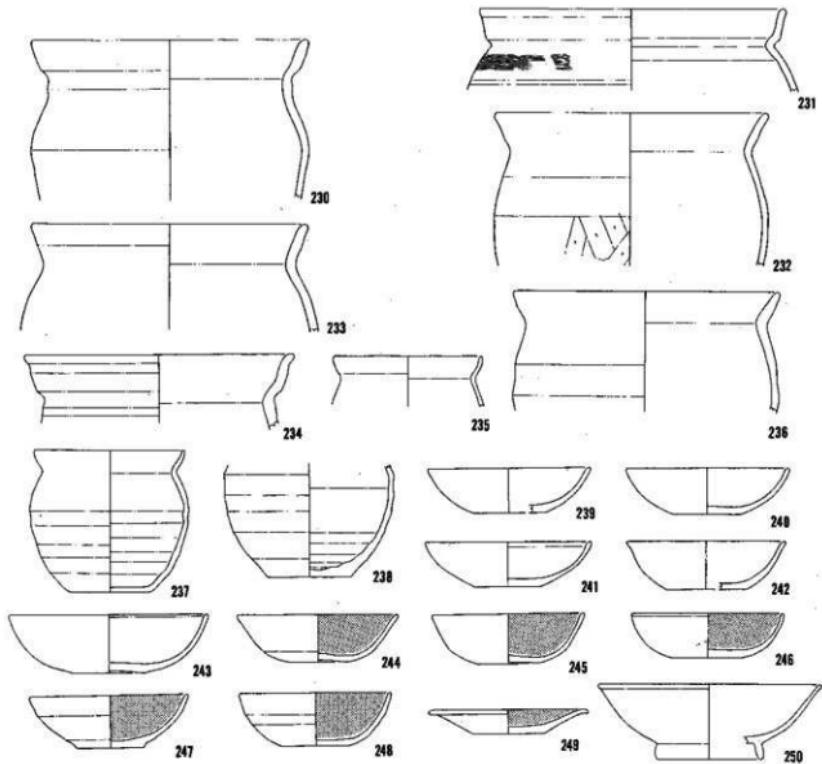
第42号住居跡



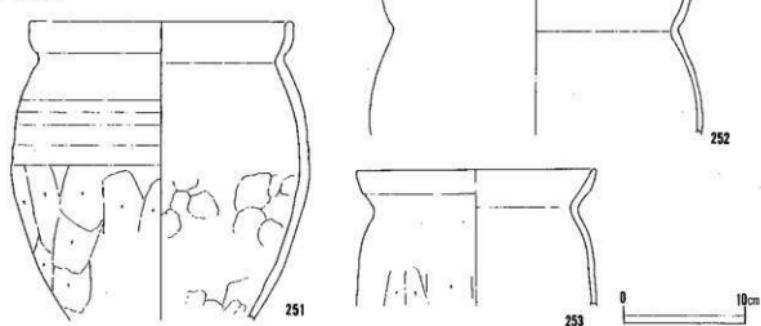
第43号住居跡



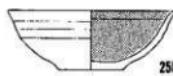
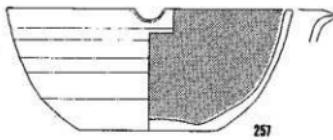
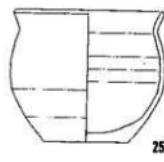
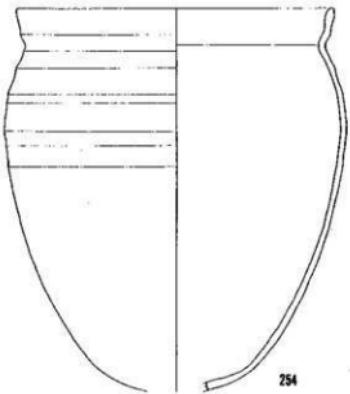
第81図 平安住居跡出土の土器(10)



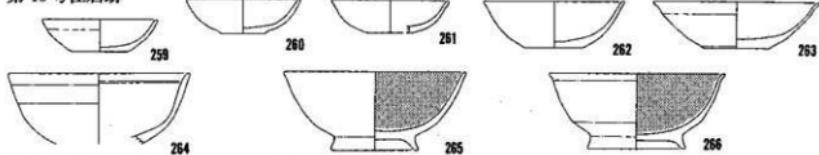
第44号住居跡



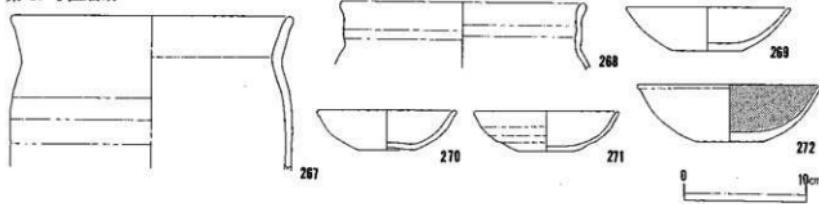
第82図 平安住居跡出土の土器(11)



第 46 号住居跡

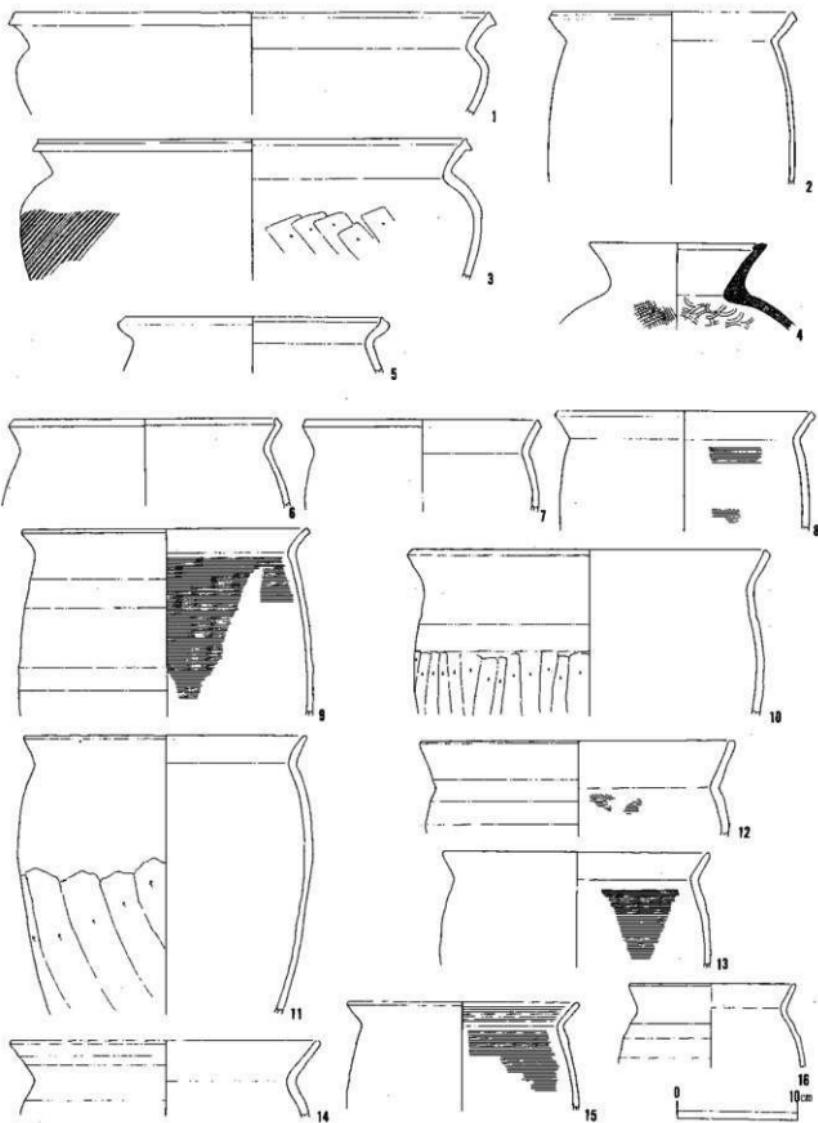


第 47 号住居跡

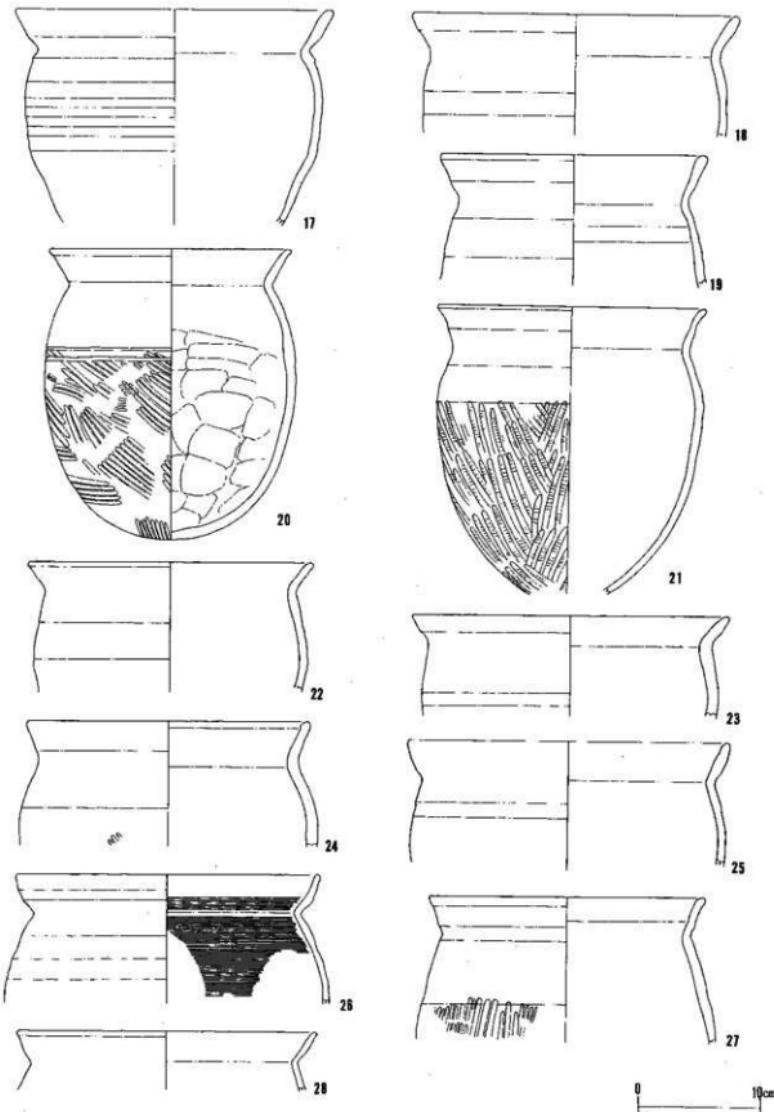


0 10cm

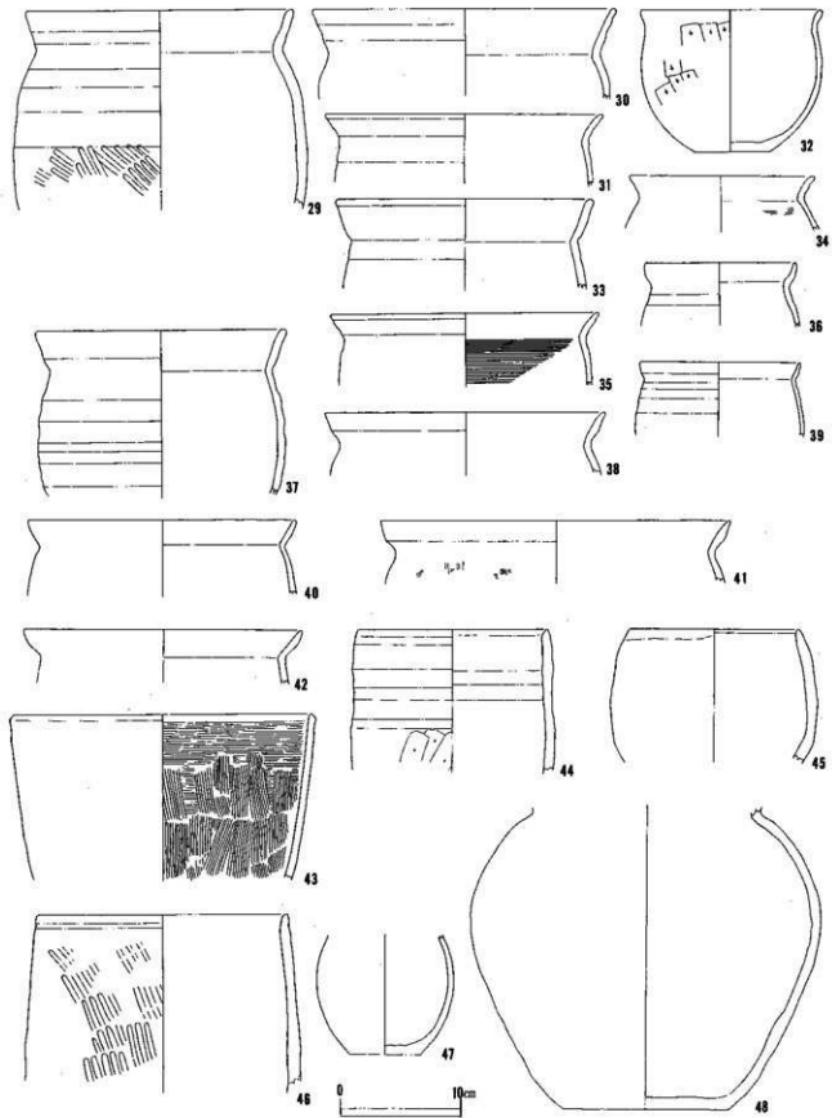
第 83 図 平安住居跡出土の土器(12)



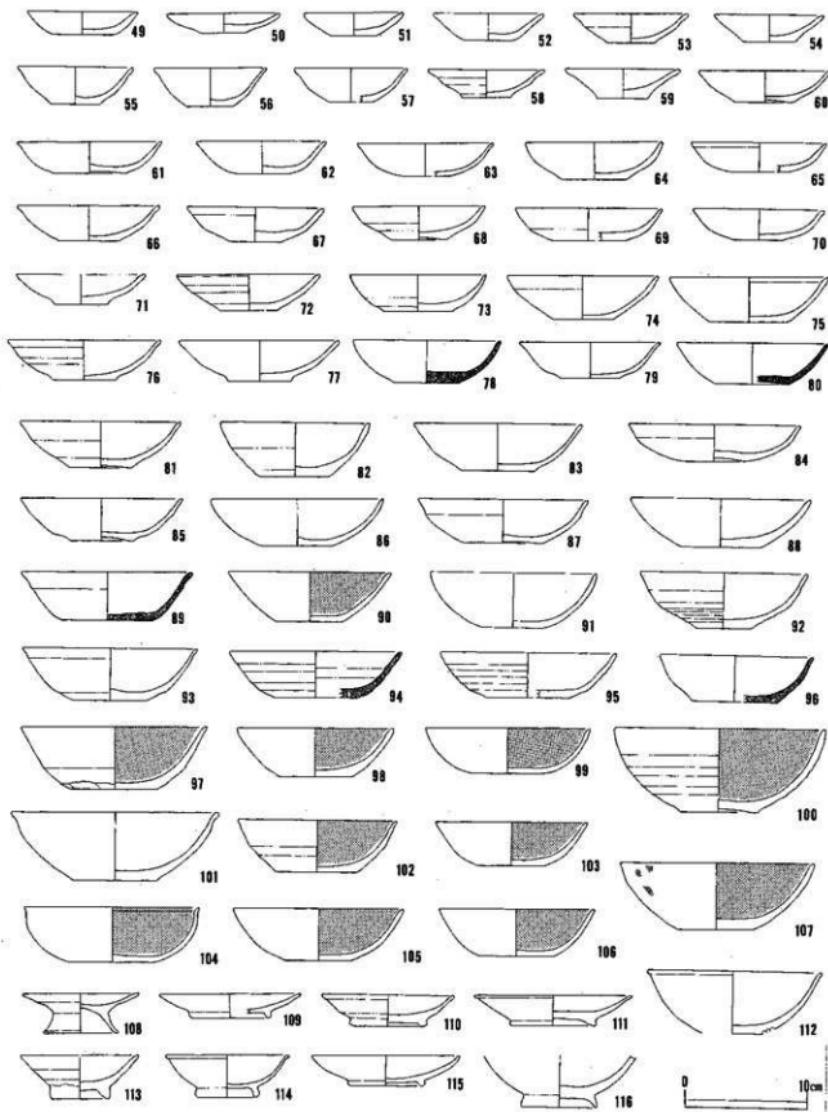
第84図 平安時代の土器(1)



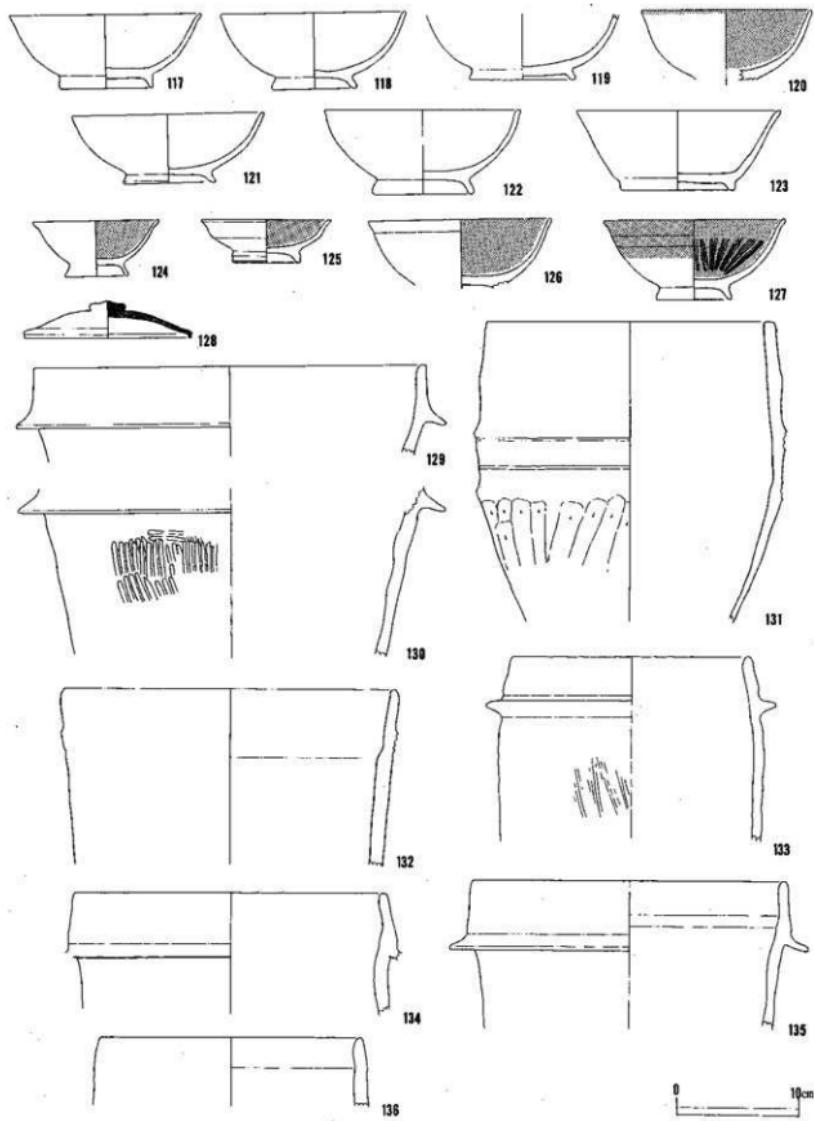
第 85 図 平安時代の土器(2)



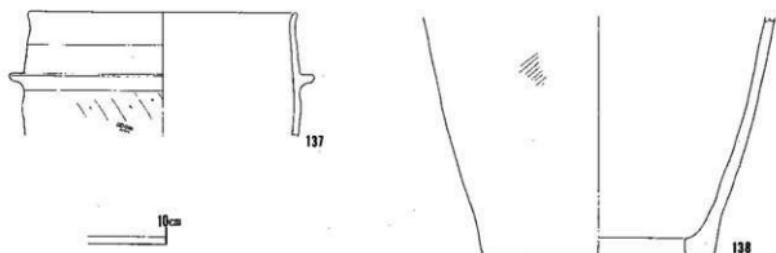
第 86 図 平安時代の土器(3)



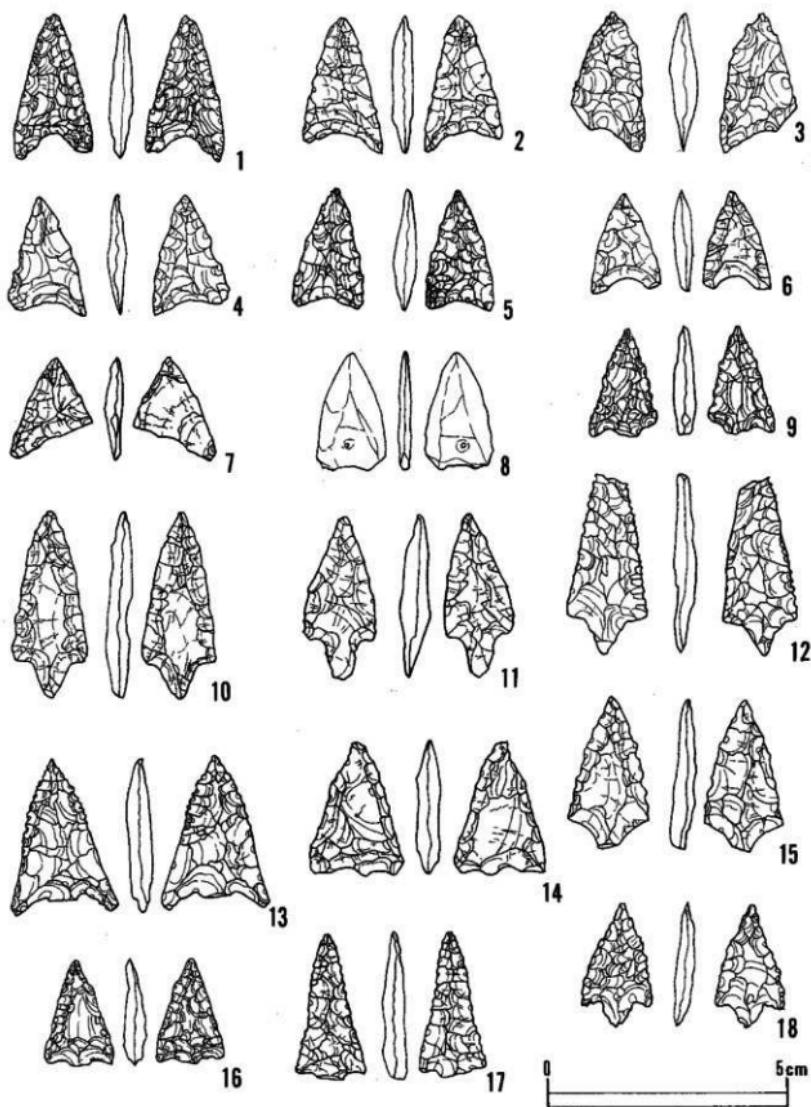
第 87 図 平安時代の土器(4)



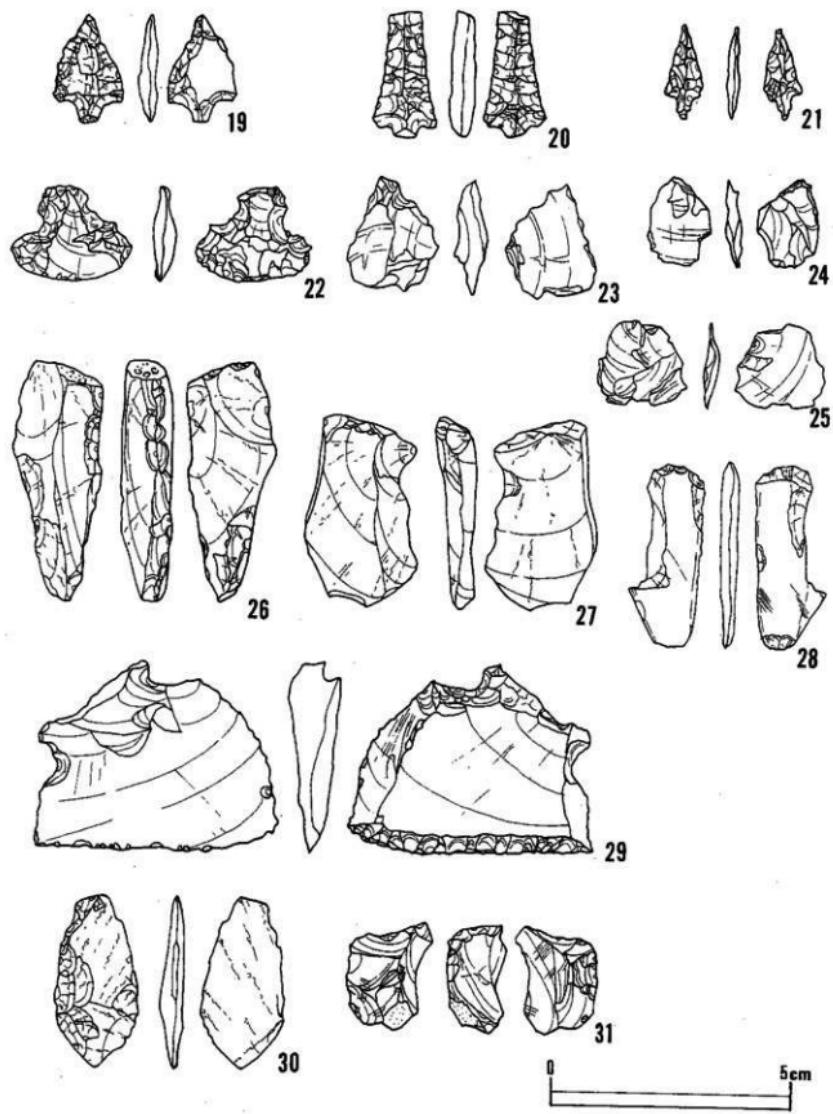
第 88 図 平安時代の土器(5)



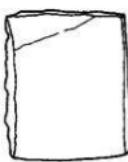
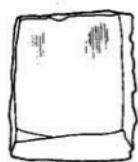
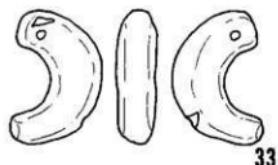
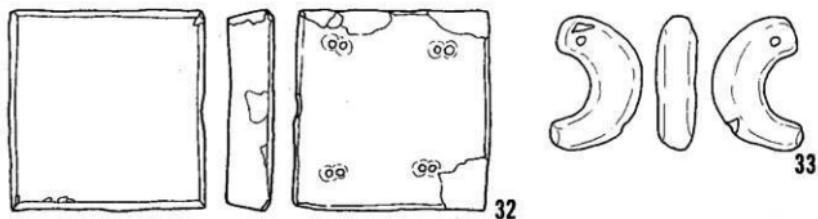
第 89 図 平安時代の土器(6)



第90図 石器(1)

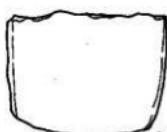


第 91 図 石器(2)



34

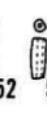
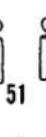
35



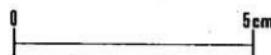
36



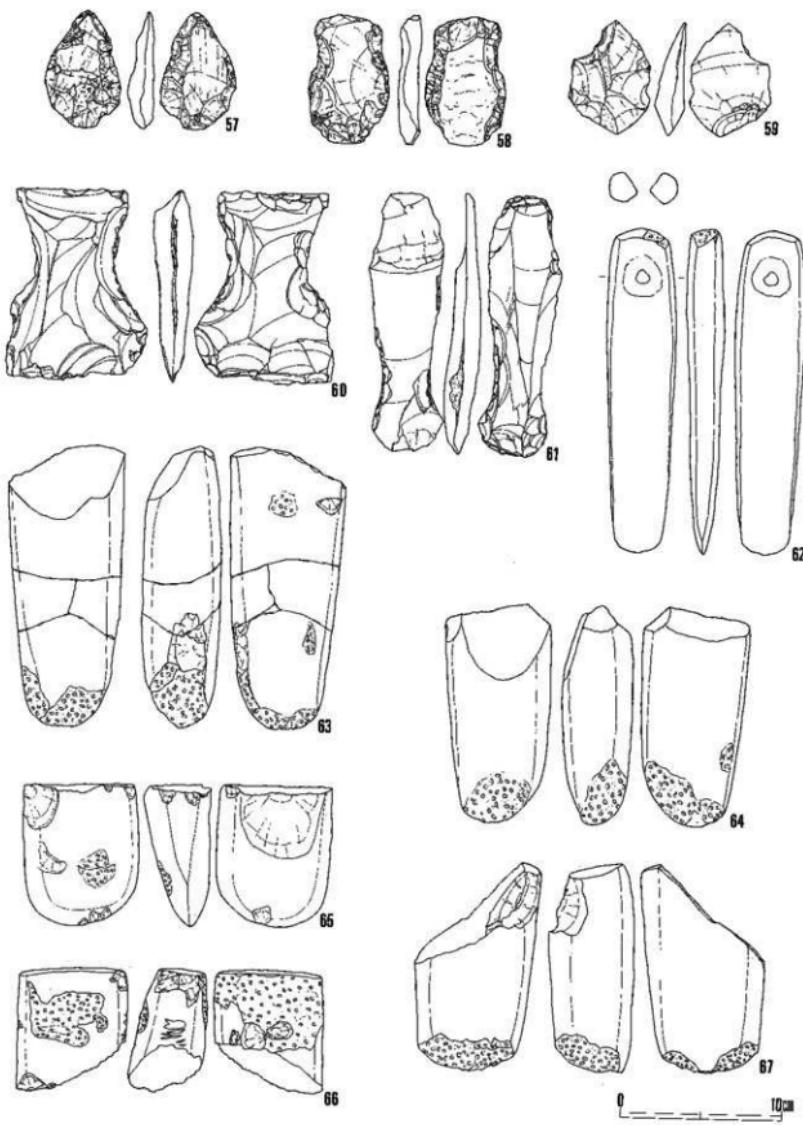
39



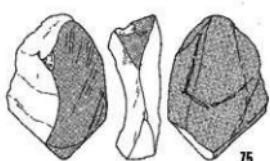
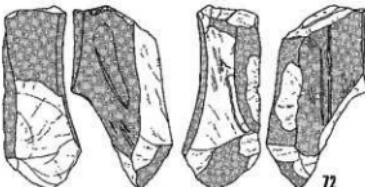
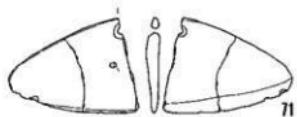
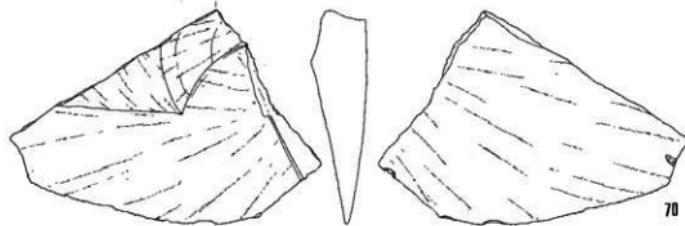
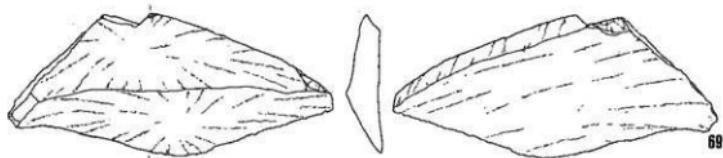
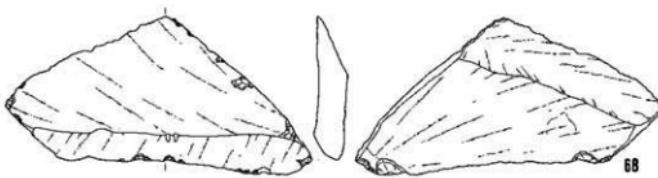
56



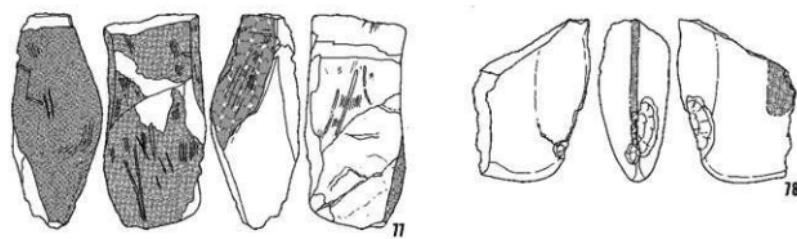
第 92 図 石器(3)



第93図 石器(4)



第94図 石器(5)

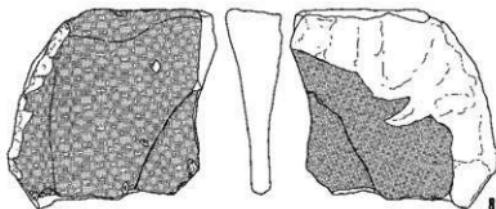


77

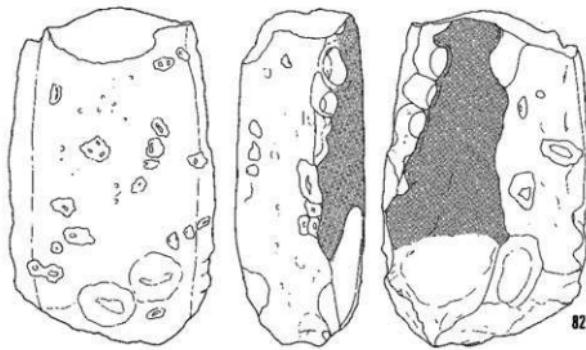
78

79

80



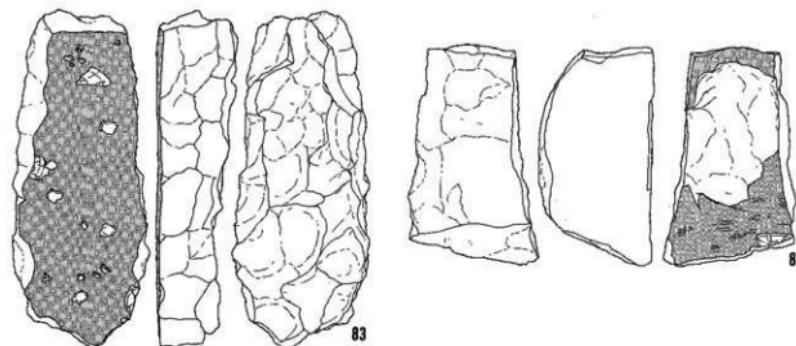
81



82

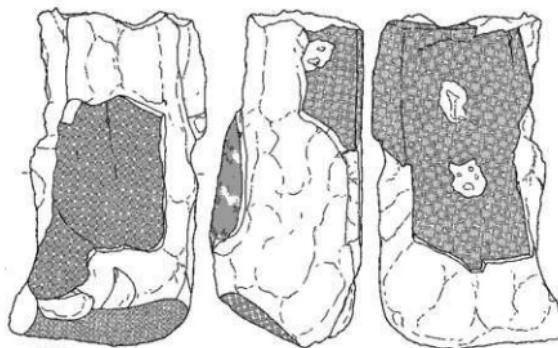
10cm

第95図 石器(6)

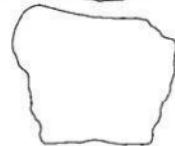


83

84



84



85



第 96 図 石器(7)

第1表 竪穴式住居跡一覧表

遺構番号	年度	区	グリット	時代区分	住居プラン					備考
					形態	主軸方向	長軸	短軸	深さ	
SB-1	97	I	N, 0-18, 19	平安時代	方形	N-31°-E	4.1	4.1	0.25	
SB-2	97	I	N, 0-17, 18	々	方形	N-0°-E	4.2	(3.7)	0.25	
SB-3	97	I	P, Q-18, 19	々	(方形)	N-19°-W	3.7	?	0.12	
SB-4	97	I	P, Q-17, 18	々	方形	N-13°-W	3.1	?	0.25	
SB-5	97	I	P, Q-16, 17	々	方形	N-13°-W	3.6	3.4	0.15	
SB-6	97	I	O, P-16, 17	々	(方形)	N-12°-W	(4.1)	(3.7)	0.15	
SB-7	97	I	L-N-19, 20	々	長方形	N-0°-E	4.8	3.8	0.25	
SB-8	97	I	O-14, 15	々	方形	N-15°-W	4.0	3.3	0.15	
SB-9	97	I	O, P-14, 15	々	(方形ない し長方形)	N-9°-W	4.1	?	0.13	
SB-10	97	I	O-25, 26	々	(方形ない し長方形)	?	3.1	?	0.20	
SB-11	97	I	N-26	々	?	?	?	?	0.17	
SB-12	97	I	R, S-23, 24	々	長方形	N-10°-W	(3.8)	4.4	0.20	
SB-13	97	I	N-18	々	(方形)	N-0°-E	2.9	?	(0.20)	
SB-14	97	I	N, M-17, 18	々	?	?	?	?	0.15	
SB-15	97	I	M, N-7, 8	々	長方形	N-0°-E	4.8	3.5	0.15	
SB-16	97	I	L-5	々	?	?	?	?	(0.15)	
SB-17	97	I	Q, R-20, 21	々	(方形)	N-12°-W	4.0	?	0.35	
SB-18	97	I	L, M-17, 18	々	(方形ない し長方形)	N-12°-W	3.3	?	0.15	
SB-21	97	I	M, N-17, 18	々	(方形ない し長方形)	?	(4.5)	?	0.15	
SB-24	97	I	L, M-15, 16	々	(長方形)	N-0°-E	4.0	?	0.10	
SB-25	97	I	L, M-15, 16	々	方形	N-8°-W	3.9	3.7	0.10	
SB-34	97	I	O, P-21, 22	々	長方形	N-0°-E	4.0	3.7	0.30	
SB-39	97	I	L, M-7, 8	々	(方形ない し長方形)	?	3.6	?	0.05	
SB-48	98	I	Q, R-29, 30	々	方形	N-0°-E	3.7	3.5	0.20	
SB-49	98	II	G-17, 18	々	?	N-0°-E	?	?	0.08	
SB-52	98	I	R, S-28, 29	々	(長方形)	N-10°-W	4.2	?	0.20	
SB-53	98	I	R, S-27, 28	々	(方形ない し長方形)	N-5°-W	?	?	0.45	
SB-54	98	I	S, T-29, 30	々	?	N-0°-E	?	?	0.15	
SB-55	98	I	S, T-28, 29	々	長方形	N-10°-W	3.2	?	0.20	
SB-56	98	III	W, X-43	々	?	N-22°-W	?	?	0.25	
SB-57	98	III	U-W-42, 43	々	長方形	N-0°-E	5.8	(4.5)	0.25	
SB-62	98	III	W, X-45, 46	々	方形	N-0°-E	4.9	4.5	0.23	
SB-64	98	III	X-48, 49	々	長方形	N-14°-E	7.4	5.1	0.25	
SB-66	98	III	R, S-45, 46	々	長方形	N-0°-E	6.0	4.8	0.10	
SB-67	98	III	R, S-46, 47	々	方形	N-10°-E	4.5	4.0	0.30	

遺構番号	年度	区	グリット	時代区分	住居プラン					備考
					形態	主軸方向	長軸	短軸	深さ	
SB-75	98	III	X, Y-47, 48	タ	(方形ないし長方形)	?	?	?	?	
SB-83	98	I	S, T-27, 28	弥生時代	円形		5.2	5.2	0.22	
SB-85	99	III	O, P-38, 39	平安時代	長方形	N-0°-E	5.2	4.0	0.10	
SB-86	99	III	P, Q-39, 40	タ	方形	N-0°-E	3.4	3.2	0.30	
SB-88	99	III	Q, R-35, 36	タ	方形	N-0°-E	4.5	4.0	0.40	
SB-111	99	III	T, U-28, 29	タ	方形	N-0°-E	4.7	4.2	0.30	
SB-114	99	III	W-41, 42	タ	(方形)	N-12°-E	?	?	0.20	
SB-115	99	III	V-41	タ	?	?	?	?	?	
SB-117	99	III	S, T-30, 31	タ	長方形	N-0°-E	4.5	2.8	0.05	
SB-118	99	III	N, O-35, 36	タ	方形	N-0°-E	3.5	3.4	0.30	
SB-128	99	III	R, S-42, 43	弥生時代	不整形ないし円形		4.4	4.0	0.04	
SB-143	99	III	R, S-47	タ	円形		5.0	5.0	0.20	

第2表 挖立柱建物跡一覧表

遺構番号	年度	区	グリット	時代区分	住居プラン					備考
					形態	主軸方向	長軸	短軸	深さ	
SH-2	98	I	N, O-16, 17	弥生時代	8本柱	N-13°-E	3.7	3.2		
SH-3	98	I	K-9, 10	タ	10本柱	N-71°-W	4.8	2.2		
SH-4	98	I	J, K-7, 8	タ	8本柱	N-10°-E	4.6	2.7		
SH-9	98	I	L, M-16	タ	6本柱	N-30°-E	3.5	2.5		
SH-10	98	I	P, Q-22	タ	6本柱	N-30°-E	3.4	1.7		
SH-11	98	II	G-9, 10	平安時代	6本柱	N-0°-E	2.8	2.4		
SH-12	98	II	F, G-9	タ	6本柱	N-0°-E	3.5	1.5		
SH-13A	98	I	Q, R-26, 27	タ	6本柱	N-14°-W	3.3	1.9		
SH-13B	98	I	P, Q-27, 28	タ	6本柱	N-14°-W	3.4	2.3		
SH-15	98	I	P-29, 30	タ	6本柱	N-87°-E	3.6	1.9		
SH-18	98	I	O-R-27~29	弥生時代	12本柱	N-60°-E	9.4	3.2		
SH-19	98	I	Q, R-29, 30	タ	10本柱	N-65°-E	6.6	2.9		
SH-23	99	III	N-P-38~40	平安時代	8本柱	N-86°-W	7.8	4.0		
SH-25	99	III	R, S-33, 34	タ	6本柱	N-9°-W	3.7	3.7		
SH-31	99	III	N-36, 37	タ	6本柱	N-10°-E	2.6	1.7		
SH-32	97	I	K-M-5, 6	タ	8本柱	N-55°-E	5.0	4.0		

第3表 SQ一覧表

遺構番号	年度	区	グリット	時代区分	プラン					備考
					形態	主軸方向	長軸	短軸	深さ	
SQ-1	97	II	F, G-12	弥生時代	やや方形にちかい長方形	N-0°-E	1.70	1.00	0.07	礫床木棺墓
SQ-2	97	II	E-12	々	やや長円形にちかい長方形	N-40°-E	1.80	(0.80)	?	礫床木棺墓
SQ-6	97	II	G-9, 10	々	長円形	N-50°-E	2.40	0.80	0.15	礫床木棺墓
SQ-10	98	II	F, G-11	々	長方形	N-12°-W	1.55	0.80	(0.13)	礫床木棺墓
SQ-11	98	II	G-12	々	長方形	N-62°-W	0.75	0.50	?	礫床木棺墓
SQ-12	98	II	F-12	々	長方形	N-35°-E	1.85	0.80	0.06	礫床木棺墓
SQ-14	98	II	G-10	々	長方形	N-4°-W	1.75	0.80	(0.05)	礫床木棺墓
SQ-15	98	II	F-9	々	長方形	N-60°-W	1.80	0.85	(0.08)	礫床木棺墓
SQ-16	98	II	F, G-9	々	長方形	N-30°-E	1.80	0.75	0.06	礫床木棺墓
SQ-56	99	IV	U, V-64	々	長方形	N-20°-W	2.00	1.00	(0.20)	礫床木棺墓
SQ-62	99	IV	W-65	々	やや方形にちかい長方形	N-40°-E	2.00	1.25	0.23	礫床木棺墓
SQ-72	99	IV	W-67	々	不明	N-83°-W	(1.60)	(0.80)	?	礫床木棺墓
SQ-76	99	IV	V-67, 68	々	不明	N-78°-E	(1.00)	(0.50)	?	礫床木棺墓
SQ-77	99	IV	W-67	々	長方形	N-60°-E	1.50	0.80	0.20	礫床木棺墓
SQ-84	99	IV	V-65	々	不明	N-25°-W	(1.70)	(0.70)	(0.10)	礫床木棺墓
SQ-85	99	IV	Y-64, 65	々	長方形	N-20°-E	2.20	1.30	0.17	礫床木棺墓
SQ-86	99	IV	W-65	々	長方形	N-60°-W	2.00	1.00	(0.06)	礫床木棺墓
SQ-87	99	IV	X, Y-66	々	長方形	N-70°-W	1.90	0.80	0.17	礫床木棺墓
SQ-88	99	IV	W-66	々	方形にちかい長方形	N-50°-W	1.10	0.85	0.10	礫床木棺墓
SQ-90	99	IV	W-66, 67	々	長方形	N-70°-W	2.05	1.00	0.15	礫床木棺墓

第4表 SK一覧表

遺構番号	年度	区	グリット	時代区分	プラン					備考
					形態	主軸方向	長軸	短軸	深さ	
SK-63	98	I	0-15	弥生時代	長円形	N-8°-E	(1.10)	(0.70)	0.15	土坑墓
SK-72	98	I	0-13		円形		0.70	0.60	0.17	
SK-95	98	II	G, H-12		長円形	N-55°-W	1.30	1.05	0.25	土坑墓
SK-97	98	II	H-12		不整形な長方形	N-70°-E	1.90	1.00	0.17	土坑墓
SK-103	98	II	I-17		円形		0.80	0.80	0.40	
SK-110	98	II	E-9		円形		(0.95)	0.80	0.25	
SK-111	98	II	E, F-10		隅丸長方形	N-0°-E	1.50	0.70	0.05	土坑墓
SK-126	98	I	S-29, 30		長円形	N-70°-E	1.50	1.10	0.85	
SK-127	98	I	T-28		円形		1.30	1.05	0.45	
SK-170	99	III	R-41		長円形	N-22°-W	1.90	1.30	0.33	木棺墓
SK-172	99	III	R, S-41		不整橢円形	N-0°-E	1.45	1.20	0.75	
SK-181	99	III	X-48		長円形	N-0°-E	1.95	0.85	0.33	木棺墓
SK-183	99	III	W-48		半辺が丸みをもつ長方形	N-0°-E	1.80	1.10	0.33	木棺墓
SK-185	99	III	W-48, 49		不整橢円形	N-90°-E	1.50	0.75	0.06	木棺墓
SK-186	99	III	X-49		半辺が丸みをもつ長方形	N-60°-E	1.80	0.85	0.10	木棺墓
SK-187	99	III	X-49		不整形	N-67°-E	1.80	0.80	0.15	木棺墓
SK-188	99	III	X-49, 50		半辺が丸みをもつ長方形	N-55°-E	1.70	0.75	0.20	木棺墓
SK-189	99	III	W-49, 50		長方形	N-47°-E	1.50	0.85	0.20	木棺墓
SK-191	99	III	X, Y-48		長円形	N-58°-W	1.65	0.70	0.15	木棺墓
SK-195	99	III	V-47		不整長円形	N-45°-W	1.20	0.75	0.20	土坑墓
SK-201	99	III	Y-51		長方形	N-14°-W	(1.60)	0.80	0.45	土坑墓
SK-203	99	III	X-48, 49		半辺が丸みをもつ長方形	N-43°-E	2.00	1.10	0.23	木棺墓
SK-208	99	III	W, X-51		長方形	N-48°-W	1.45	0.75	0.25	土坑墓
SK-209	99	III	X-51, 52		長方形	N-84°-E	1.60	0.80	0.30	木棺墓
SK-214	99	III	T-45		円形		1.10	1.00	0.20	
SK-218	99	III	W-52		長円形	N-0°-E	1.10	0.80	0.40	
SK-219	99	III	Y-49		隅丸長方形	N-0°-E	1.65	0.85	0.50	木棺墓
SK-222	99	III	V-39		長方形	N-0°-E	1.90	0.90	0.10	土坑墓
SK-223	99	III	V-37		円形		0.90	0.80	0.80	

第5表 弥生時代の土器観察表

図版番号	遺構名	器種分類	口径	底径	器高	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
			cm	cm	cm			
第28図-1	SB-83	甕	16.6				ヨコナデ	
第28図-2	SB-83	甕	12.0				ミガキとハケ	
第28図-3	SB-83	甕	9.4			口縁部ヨコナデ	ミガキ	
第28図-4	SB-143	甕		10.0				
第28図-5	SB-143	甕	12.8			口縁部ヨコナデ	ミガキ	
第29図-1	甕		7.6	5.7	18.5			
第29図-2	甕		16.6					
第29図-3	甕		13.0					
第29図-4	甕		13.5					
第29図-5	甕			5.7				
第29図-6	甕			5.6		赤色塗彩とミガキ		
第29図-7	甕			5.1				
第29図-8	甕		3.4	3.2	8.6	赤色塗彩とミガキ	口縁部赤色塗彩とミガキ	
第29図-9	甕		7.2					
第29図-10	甕		14.4					
第29図-11	甕					ミガキ		
第29図-12	甕							
第29図-13	甕		20.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第29図-14	甕		18.4			ヨコナデ	ヨコナデ	
第29図-15	甕		18.4			ヨコナデ		
第29図-16	甕		13.2					
第29図-17	甕		14.9			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第29図-18	甕		8.8			赤色塗彩	赤色塗彩	
第29図-19	甕		19.5			ヨコナデ	ヨコナデ	
第29図-20	甕		9.4					
第29図-21	甕		7.0					
第29図-22	甕		11.0			口縁部ヨコナデ、ミガキ		
第29図-23	甕		11.2					
第29図-24	甕							
第29図-25	甕		14.4			ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-26	甕		18.8			ヨコナデ		
第30図-27	甕		18.7			ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-28	甕		25.2				ヨコナデ	
第30図-29	甕		16.8				ヨコナデ	
第30図-30	甕		19.6					
第30図-31	甕		21.3			ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-32	甕		17.6				ヨコナデ	
第30図-33	甕		16.6					
第30図-34	甕		23.3			ヨコナデとミガキ	ヨコナデ	
第30図-35	甕		12.7					
第30図-36	甕		10.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-37	甕		15.8					
第30図-38	甕		11.4			ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-39	甕		12.1			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第30図-40	甕		16.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-41	甕		19.4				ヨコナデ	
第30図-42	甕		9.0					
第30図-43	甕		11.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-44	甕		11.7					
第30図-45	甕		12.8			ヨコナデ		

図版番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	備考
第30図-46	壺	13.6				ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-47	壺	14.8				ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-48	壺	16.6				ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-49	壺	14.6						
第30図-50	壺	14.5				ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-51	壺	16.5				ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-52	壺	16.6						
第30図-53	壺	13.5				ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-54	壺	13.0						
第30図-55	壺	13.2				ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-56	壺	15.8				ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-57	壺	15.8						
第30図-58	壺	11.7				ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-59	壺	12.8						
第30図-60	壺	12.0					ミガキ	
第30図-61	壺	16.0				ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-62	壺	13.4				ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-63	壺	15.2				ヨコナデ		
第30図-64	壺	13.4						
第30図-65	壺	10.8				ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-66	壺	8.2				ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第30図-67	壺	11.1						
第30図-68	壺	11.4				ヨコナデ	ヨコナデ	
第30図-69	壺	8.3						
第30図-70	壺	4.8						
第30図-71	壺	9.8				赤色塗彩	赤色塗彩とミガキ	
第30図-72	壺	11.0				赤色塗彩とミガキ	赤色塗彩とミガキ	
第30図-73	壺						ミガキ	
第30図-74	壺		5.4					
第31図-75	壺							
第31図-76	壺							
第31図-77	壺		7.8					
第31図-78	壺					ミガキ		
第31図-79	壺		11.2					
第31図-80	壺		7.0					
第31図-81	壺		7.2			ミガキ		
第31図-82	壺		6.3				ミガキ	
第31図-83	壺		7.5					
第31図-84	壺		9.0					
第31図-85	壺		5.8			ミガキ		
第31図-86	壺		9.0					
第32図-87	壺	29.3						
第32図-88	壺	22.5				口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第32図-89	壺	32.3				口縁部ヨコナデ		
第32図-90	壺	32.4						
第32図-91	壺	16.6	6.6	23.0				
第32図-92	壺	29.4						
第32図-93	壺	24.0						
第32図-94	壺	18.8				口縁部ヨコナデ		
第32図-95	壺	19.0						
第32図-96	壺	14.0				ヨコナデとミガキ	ヨコナデとミガキ	

図版番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
第32図-97		甕	17.6			赤色塗彩とヨコナデ	赤色塗彩とヨコナデ	
第32図-98		甕	15.8					
第33図-99		甕	30.8			口縁部ヨコナデ		
第33図-100		甕	28.8				口縁部ヨコナデ	
第33図-101		甕	27.8					
第33図-102		甕	22.3			ヨコナデ	ヨコナデ	
第33図-103		甕	27.8			ヨコナデ	ヨコナデ	
第33図-104		甕	24.6				ヨコナデ	
第33図-105		甕	27.0					
第33図-106		甕	23.6					
第33図-107		甕	29.6			ヨコナデ	ヨコナデ	
第33図-108		甕	24.6			口縁部ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	
第33図-109		甕	24.9					
第33図-110		甕	8.8			口縁部ヨコナデ		
第33図-111		甕	16.0				ヨコナデ	
第33図-112		甕	21.8					
第33図-113		甕	20.6					
第33図-114		甕	13.4				ヨコナデ	
第33図-115		甕	15.0			頸部ヨコナデ		
第33図-116		甕	17.0			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第33図-117		甕	15.3					
第33図-118		甕	16.0			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第33図-119		甕	15.6					
第33図-120		甕	13.4			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第33図-121		甕	10.5	4.0	10.9	口縁部ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデとミガキ	
第33図-122		甕	13.4			ヨコナデ	ミガキ	
第33図-123		甕	12.6			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第34図-124		甕	19.9					
第34図-125		甕	15.4					
第34図-126		甕	21.6			口縁部ヨコナデ		
第34図-127		甕	20.5					
第34図-128		甕	16.6			口縁部ヨコナデ	ヨコナデとミガキ	
第34図-129		甕	21.6					
第34図-130		甕	20.8			ヨコナデ		
第34図-131		甕	15.1			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第34図-132		甕	16.0			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第34図-133		甕	16.0					
第34図-134		甕	10.4			口縁部ヨコナデ、ケズリ	ミガキ	
第34図-135		甕	14.0			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第34図-136		甕	18.6					
第34図-137		甕	19.4			ヨコナデ		
第34図-138		甕	14.2			頸部ヨコナデ		
第34図-139		甕	14.1					
第34図-140		甕	12.6					
第34図-141		甕	13.1					
第34図-142		甕	14.0				ミガキ	
第34図-143		甕	16.0			口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	
第34図-144		甕	12.4				ミガキ	
第34図-145		甕	15.4					
第34図-146		甕	13.4					
第34図-147		甕	14.9					

図版番号	遺構名	器種分類	口径	底径	器高	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
			cm	cm	cm			
第34図-148		甕	13.0					
第34図-149		甕	15.3					
第34図-150		甕	14.4					
第34図-151		甕	11.0					
第34図-152		甕	12.6					
第34図-153		甕	10.6					
第34図-154		甕	14.6			ヨコナデ	ヨコナデ	
第34図-155		甕	11.2					
第34図-156		甕						
第34図-157		甕		6.0		ヨコナデ	ヨコナデ	
第34図-158		甕		7.0		底船板状圧痕		
第35図-159		甕	10.5	6.7	19.2	赤色塗彩	口縁部ヨコナデ、赤色塗彩	
第35図-160		鉢	26.1					
第35図-161		甕	16.0					
第35図-162		甕	10.0			ヨコナデとミガキ	口縁部ヨコナデ	
第35図-163		甕	9.6			赤色塗彩とミガキ	ミガキ	
第35図-164		甕	11.4					
第35図-165		甕	11.3			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第35図-166		高杯	18.4			赤色塗彩	赤色塗彩	
第35図-167		蓋	13.9	4.0	3.6	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第35図-168		高杯		9.5		赤色塗彩とミガキ	赤色塗彩とミガキ	
第35図-169		高杯		8.2		赤色塗彩とミガキ	赤色塗彩	
第35図-170	台付甕の脚部			5.8		ミガキ	ミガキ	
第35図-171		鉢	12.1			赤色塗彩	赤色塗彩	
第35図-172		鉢	12.8	5.0	5.8	赤色塗彩とミガキ	赤色塗彩とミガキ	
第35図-173		鉢						
第35図-174		鉢	17.4					
第35図-175		鉢	14.5	4.3	6.4	赤色塗彩とヨコナデ	赤色塗彩とヨコナデ	
第35図-176		蓋	4.2	16.2	6.1			
第35図-177		蓋	4.1					
第35図-178		蓋	4.5				ヨコナデ	
第35図-179		蓋	3.2			赤色塗彩	赤色塗彩	
第35図-180		蓋	3.2					

第6表 古墳時代の土器観察表

図版番号	遺構名	器種分類	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	備考
			cm	cm	cm			
第36図-1	壺		30.0			ミガキ	ミガキ	
第36図-2	壺		15.2					
第36図-3	壺		16.2			ヨコナデとハケ、ミガキ	ハケ、ミガキ	
第36図-4	壺		21.8			ヨコナデとミガキ	ヨコナデとミガキ	
第36図-5	壺		11.0			口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	
第36図-6	壺		14.2			ヨコナデとミガキ	ヨコナデ	
第36図-7	壺		15.8					
第36図-8	壺			14.8				
第36図-9	壺							
第36図-10	壺			9.0				
第36図-11	甕		20.8			口縁部ヨコナデ、ケズリ	口縁部ヨコナデ	
第36図-12	甕		18.2			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第36図-13	甕		19.6			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第36図-14	甕		24.6					
第36図-15	甕		15.4			口縁部ヨコナデ、ミガキ	口縁部ヨコナデ	
第36図-16	甕		16.0			口縁部ヨコナデ、ミガキ	口縁部ヨコナデ	
第36図-17	甕		16.0			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第37図-18	甕		14.4			口縁部ヨコナデ、ミガキ	口縁部ヨコナデ	
第37図-19	甕		17.3					
第37図-20	甕		17.2			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第37図-21	甕		16.0			ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第37図-22	甕		14.6			口縁部ヨコナデ		
第37図-23	甕		16.1			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第37図-24	甕		13.8			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第37図-25	甕		19.6			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第37図-26	甕		15.3					
第37図-27	甕		14.5					
第37図-28	甕		20.8			ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第37図-29	甕		16.3			ヨコナデ	ヨコナデ	
第37図-30	甕		20.0					
第37図-31	甕		17.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第37図-32	甕		18.0					
第37図-33	甕		15.7				ヨコナデ	
第37図-34	甕		13.1			口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第37図-35	甕		15.6					
第37図-36	甕		14.1					
第37図-37	甕		16.0					
第37図-38	甕		14.0					
第37図-39	甕		13.9					
第37図-40	甕		13.3			ヨコナデ	ヨコナデ	
第37図-41	甕		13.1					
第37図-42	甕		4.0			ケズリ		
第37図-43	小型丸底七器		9.1			ヨコナデとミガキ	口縁部ヨコナデ	
第37図-44	小型丸底土器		13.7			赤色塗彩	赤色塗彩	
第37図-45	小型丸底土器		8.5	6.3		口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第37図-46	小型丸底土器			2.1				
第37図-47	小型丸底土器					ミガキ	ミガキ	
第37図-48	小型丸底土器		14.9				ミガキ	
第37図-49	小型丸底土器		12.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第37図-50	小型丸底土器		8.8					

図版番号	遺構名	器種分類	口径	底径	器高	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
			cm	cm	cm			
第30図-51		小型丸底土器	10.6			ヨコナデ	ヨコナデ	
第38図-52		小型丸底土器	12.8			ヨコナデ	ヨコナデ	
第38図-53		高杯	17.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第38図-54		高杯	20.0			赤色塗彩	赤色塗彩	
第38図-55		高杯	17.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第38図-56		高杯	18.0					
第38図-57		高杯	19.2			ミガキ		
第38図-58		高杯		17.4		ミガキ	口縁部ヨコナデ	
第38図-59		高杯		13.6				
第38図-60		高杯		10.2		口縁部ヨコナデ、ミガキ	口縁部ヨコナデ	
第38図-61		高杯		11.4			ヨコナデ	
第38図-62		高杯		8.0		ミガキ		
第38図-63		高杯		9.5				
第38図-64		高杯		9.2		口縁部ヨコナデ、ミガキ	口縁部ヨコナデ	
第38図-65		高杯		9.2		口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	
第38図-66		高杯		12.4			ヨコナデ	
第38図-67		高杯						
第38図-68		高杯		11.7				
第38図-69		高杯		9.8		口縁部ヨコナデ、ミガキ	口縁部ヨコナデ	
第38図-70		高杯		9.4		口縁部ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ	
第38図-71		高杯		7.7		ミガキ	ヨコナデ	

第7表 平安住居跡出土の土器観察表

図版番号	遺構名	器種分類	口径	底径	器高	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
			cm	cm	cm			
第72図-1	SB-1	甕	25.1			ヨコナデ	ヨコナデ	
第72図-2	SB-1	甕	23.6			ヨコナデ	ヨコナデ	
第72図-3	SB-1	甕	22.5			ヨコナデ	ヨコナデ	
第72図-4	SB-1	甕	25.1			ヨコナデ	ヨコナデ	
第72図-5	SB-1	甕	21.5			ヨコナデ	ヨコナデ	
第72図-6	SB-1	甕	12.4			ヨコナデ	ヨコナデ	
第72図-7	SB-1	甕	22.1			ヨコナデ	ヨコナデ	
第72図-8	SB-1	甕		12.0		ヨコナデとケズリ	ヨコナデ	
第72図-9	SB-1	杯	13.9	5.5	4.2	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第72図-10	SB-1	杯	12.2	4.4	3.4	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第72図-11	SB-1	杯	11.9	4.4	3.2	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第72図-12	SB-1	杯	11.8	4.8	3.4	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第72図-13	SB-1	杯	12.6	6.1	3.4	ヨコナデ	ヨコナデとミガキ	
第72図-14	SB-1	杯	11.1			ヨコナデ	黒色処理	
第72図-15	SB-1	杯	14.3	6.1	6.4	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、ミガキ	
第72図-16	SB-1	杯	15.2	7.6	6.4	ヨコナデ	ヨコナデとミガキ	
第72図-17	SB-1	杯	14.6	6.9	6.3	ヨコナデ 底面ヘラケズリ	黒色処理	
第72図-18	SB-1	杯	15.5	6.7	7.2	ヨコナデ 底面ヘラケズリ	黒色処理とミガキ	
第72図-19	SB-2	甕	23.2	4.6	28.7	ヨコナデとケズリ	口縁部ヨコナデ、ハケ	
第73図-20	SB-2	甕	23.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第73図-21	SB-2	甕	18.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第73図-22	SB-2	甕	10.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第73図-23	SB-2	杯	14.6	6.6	5.3	ヨコナデ	黒色処理とミガキ	
第73図-24	SB-2	杯	16.0	6.3	5.6	ヨコナデ	黒色処理とヨコナデ	
第73図-25	SB-3	甕	35.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第73図-26	SB-3	?	24.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第73図-27	SB-3	甕	22.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第73図-28	SB-3	杯	13.2	5.0	3.7	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第73図-29	SB-4	鉢?	29.3			ヨコナデとミガキ	ヨコナデとミガキ	
第73図-30	SB-4	鉢?	28.2			ヨコナデ	ヨコナデとミガキ	
第73図-31	SB-4	鉢?	28.6			ヨコナデ	ヨコナデとミガキ	
第73図-32	SB-4	鉢?	22.8			ヨコナデ	ヨコナデとミガキ	
第73図-33	SB-4	甕	11.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第73図-34	SB-4	杯	14.8	5.8	3.8	ヨコナデ	黒色処理	
第73図-35	SB-4	杯	13.4	5.4	3.8	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第73図-36	SB-4	杯	11.4	5.0	3.0	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第73図-37	SB-4	杯	13.5	5.8	4.0	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第73図-38	SB-4	杯	10.8	4.6	3.0	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第73図-39	SB-4	杯	10.0	3.8	2.6	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第73図-40	SB-4	杯	10.2	5.0	3.1	ヨコナデ	ヨコナデ	
第73図-41	SB-4	杯	13.0	5.0	3.3	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第73図-42	SB-4	杯	9.4	4.4	3.0	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第73図-43	SB-4	杯	11.0	5.0	3.0	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第73図-44	SB-4	杯	11.4	5.8	2.9	ヨコナデ	ヨコナデ	
第73図-45	SB-4	杯	11.0	4.6	2.4	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第73図-46	SB-4	杯	10.8	4.8	2.6	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第73図-47	SB-4	杯	11.2	5.6	3.3	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第73図-48	SB-4	杯	11.2	4.8	2.8	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	
第73図-49	SB-4	杯	10.4	4.6	2.8	ヨコナデ	ヨコナデ	
第73図-50	SB-4	杯	10.1	4.5	2.4	ヨコナデ 底面系切り	ヨコナデ	

図版番号	造構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外 面 調 整		内 面 調 整	備 考
						ヨコナデ	底面糸切り		
第73図-51	SB-4	杯	11.0	5.0	3.0	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第73図-52	SB-4	杯	11.4	6.2	2.8	ヨコナデ		ヨコナデ	
第73図-53	SB-4	杯	13.0	6.6	4.7	ヨコナデ		黒色処理とミガキ	
第73図-54	SB-4	?		10.0		ヨコナデ		ヨコナデとケズリ	
第73図-55	SB-4	杯	16.0	8.8	5.8				縁袖
第74図-56	SB-4	杯	11.4	5.4	3.4	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第74図-57	SB-5	甕	41.3			ヨコナデ	とタタキ		
第74図-58	SB-5	?				ヨコナデ		ヨコナデ	
第74図-59	SB-5	甕				ヨコナデ		ヨコナデ	
第74図-60	SB-5	甕	23.7			ヨコナデ		ヨコナデ	
第74図-61	SB-5	杯	13.2	5.4	4.9	ヨコナデ	底面糸切り	黒色処理	
第74図-62	SB-6	甕	17.0			ヨコナデ		ヨコナデ	
第74図-63	SB-6	甕	12.1			ヨコナデ		ヨコナデ	
第75図-64	SB-6	杯	12.1	4.8	3.3	ヨコナデ	底面糸切り		
第75図-65	SB-7	甕	14.3			ヨコナデ		ヨコナデ	
第75図-66	SB-7	杯	9.3	3.9	3.4	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-67	SB-7	杯	9.3	3.9	2.6	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-68	SB-7	杯	9.0	4.2	2.5	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-69	SB-7	杯	9.6	4.0	3.2	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-70	SB-7	杯	10.0	5.3	2.7	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-71	SB-7	杯	12.4	4.9	4.9	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-72	SB-7	杯	12.3	5.5	5.6	ヨコナデ	底面へラケズリ	黒色処理	黒色処理とヨコナデ
第75図-73	SB-7	杯	13.4	6.6	6.4	ヨコナデ	底面へラケズリ	ヨコナデとミガキ	
第75図-74	SB-7	杯	14.0			ヨコナデ	底面へラケズリ	ヨコナデ	
第75図-75	SB-7	杯	15.0	6.6	6.5	ヨコナデ	底面へラケズリ	ヨコナデ	
第75図-76	SB-7	杯	14.0	8.0	6.3	ヨコナデ		ヨコナデ	
第75図-77	SB-8	甕	21.6			ヨコナデ	とタタキ	ヨコナデ	
第75図-78	SB-8	甕	22.4			ヨコナデ		ヨコナデ	
第75図-79	SB-8	杯	13.1	5.0	3.8	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-80	SB-8	杯	10.6	4.3	2.6	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-81	SB-8	杯	10.4	4.5	2.6	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-82	SB-8	杯	11.1	4.5	3.0	ヨコナデ		ヨコナデ	
第75図-83	SB-8	杯	10.4	4.0	3.0	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-84	SB-8	杯	11.1	5.3	2.9	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-85	SB-8	杯	11.3	5.4	3.1	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-86	SB-8	杯	11.6	5.8	4.5	ヨコナデ	底面へラケズリ	ヨコナデ	
第75図-87	SB-8	杯	12.6			ヨコナデ		ヨコナデ	
第75図-88	SB-10	杯	9.8	5.4	2.7	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-89	SB-10	杯	10.4	5.0	2.3	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-90	SB-12	甕	19.0			ヨコナデ		ヨコナデ	
第75図-91	SB-12	杯	11.2	4.4	2.9	ヨコナデ		ヨコナデ	
第75図-92	SB-12	杯	10.5	4.9	2.8	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-93	SB-12	杯	10.5	4.7	2.6	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-94	SB-12	杯	10.3	4.4	2.7	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-95	SB-12	杯	11.6	5.0	3.0	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-96	SB-12	杯	10.6	4.5	2.7	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-97	SB-12	杯	10.6	4.8	3.0	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-98	SB-12	杯	11.0	4.6	3.1	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-99	SB-12	杯	11.0	5.0	3.0	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-100	SB-12	杯	10.4	4.0	2.6	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第75図-101	SB-12	杯	11.8			ヨコナデ		黒色処理	

図版番号	遺構名	器種分類	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	備考
			cm	cm	cm			
第75図-102	SB-12	杯	13.0	6.2	5.1	ヨコナデ		
第75図-103	SB-12	杯	15.2	7.4	6.7	ヨコナデ	黒色処理とミガキ	
第76図-104	SB-12	杯	15.0	7.0	6.2	ヨコナデ	ヨコナデ	
第76図-105	SB-13	甕	21.8			ヨコナデとタタキ	ヨコナデ	
第76図-106	SB-13	杯	10.7	4.4	2.9	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第76図-107	SB-13	杯	10.2	4.1	2.6	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第76図-108	SB-13	杯	11.0	5.0	3.3	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第76図-109	SB-14	杯	13.8	5.5	3.7	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第76図-110	SB-15	甕	16.5			ヨコナデ	ヨコナデ	
第76図-111	SB-15	甕	28.4			ヨコナデ	ヨコナデ	
第76図-112	SB-15	杯	13.5	5.0	3.7	ヨコナデ 底面糸切り	黒色処理	
第76図-113	SB-15	杯	13.4	5.7	3.8	ヨコナデ 底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第76図-114	SB-15	杯	15.8	7.3	4.6	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第76図-115	SB-15	杯	15.7	6.2	4.5	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第76図-116	SB-16	甕	22.4	2.0	33.3	ヨコナデとケズリ	ヨコナデとハケ	
第76図-117	SB-16	甕	22.0				カキメ	
第76図-118	SB-16	甕	13.6	6.5	11.1	ヨコナデ 底面ヘラケズリ	ヨコナデ	
第76図-119	SB-16	甕	24.6			ヨコナデとケズリ	ヨコナデ	
第76図-120	SB-16	杯	13.7	5.8	3.9	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第76図-121	SB-16	杯	10.0	6.8	4.1	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第76図-122	SB-16	杯	17.2	7.0	6.9	ヨコナデ	黒色処理とミガキ	須恵器
第76図-123	SB-16	杯	17.8	7.9	6.7	ヨコナデ 底面ヘラケズリ	黒色処理とミガキ	
第76図-124	SB-16	杯	17.8	8.3	5.7	ヨコナデ 底面ヘラケズリ	黒色処理	
第76図-125	SB-16	蓋	13.9	3.4	3.0	ヨコナデ	ヨコナデ	
第76図-126	SB-16	蓋	13.7	4.2	3.2	ヨコナデ	ヨコナデ	須恵器
第76図-127	SB-17	蓋	17.7	4.6	3.0	ヨコナデ	ヨコナデ	須恵器
第76図-128	SB-17	甕	21.6			ヨコナデ	ヨコナデとカキメ	
第77図-129	SB-17	甕	24.4			ヨコナデ	ヨコナデ	
第77図-130	SB-17	甕	23.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第77図-131	SB-17	甕	22.8			ヨコナデとケズリ	口縁部ヨコナデ、カキメ	
第77図-132	SB-17	甕	20.6				カキメ	
第77図-133	SB-17	甕	21.1			ヨコナデ	ヨコナデとカキメ	
第77図-134	SB-17	甕	20.4			ヨコナデ	ヨコナデとカキメ	
第77図-135	SB-17	甕	13.8			ヨコナデ	ヨコナデ	
第77図-136	SB-17	杯	15.2	5.8	6.0	ヨコナデ 底面ヘラケズリ	黒色処理とミガキ	
第77図-137	SB-17	杯	13.9	6.5	3.8	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第77図-138	SB-25	杯	9.3	5.6	2.5	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	須恵器
第77図-139	SB-34	甕	22.8			ヨコナデ	ヨコナデ	
第77図-140	SB-34	杯	13.5	5.9	3.3	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第77図-141	SB-34	杯	13.3	5.0	3.5	ヨコナデ 底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第77図-142	SB-34	杯	13.7	6.0	3.4	ヨコナデ 底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第77図-143	SB-34	杯	13.2	6.3	3.7	ヨコナデ 底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第77図-144	SB-34	杯	12.8	5.5	3.7	ヨコナデ 底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第77図-145	SB-34	杯	13.0	5.4	4.3	ヨコナデ 底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第77図-146	SB-48	甕	24.6			ヨコナデ	ヨコナデ	
第77図-147	SB-48	甕	25.4			ヨコナデ	ヨコナデ	
第77図-148	SB-48	甕	23.7			ヨコナデ	ヨコナデ	
第77図-149	SB-48	甕	22.3			ヨコナデ	ヨコナデ	
第77図-150	SB-48	甕	12.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第77図-151	SB-48	杯	12.5	5.8	3.9	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第78図-152	SB-48	杯	12.8	5.0	3.7	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	

図版番号	遺構名	器種分類	口径	底径	器高	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
			cm	cm	cm			
第78図-153	SB-49	壺	21.7			ヨコナデとケズリ	ヨコナデとカキメ	
第78図-154	SB-49	壺	23.7			ヨコナデとケズリ	ヨコナデとカキメ	
第78図-155	SB-49	壺	11.3			ヨコナデ	ヨコナデ	
第78図-156	SB-49	壺	20.4			ヨコナデとケズリ	ヨコナデとカキメ	
第78図-157	SB-49	壺	26.2			ヨコナデとケズリ	ヨコナデとカキメ	
第78図-158	SB-49	壺	26.9			ヨコナデとケズリ	カキメ	
第78図-159	SB-52	壺	26.6			ヨコナデとタタキ	ヨコナデ	
第78図-160	SB-53	杯	9.5	4.0	2.9	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第78図-161	SB-53	杯	9.0	4.0	2.8	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第78図-162	SB-53	杯	15.0	5.2	6.1	ヨコナデ 底面ヘラケズリ	黒色処理とミガキ	
第78図-163	SB-53	杯	14.3	6.0	6.7	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第78図-164	SB-53	杯	14.2	6.5	6.3	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第78図-165	SB-54	壺	20.4			ヨコナデ	ヨコナデ	
第78図-166	SB-54	羽釜	28.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第78図-167	SB-55	壺	22.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第79図-168	SB-55	壺	24.0			ヨコナデとケズリ	ヨコナデとハケ	
第79図-169	SB-55	壺	19.6			ヨコナデとケズリ	ヨコナデ	
第79図-170	SB-55	壺	23.8			ヨコナデとケズリ	ヨコナデ	
第79図-171	SB-55	杯	13.8	4.5	3.9	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第79図-172	SB-56	杯	10.2	5.0	1.6		ヨコナデ	
第79図-173	SB-57	羽釜	23.8			ヨコナデとタタキ	ヨコナデ	
第79図-174	SB-57	杯	9.1	3.5	2.9	ヨコナデとタタキ	ヨコナデ	
第79図-175	SB-57	杯	10.0	4.0	3.1	ヨコナデ	ヨコナデ	
第79図-176	SB-57	杯	14.4	7.0	6.5	ヨコナデ 底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第79図-177	SB-62	杯	10.0	4.8	3.7	ヨコナデ 底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第79図-178	SB-64	壺	25.5		32.2	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第79図-179	SB-64	壺	22.4			ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第79図-180	SB-64	壺	22.3			ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第79図-181	SB-64	杯	10.4	4.4	2.3	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第79図-182	SB-64	杯	10.4	5.0	2.5	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第79図-183	SB-64	杯	10.7	4.6	2.7	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第79図-184	SB-64	杯	11.5	5.0	2.8	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第79図-185	SB-64	杯	10.7	5.0	3.2	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第79図-186	SB-64	杯	12.6	5.0	3.5	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第79図-187	SB-64	杯	13.4	6.0	3.7	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第79図-188	SB-64	杯	11.6	6.3	4.5	ヨコナデ	黒色処理	
第79図-189	SB-64	杯	13.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第80図-190	SB-64	杯	14.6	8.1	5.9	ヨコナデ	ヨコナデ	
第80図-191	SB-67	壺	26.0			ヨコナデとタタキ	ヨコナデ	
第80図-192	SB-67	壺	22.6			ヨコナデとタタキ	ヨコナデ	
第80図-193	SB-67	壺	22.2	2.0	28.0	ヨコナデとタタキ	ヨコナデ	
第80図-194	SB-67	杯	12.0	5.7	2.4	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第80図-195	SB-67	杯	11.2	5.2	2.6	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第80図-196	SB-67	杯	13.2	6.2	3.2	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第80図-197	SB-67	杯	14.2	6.2	3.8	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第80図-198	SB-67	杯	14.4	5.7	4.2	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第80図-199	SB-67	杯	13.8	6.2	3.6	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第80図-200	SB-67	杯	13.8	5.8	3.5	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第80図-201	SB-67	杯	14.8	7.8	6.9	ヨコナデ	黒色処理	
第79図-202	SB-85	杯	12.0					
第80図-203	SB-85	杯	12.0	4.8	3.0	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	

図版番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外面調整		内面調整	備考
						ヨコナデ	底面糸切り		
第80図-204	SB-85	杯	9.7	4.2	2.4	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第80図-205	SB-86	甕	22.6			ヨコナデとケズリ、ミガキ		ヨコナデ	
第80図-206	SB-86	甕	22.8			ヨコナデとタタキ		ヨコナデ	
第81図-207	SB-86	甕	17.5			ヨコナデ		ヨコナデ	
第81図-208	SB-86	甕	18.0			ヨコナデ		ヨコナデ	
第81図-209	SB-86	甕	13.3	5.4	11.0	ヨコナデ	底面糸切り 錐形刃削あり	ヨコナデ	
第81図-210	SB-86	杯	11.9			ヨコナデ		ヨコナデ	
第81図-211	SB-86	杯	15.6	7.2	6.1	ヨコナデ	底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第81図-212	SB-86	杯	14.4	6.5	6.7	ヨコナデ	底面ヘラオコシ	ミガキ	
第81図-213	SB-88	甕	25.0						
第81図-214	SB-88	甕	22.2			ヨコナデ		ヨコナデ	
第81図-215	SB-88	甕	11.0			ヨコナデ		ヨコナデ	
第81図-216	SB-88	甕	25.7			ヨコナデ		ヨコナデ	
第81図-217	SB-88	甕	13.8			ヨコナデ		ヨコナデ	
第81図-218	SB-88	甕	13.4			ヨコナデ		ヨコナデ	
第81図-219	SB-88	杯	12.6	5.5	3.5	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第81図-220	SB-88	杯	13.4	4.9	3.8	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第81図-221	SB-88	杯	12.3	5.5	3.0	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第81図-222	SB-88	杯	12.5	5.5	3.2	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第81図-223	SB-88	杯	12.5	5.2	3.5	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第81図-224	SB-88	杯	13.1	5.3	4.4	ヨコナデ	底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第81図-225	SB-111	甕	21.7			ヨコナデ		ヨコナデ	
第81図-226	SB-111	甕	22.4			ヨコナデ		ヨコナデ	
第81図-227	SB-111	甕	25.0					カキメ	
第81図-228	SB-111	甕	19.2			ヨコナデとケズリ		ヨコナデ	
第82図-229	SB-111	甕	24.2			ヨコナデとケズリ、ハケ日あり		ヨコナデとカキメ	
第82図-230	SB-111	甕	22.6			ヨコナデ		ヨコナデ	
第82図-231	SB-111	甕	25.0						
第82図-232	SB-111	甕	22.2			ヨコナデとケズリ		ヨコナデ	
第82図-233	SB-111	甕	22.6			ヨコナデ		ヨコナデ	
第82図-234	SB-111	甕	22.0			ヨコナデ		ヨコナデ	
第82図-235	SB-111	甕	12.0			ヨコナデ		ヨコナデ	
第82図-236	SB-111	甕	21.6			ヨコナデ		ヨコナデ	
第82図-237	SB-111	甕	12.2	6.4	11.7	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第82図-238	SB-111	甕	6.8			ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第82図-239	SB-111	杯	13.1	5.5	3.7	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第82図-240	SB-111	杯	13.2	5.5	3.8	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデとミガキ	
第82図-241	SB-111	杯	13.6	5.4	3.7	ヨコナデ	底面糸切り	ヨコナデ	
第82図-242	SB-111	杯	12.9	6.5	4.0	ヨコナデ		ヨコナデとミガキ	
第82図-243	SB-111	杯	16.1	6.0	4.8	ヨコナデ	底面糸切り	ミガキ	
第82図-244	SB-111	杯	13.2	5.0	3.9	ヨコナデ	底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第82図-245	SB-111	杯	12.4	4.8	4.1	ヨコナデ	底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第82図-246	SB-111	杯	12.4	5.6	3.7	ヨコナデ	底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第82図-247	SB-111	杯	12.8	5.4	4.3	ヨコナデ	底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第82図-248	SB-111	杯	12.4	5.6	4.4	ヨコナデ	底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第82図-249	SB-111	杯	13.2	5.7	2.0	ヨコナデ		黒色処理とミガキ	
第82図-250	SB-111	杯	18.2	8.4	6.2	ヨコナデ		ヨコナデ	灰軸
第82図-251	SB-114	甕	22.0			ヨコナデとケズリ		ヨコナデ	
第83図-252	SB-114	甕	25.5						
第83図-253	SB-114	甕	19.6			ヨコナデとケズリ		ヨコナデ	
第83図-254	SB-114	甕	26.0			ヨコナデ		ヨコナデ	

図版番号	遺構名	器種分類	口径	底径	器高	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
			[cm]	[cm]	[cm]			
第83図-255	SB-114	甕	10.8	5.8	11.8	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第83図-256	SB-114	甕	12.0	7.0	10.9	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第83図-257	SB-114	注口土器	23.4	11.2	10.0	ヨコナデ	ヨコナデとミガキ	
第83図-258	SB-114	杯	13.7	5.3	4.9	ヨコナデ 底面糸切り	黒色処理とミガキ	
第83図-259	SB-117	杯	9.4	4.4	2.7	ヨコナデ	ヨコナデ	
第83図-260	SB-117	杯	9.2	3.6	2.9	底面糸切り		
第83図-261	SB-117	杯	9.6	3.8	2.7	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第83図-262	SB-117	杯	11.6	4.9	3.8	ヨコナデ	ヨコナデ	
第83図-263	SB-117	杯	13.6	5.2	3.8	ヨコナデ		
第83図-264	SB-117	杯	15.0					灰釉
第83図-265	SB-117	杯	14.9	7.1	6.5	ヨコナデ	黒色処理	
第83図-266	SB-117	杯	14.4	7.0	6.2	ヨコナデ	黒色処理とミガキ	
第83図-267	SB-118	甕	23.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第83図-268	SB-118	甕	20.0					
第83図-269	SB-118	杯	13.2	5.6	3.6	ヨコナデ	ヨコナデとミガキ	
第83図-270	SB-118	杯	11.4	4.6	3.3	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ	
第83図-271	SB-118	杯	11.9	4.5	3.3	ヨコナデ 底面糸切り	ヨコナデ ユビナデ痕あり	
第83図-272	SB-118	杯	15.0	5.4	4.7	ヨコナデ 底面糸切り	黒色処理	

第8表 平安時代以降の土器観察表

図版番号	遺構名	器種分類	口径	底径	器高	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
			cm	cm	cm			
第84図-1		甕	39.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第84図-2		甕	19.6			ヨコナデ	ヨコナデ	
第84図-3		甕	32.5			ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	珠洲焼 須恵器
第84図-4		甕	14.3			タタキ目		
第84図-5		甕	21.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第84図-6		甕	21.6			ヨコナデ	ヨコナデ	
第84図-7		甕	19.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第84図-8		甕	20.8			ヨコナデ	ヨコナデ、カキメ	
第84図-9		甕	23.3				カキメ	
第84図-10		甕	29.0			ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
第84図-11		甕	23.2			ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
第84図-12		甕	25.7			ヨコナデ	ヨコナデ	
第84図-13		甕	21.8			ヨコナデ	ヨコナデ、カキメ	
第84図-14		甕	25.4			ヨコナデ	ヨコナデ	
第84図-15		甕	19.0				カキメ	
第84図-16		甕	13.6			ヨコナデ	ヨコナデ	
第85図-17		甕	25.7			ヨコナデ	ヨコナデ	
第85図-18		甕	26.4			ヨコナデ	ヨコナデ	
第85図-19		甕	21.6			ヨコナデ	ヨコナデ	
第85図-20		甕	19.8	24.0		ヨコナデ、タタキ目	ヨコナデ	
第85図-21		甕	21.8			ヨコナデ、タタキ目	ヨコナデ	
第85図-22		甕	23.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第85図-23		甕	26.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第85図-24		甕	23.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第85図-25		甕	26.3			ヨコナデ	ヨコナデ	
第85図-26		甕	24.4				カキメ	
第85図-27		甕	22.6			ヨコナデ	ヨコナデ	
第85図-28		甕	24.8					
第86図-29		甕	21.7			ヨコナデ、タタキ目	ヨコナデ	
第86図-30		甕	24.5			ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図-31		甕	22.8			ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図-32		甕	14.4	6.0	11.7	ケズリ		
第86図-33		甕	20.6			ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図-34		甕	15.0			ヨコナデ、ミガキ	口縁部ヨコナデ	
第86図-35		甕	21.9			ヨコナデ	ヨコナデ、カキメ	
第86図-36		甕	12.3			ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図-37		甕	20.3			ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図-38		甕	23.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図-39		甕	13.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図-40		甕	22.0			ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図-41		甕	28.6			ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図-42		甕	22.6			ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図-43		甕		24.6				
第86図-44		甕	15.5			ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
第86図-45	?	甕	14.0			口縁部ヨコナデ、タタキ目	口縁部ヨコナデ	
第86図-46		甕	20.5				口縁部ミガキ	
第86図-47		甕		6.0		ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図-48		甕		13.4		ケズリ		
第87図-49		杯	8.9	4.6	1.9	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-50		杯	9.0	3.7	1.6	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	

図版番号	造形名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
第87図-51		杯	8.2	3.8	2.9	ヨコナデ	ヨコナデ	
第87図-52		杯	8.9	4.0	2.2	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-53		杯	9.2	3.9	2.4	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-54		杯	8.9	4.2	2.2	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-55		杯	9.2	4.0	3.1	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-56		杯	9.0	3.6	3.2	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-57		杯	9.2	3.6	2.8	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-58		杯	9.6	4.2	2.3	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-59		杯	9.2	4.2	2.4	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-60		杯	10.6	4.8	2.6	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-61		杯	11.6	5.9	2.5	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-62		杯	10.4	4.0	2.7	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-63		杯	11.0	4.0	2.7	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-64		杯	11.0	5.2	3.1	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-65		杯	11.0	5.0	2.5	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-66		杯	11.4	5.0	2.9	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-67		杯	11.0	4.3	2.8	ヨコナデ	ヨコナデ	
第87図-68		杯	10.8	4.4	2.8	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-69		杯	12.0	5.9	2.7	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-70		杯	10.6	4.4	2.5	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-71		杯	10.4	4.2	2.4	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-72		杯	11.6	4.7	3.0	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-73		杯	11.2	5.8	3.0	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-74		杯	12.2	5.0	3.6	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-75		杯	12.9	6.2	3.7	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-76		杯	12.4	5.0	3.3	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-77		杯	13.0	5.1	3.4	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-78		杯	12.2	5.4	3.5	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	須恵器
第87図-79		杯	11.4	4.8	3.0	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-80		杯	12.2	6.0	3.4	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	須恵器
第87図-81		杯	13.1	5.0	3.8	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-82		杯	12.2	5.2	4.5	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-83		杯	13.8	6.0	3.9	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-84		杯	14.0	5.0	3.1	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-85		杯	13.1	5.1	3.5	ヨコナデ 底部糸切り	ミガキ	
第87図-86		杯	14.1	5.9	3.8	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-87		杯	14.0	6.8	3.1	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	
第87図-88		杯	14.6	6.5	4.0	ヨコナデ 底盤へラケヅリ	ヨコナデ	
第87図-89		杯	13.8	7.3	4.0	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	須恵器
第87図-90		杯	13.2	5.4	4.1	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理とミガキ	
第87図-91		杯	13.6	5.0	4.5	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理とミガキ	
第87図-92		杯	13.6	4.5	4.5	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理とミガキ	
第87図-93		杯	14.4	6.0	4.3	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理とミガキ	
第87図-94		杯	13.9	6.7	3.8	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理とミガキ	須恵器
第87図-95		杯	14.5	6.8	3.7	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理とミガキ	
第87図-96		杯	12.4	6.9	3.8	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	須恵器
第87図-97		杯	15.4	7.1	4.1	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理とミガキ	
第87図-98		杯	12.8	6.0	4.0	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理	
第87図-99		杯	13.5	5.2	3.7	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理とミガキ	
第87図-100		杯	17.1	6.3	6.9	ヨコナデ	黒色処理とミガキ	
第87図-101		杯	17.0	6.8	5.6	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデとミガキ	

図版番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
第87図-102		杯	13.0	6.4	4.3	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理とミガキ	
第87図-103		杯	13.6	5.8	3.9	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理とミガキ	
第87図-104		杯	14.4	7.0	4.5	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理とミガキ	
第87図-105		杯	13.9	5.5	4.3	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理とミガキ	
第87図-106		杯	12.6	6.0	3.9	ヨコナデ 底部糸切り	黒色処理とミガキ	
第87図-107		杯	16.0	6.2	5.5	ヨコナデ 底部糸切り	ミガキ	
第87図-108		杯	9.6	6.2	3.3	ヨコナデ	ヨコナデ	
第87図-109		杯	11.5	6.2	2.0	ヨコナデ	ヨコナデ	灰釉
第87図-110		杯	11.0	5.4	2.3			灰釉
第87図-111		杯	13.0	7.0	2.5	ヨコナデ 底部糸切りとナデ	ヨコナデ	綠釉
第87図-112		杯	14.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第87図-113		杯	9.7	4.7	3.6	ヨコナデ	ヨコナデ	
第87図-114		杯	10.0	4.8	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ	灰釉
第87図-115		杯	12.0	6.0	2.5	ヨコナデ	ヨコナデ	灰釉
第87図-116		杯		6.2		ヨコナデ		
第88図-117		杯	15.7	7.6	6.1	ヨコナデ	ヨコナデ	須恵器
第88図-118		杯	15.0	6.7	6.3	ヨコナデ	ヨコナデとミガキ	
第88図-119		杯		8.6		ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデ	綠釉
第88図-120		杯	13.6			ヨコナデ	黒色処理とミガキ	
第88図-121		杯	15.7	7.3	5.7	ヨコナデ 底部糸切り	ヨコナデとミガキ	
第88図-122		杯	16.0	8.0	7.0	ヨコナデ		
第88図-123		杯	16.6	9.4	6.6	ヨコナデ	ヨコナデ	須恵器
第88図-124		杯	10.3	5.1	4.6	ヨコナデ	黒色処理	
第88図-125		杯	10.6	3.6	5.5	ヨコナデ	黒色処理とミガキ	
第88図-126		杯	15.0			ヨコナデ	黒色処理	
第88図-127		杯	14.6	6.0	6.6	ヨコナデ	黒色処理とミガキ	
第88図-128		蓋		13.8	3.0	ヨコナデ	ヨコナデ	須恵器
第88図-129		羽釜	32.2			ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
第88図-130		羽釜				ヨコナデ、タタキ目		
第88図-131		羽釜	23.8			ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
第88図-132		羽釜	27.4					
第88図-133		羽釜	19.5			ヨコナデ	ヨコナデ	
第88図-134		羽釜	27.2			ヨコナデ	ヨコナデ	
第88図-135		羽釜	25.7			ヨコナデ	ヨコナデ	
第88図-136	?		21.5			ヨコナデ	ヨコナデ	
第89図-137		羽釜	21.8			ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
第89図-138	?			18.6		ヨコナデ	ヨコナデ	

第9表 石器觀察表

図版番号	遺構名	器種分類	長さ	幅	厚さ	備考
			cm	cm	cm	
第90図-1		打製石鏃	3.0	1.6	0.5	
第90図-2		打製石鏃	2.8	1.6	0.5	
第90図-3		打製石鏃	2.9	1.5	0.6	
第90図-4	SB-111	打製石鏃	2.5	1.6	0.4	
第90図-5		打製石鏃	2.5	1.5	0.5	
第90図-6		打製石鏃	2.1	1.4	0.4	
第90図-7		打製石鏃	2.2		0.4	
第90図-8	SB-62	磨製石鏃	2.5	1.4	0.3	有孔
第90図-9		打製石鏃	2.2	1.4	0.5	
第90図-10		打製石鏃	3.9	1.6	0.6	
第90図-11	SB-14	打製石鏃	3.4	1.5	0.7	
第90図-12		打製石鏃	(4.5)	1.6	0.5	
第90図-13		打製石鏃	3.2	2.3	0.5	
第90図-14		打製石鏃	2.8	2.0	0.6	
第90図-15		打製石鏃	3.1	1.7	0.5	
第90図-16		打製石鏃	2.2	1.5	0.5	
第90図-17		打製石鏃	3.0	1.4	0.5	
第90図-18		打製石鏃	2.6	1.5	0.4	
第91図-19		打製石鏃	2.2	1.4	0.4	
第91図-20		打製石鏃		1.3	0.6	
第91図-21		打製石鏃	2.0	0.8	0.3	
第91図-22	SB-7	石匙		2.4	0.5	
第91図-23		剥片	2.3	1.9	0.7	
第91図-24		剥片	1.8	1.3	0.4	
第91図-25	SK-188	剥片	1.8	1.9	0.4	
第91図-26			5.0	1.9	1.1	
第91図-27			4.0	2.4	0.9	
第91図-28		磨製石鏃未製品?	3.9	1.6	0.4	
第91図-29		搔器	4.0	5.1	1.1	
第91図-30	SK-223		3.6	1.7	0.5	
第91図-31		剥片	2.2	1.7	1.2	
第92図-32	SB-5	石斧	4.1	4.1	1.0	
第92図-33		勾玉	2.8	1.9	0.8	
第92図-34		磨製石斧	(3.1)	2.7	0.6	
第92図-35		磨製石斧	(3.2)	3.1	0.4	
第92図-36		磨製石斧	(2.6)	3.3	0.7	
第92図-37	SK-203	磨製石斧	(3.0)	2.0	1.1	
第92図-38		磨製石斧未製品?		1.7	0.3	
第92図-39		磨製石斧	(2.2)	1.2	0.5	
第92図-40		管玉	2.4	0.6		
第92図-41		管玉	1.2	0.3		
第92図-42		管玉	1.0	0.3		
第92図-43	SB-4	管玉	0.8	0.3		
第92図-44		管玉	0.8	0.3		
第92図-45		管玉	0.7	0.4		
第92図-46	SQ-62	磨製石斧	(2.3)	1.2	0.3	
第92図-47		管玉	2.6	0.7		
第92図-48		管玉	2.6	0.6		
第92図-49		管玉	1.9	0.6		
第92図-50	SQ-90	管玉	1.0	0.4		

図版番号	遺構名	器種分類	長さ	幅	厚さ	備考
			cm	cm	cm	
第92図-51	SQ-90	管玉	0.9	0.3		
第92図-52	SQ-90	管玉	0.9	0.3		
第92図-53	SQ-90	管玉	0.8	0.3		
第92図-54	SQ-90	管玉	0.8	0.3		
第92図-55	SQ-90	管玉	0.9	0.3		
第92図-56	SQ-90	管玉	0.8	0.3		
第93図-57	SB-143	打製石鎌	7.3	4.7	1.6	
第93図-58	SB-117	打製石斧	8.0	5.0	1.4	
第93図-59			7.1	5.1	1.9	
第93図-60		打製石斧	(11.9)	8.7	2.5	
第93図-61		磨製石斧	16.3	4.9	2.2	
第93図-62		磨製石斧	20.2	4.3	2.4	有孔
第93図-63		磨製石斧	(17.5)	7.1	4.9	
第93図-64	SQ-62	磨製石斧	(13.6)	6.7	4.4	
第93図-65		磨製石斧	(8.8)	7.2	4.3	
第93図-66		磨製石斧	(7.6)	6.8	4.9	
第93図-67	SB-12	磨製石斧	(12.9)	7.7	5.4	
第94図-68		打製刃器	18.9	9.8	2.1	
第94図-69	SB-143	打製刃器	20.1	8.6	2.3	
第94図-70	SK-126	打製刃器	19.3	13.3	3.5	
第94図-71		石包丁	(13.6)	5.9	0.8	
第94図-72	SB-15	砥石	11.4	6.3	4.9	
第94図-73	SB-48	砥石	6.5	5.0	3.0	
第94図-74		砥石	5.6	4.0	2.5	
第94図-75	SB-5	砥石	8.9	6.3	3.3	
第94図-76		砥石	7.0	5.6	2.2	
第95図-77	SB-55	砥石	13.4	6.3	5.5	
第95図-78		磨石	(10.1)	(7.2)	4.4	
第95図-79	SB-55	砥石	7.6	6.9	4.0	
第95図-80		石皿	(10.5)	(7.8)	3.3	
第95図-81		石皿	(11.5)	(12.9)	3.5	
第95図-82		多孔石	21.0	13.0	8.0	
第96図-83	SB-8	石皿?	21.0	8.6	5.0	
第96図-84		石皿?	13.7	8.2	7.1	
第96図-85		石皿?	21.0	12.1	9.5	

写 真 図 版

写真 1
作業風景 1



写真 2
作業風景 2



写真 3
作業風景 3



写真4
作業風景4



写真5
第1号住居跡

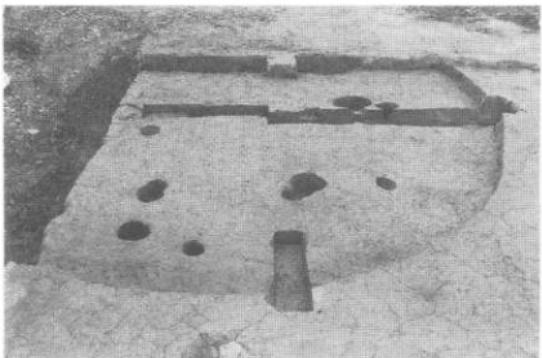


写真6
第2号住居跡

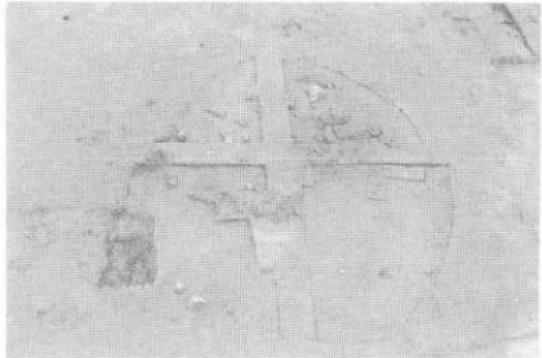


写真 7
第3号住居跡

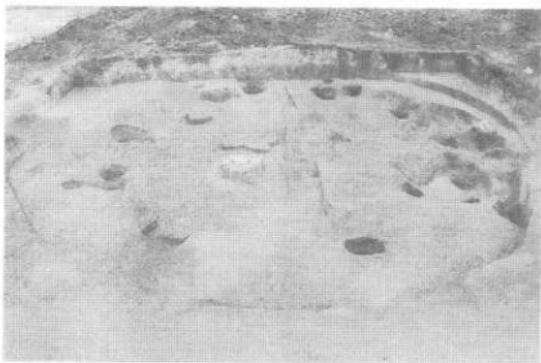


写真 8
第4、5、16号住居跡

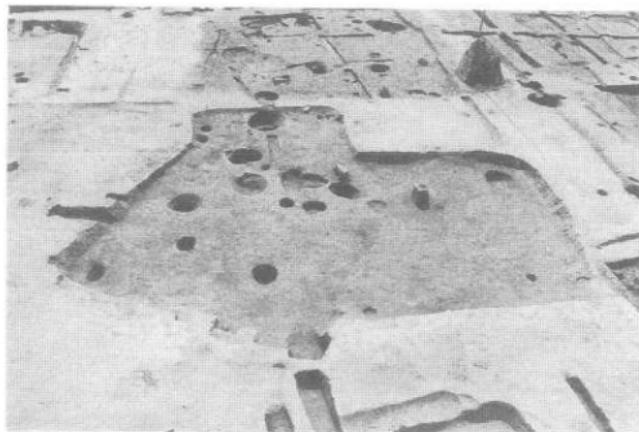


写真 9
第4号住居跡

